

京都府遺跡調査報告集

第196冊

1. 長岡京跡右京第1282次(7 ANHHT-1)・
井ノ内遺跡
2. 芝山遺跡・芝山古墳群第22次(X-3区)

2025

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター



調査地遠景(南西から)



埋葬施設 S X10木棺内遺物出土状況

序

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センターは、昭和56年に設立されて以来、京都府内の公共事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を行うとともに、その成果を広く公開し、考古学・歴史学研究や地域の歴史教育などに活用していただけるように、さまざまな取り組みを実施してまいりました。これまで発掘調査を実施したすべての遺跡の調査報告は、『京都府遺跡調査報告書』『京都府遺跡調査概報』『京都府遺跡調査報告集』として刊行し、それぞれの遺跡がもつ考古学的・歴史学的な重要性について報告を行ってきたところです。

さて、本冊で報告する長岡京跡右京第1282次調査は、京都府の道路建設に伴い京都府乙訓土木事務所の依頼を受けて実施しました。また、城陽市芝山V-2号墳の調査は、新名神高速道路整備事業に伴い西日本高速道路株式会社の依頼を受けて実施しました。このたび、発掘調査ならびに整理等作業が完了しましたので、『京都府遺跡調査報告集第196冊』として刊行する運びとなりました。

ここで報告する長岡京跡右京第1282次の調査地は、右京三条四坊二・七町推定地にあたり、長岡京期の掘立柱建物をはじめ、飛鳥時代の竪穴建物や平安時代後期の井戸などを検出しました。また、折敷の底板や毬杖の毬などの木製品も出土しており、重複する井ノ内遺跡の当該地における状況を確認することができました。一方、芝山V-2号墳は、古墳時代後期中頃に築造された直径19mの円墳です。ほぼ同時期の木棺直葬の埋葬施設2基が、同一墳丘に構築されており、芝山古墳群の中では最大規模を有することが判明しました。

以上の調査成果は、今後、それぞれの遺跡が立地する地域の歴史や日本史研究を進めるうえで重要な考古学的成果となることを確信しています。

最後になりましたが、発掘調査をご依頼いただきました京都府乙訓土木事務所ならびに西日本高速道路株式会社をはじめ、多くの関係各位に厚く感謝するとともに、心より御礼を申し上げます。

令和7年3月

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター
理 事 長 井 上 満 郎

例 言

1. 本書に収めた報告は下記のとおりである。

(1) 長岡京跡右京第1282次(7 ANHHT-1)・井ノ内遺跡発掘調査報告

(2) 芝山遺跡・芝山古墳群第22次(X-3区)発掘調査報告

2. 遺跡の所在地、調査期間、経費負担者及び報告の執筆者は下表のとおりである。

遺 跡 名	所 在 地	現地調査期間	経費負担者	執筆者
長岡京跡右京 第1282次(7 ANHHT-1)・ 井ノ内遺跡	長岡京市粟生畑ヶ田	令和5年11月6日～ 令和6年2月9日	京都府乙訓 土木事務所	松井 忍
芝山遺跡・芝山 古墳群第22次	城陽市富野上ノ芝	令和5年8月17日～ 令和5年10月30日	西日本高速 道路株式会社	小泉裕司

3. 本書で使用している座標は、世界測地系国土座標第VI座標系によっており、方位は座標の北をさす。また、国土地理院発行地形図の方位は経度の北をさす。

4. 土層断面等の土色や出土遺物の色調は農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帖』を使用した。

5. 本書の編集は、調査課調査担当者の編集原案をもとに、調査課編集担当が行った。

6. 現場写真は調査担当者が撮影し、遺物撮影は、調査課企画調整係武本典子が行った。

本文目次

1. 長岡京跡右京第 1282 次 (7 ANHHT-1)・井ノ内遺跡発掘調査報告	
1. はじめに	1
2. 位置と環境	2
3. 調査の経緯と方法	3
1) トレンチ名・地区(グリッド)名について	4
2) 遺構番号について	5
4. 調査概要	
1) 1 トレンチ	5
2) 2 トレンチ	5
3) 3-1 トレンチ	5
4) 3-2 トレンチ	5
5) 4 トレンチ	8
5. 基本層序	8
6. 検出遺構	
1) 中世	9
2) 長岡京期から平安時代	11
3) 飛鳥時代	16
4) 古墳時代	19
5) 時期不明	19
7. 出土遺物	
1) 土器・土製品	19
2) 瓦	27
3) 石製品	27
4) 木製品	27
8. まとめ	29
2. 芝山遺跡・芝山古墳群第22次(X-3区)発掘調査報告	
1. はじめに	39
2. 遺跡の地理的・歴史的環境	41
3. 調査区並びに基本層序	
1) 調査区	43
2) 基本層序	43

4. 検出遺構-----	43
1) V - 2号墳-----	46
2)その他の遺構-----	54
5. 出土遺物-----	54
6. 調査の成果-----	58
付編 1. 芝山古墳群V - 2号墳埋葬施設から出土した赤色顔料の分析-----	64
付編 2. 芝山古墳群V - 2号墳埋葬施設出土のガラス製小玉の蛍光X線分-----	65

挿 図 目 次

1. 長岡京跡右京第1282次(7 A N H H T - 1)・井ノ内遺跡発掘調査報告

第1図 調査地の位置-----	1
第2図 周辺地形分類図-----	2
第3図 調査地周辺の遺跡-----	3
第4図 トレンチ配置図-----	3
第5図 地区割り設定図-----	4
第6図 1・2トレンチ遺構配置図-----	6
第7図 3・4トレンチ遺構配置図-----	7
第8図 各トレンチ柱状図-----	8
第9図 掘立柱建物S B 23平・断面図-----	9
第10図 掘立柱建物S B 131・S B 132平・断面図-----	10
第11図 掘立柱建物S B 01・S B 103平・断面図-----	12
第12図 柱穴列S A 111平・断面図-----	13
第13図 井戸S E 101平面図-----	14
第14図 井戸S E 101断面図-----	15
第15図 竪穴建物S H 102平・断面図-----	17
第16図 土坑S K 112・S K 123、掘立柱建物S B 107平・断面図-----	18
第17図 出土土器実測図1(中世)-----	20
第18図 出土土器実測図2(長岡京期・平安時代)-----	21
第19図 出土土器実測図3(平安時代S E 101 - 1)-----	23
第20図 出土土器実測図4(平安時代S E 101 - 2)-----	24
第21図 出土土器実測図5(古墳時代・飛鳥時代)-----	25
第22図 出土土器実測図6(包含層・その他)-----	26
第23図 出土瓦・石製品実測図-----	27

第24図	出土木製品実測図1	-----	28
第25図	出土木製品実測図2	-----	29
第26図	調査地周辺の遺構変遷図	-----	30
2. 芝山遺跡・芝山古墳群第22次(X-3区)発掘調査報告			
第1図	調査地の位置	-----	39
第2図	周辺遺跡分布図	-----	42
第3図	芝山遺跡・芝山古墳群全調査区配置図	-----	44
第4図	芝山古墳群支群分布図	-----	45
第5図	X-3区トレンチ平面図	-----	46
第6図	X-3区調査トレンチ南壁土層図・周溝S D02土層図	-----	47
第7図	V-2号墳上層埋葬施設S X01平・断面図	-----	48
第8図	V-2号墳上層埋葬施設(S X01)副葬品出土状況図	-----	49
第9図	V-2号墳下層埋葬施設S X10平・断面図	-----	51
第10図	V-2号墳下層埋葬施設S X10副葬品出土状況図	-----	53
第11図	V-2号墳出土遺物1(埋葬施設S X01)	-----	55
第12図	V-2号墳出土遺物2(埋葬施設S X10)	-----	56
第13図	V-2号墳出土遺物3(埋葬施設S X10、周溝S D02)	-----	57
第14図	V-2号墳出土遺物4(埋葬施設S X10)	-----	58
第15図	V-2号墳出土遺物5(埋葬施設S X10)	-----	59

付 表 目 次

1. 長岡京跡右京第1282次(7 ANHHT-1)・井ノ内遺跡発掘調査報告			
付表1	出土土器・土製品観察表	-----	31
付表2	出土瓦観察表	-----	38
付表3	出土石製品・木製品観察表	-----	38
2. 芝山遺跡・芝山古墳群第22次(X-3区)発掘調査報告			
付表1	芝山遺跡・芝山古墳群調査次数一覧表	-----	40
付表2	分析対象および分析・観察結果	-----	64
付表3	半定量分析結果	-----	65
付表4	芝山古墳群古墳一覧	-----	66
付表5	出土土器観察表	-----	69
付表6	出土金属製品観察表	-----	72
付表7	ガラス小玉観察表	-----	72

図版目次

- 巻頭図版1 長岡京跡右京第1282次(7 ANHHT-1)・井ノ内遺跡
調査地遠景(南西から)
- 巻頭図版2 芝山遺跡・芝山古墳群第22次(X-3区)発掘調査報告
埋葬施設SX10木棺内遺物出土状況

1. 長岡京跡右京第1282次(7 ANHHT-1)・井ノ内遺跡発掘調査報告

- 図版第1 (1)調査地遠景(東から)
(2)調査地近景(南東から)
(3)1・2トレンチ全景(西から)
- 図版第2 (1)3-1トレンチ全景(西から)
(2)3-2トレンチ東半全景(東から)
(3)4トレンチ全景(東から)
- 図版第3 (1)1トレンチSB01全景(北西から)
(2)1トレンチSP79遺物出土状況(北から)
(3)1トレンチSP01遺物出土状況(南から)
- 図版第4 (1)2トレンチSB23全景(上が北)
(2)2トレンチSP75断面(東から)
(3)2トレンチSP23断面(南から)
- 図版第5 (1)3-2トレンチ遺構検出状況(東から)
(2)3-2トレンチSD100断面(南西から)
(3)3-2トレンチSK123遺物出土状況(北から)
- 図版第6 (1)3-2トレンチSE101上層遺物出土状況(西から)
(2)3-2トレンチSE101中層遺物出土状況(西から)
(3)3-2トレンチSE101断面(東から)
- 図版第7 (1)3-2トレンチSE101中・下層遺物出土状況(南から)
(2)3-2トレンチSH102遺物出土状況(北から)
(3)3-2トレンチSH102竈断面(北東から)
- 図版第8 (1)3-2トレンチSK231遺物出土状況(北から)
(2)3-2トレンチSK112遺物出土状況(西から)
(3)3-2トレンチSK112焼石出土状況(西から)
- 図版第9 (1)3-1トレンチSB131(SP142)断面(南から)
(2)3-1トレンチSB131(SP145)断面(南から)

- (3) 3-1 トレンチ S B131 (S P162) 断面(東から)
- (4) 3-1 トレンチ S B131 (S P156) 断面(南から)
- (5) 3-1 トレンチ S B131 (S P131) 断面(南から)
- (6) 3-1 トレンチ S B131 (S P144) 断面(南から)
- (7) 3-1 トレンチ S B132 (S P132) 断面(南から)
- (8) 3-1 トレンチ S B132 (S P166) 断面(南から)
- 図版第10 (1) 3-2 トレンチ S A111 (S P111) 断面(南から)
- (2) 3-2 トレンチ S A111 (S P114) 断面(南から)
- (3) 3-2 トレンチ S A111 (S P182) 断面(西から)
- (4) 3-2 トレンチ S B103 (S P120) 断面(南から)
- (5) 3-2 トレンチ S B103 (S P103) 断面(北から)
- (6) 3-2 トレンチ S B103 (S P105) 断面(南から)
- (7) 3-2 トレンチ S B103 (S P251) 遺物出土状況(南から)
- (8) 3-2 トレンチ S B103 (S P249) 断面(南から)
- 図版第11 出土遺物1 中世
- 図版第12 (1) 出土遺物2 S P144出土瓦器碗(内面)
- (2) 出土遺物3 S P144出土瓦器碗(外面)
- 図版第13 出土遺物4 S E101出土遺物1
- 図版第14 出土遺物5 S E101出土遺物2
- 図版第15 出土遺物6 平安時代・長岡京期・飛鳥時代
- 図版第16 (1) 出土遺物7 緑釉陶器、白磁、青磁(内面)
- (2) 出土遺物8 緑釉陶器、白磁、青磁(外面)
- 図版第17 (1) 出土遺物9 瓦質三足羽釜
- (2) 出土遺物10 弥生土器
- 図版第18 出土遺物11 木製品

2. 芝山遺跡・芝山古墳群第22次(X-3区)発掘調査報告

- 図版第1 (1) 調査トレンチ全景(上が北)
- (2) 調査トレンチ遠景(西から)
- (3) 調査トレンチ遠景(東から)
- 図版第2 (1) 調査トレンチ全景(北東から)
- (2) 調査トレンチ全景(西から)
- (3) V-2号墳周溝 S D02(北から)
- 図版第3 (1) V-2号墳上層埋葬施設 S X01(上が西)
- (2) V-2号墳上層埋葬施設 S X01(南から)

- (3) V - 2号墳上層埋葬施設 S X01(北から)
- 図版第4 (1) V - 2号墳上層埋葬施設 S X01棺内北側副葬品出土状況(南から)
(2) V - 2号墳上層埋葬施設 S X01棺内南側副葬品出土状況(北東から)
(3) V - 2号墳上層埋葬施設 S X01完掘状況および下層埋葬施設 S X10検出状況(北から)
- 図版第5 (1) V - 2号墳下層埋葬施設 S X10(北東から)
(2) V - 2号墳下層埋葬施設 S X10(西から)
(3) V - 2号墳下層埋葬施設 S X10(北から)
- 図版第6 (1) V - 2号墳下層埋葬施設 S X10棺内北側副葬品出土状況(南から)
(2) V - 2号墳下層埋葬施設 S X10棺内大刀出土状況(南東から)
(3) V - 2号墳下層埋葬施設 S X10棺内ガラス製小玉出土状況(東から)
- 図版第7 (1) V - 2号墳下層埋葬施設 S X10棺内南側副葬品出土状況(東から)
(2) V - 2号墳下層埋葬施設 S X10棺内南側副葬品出土状況(西から)
(3) V - 2号墳下層埋葬施設 S X10完掘状況(北から)
- 図版第8 (1) 出土遺物1(S X01須恵器集合)
(2) 出土遺物2(S X10須恵器・土師器集合)
- 図版第9 出土遺物3(S X01須恵器)
- 図版第10 出土遺物4(S X10須恵器)
- 図版第11 出土遺物5(S X10須恵器・土師器・大刀・鞘金具、S X01刀子・耳環)
- 図版第12 (1) 出土遺物6(S X10刀子・鉄鏃)
(2) 出土遺物7(S X01・S X10ガラス製小玉)

1. 長岡京跡右京第1282次(7ANHHT-1)・井ノ内遺跡発掘調査報告

1. はじめに

今回の発掘調査は、長法寺向日線防災・安全交付金業務委託に伴い、京都府建設交通部の依頼を受けて実施したものである。

長岡京の条坊復原図によると、調査地は右京三条四坊二・七町に位置する(第1図)。

また、縄文時代から鎌倉・江戸時代の集落遺跡である井ノ内遺跡にも含まれる。周辺におけるこれまでの調査では、縄文時代の竪穴建物(右京第235次)、弥生時代の流路(右京第27・236・952次など)、古墳時代の竪穴建物(右京第615次)等、奈良時代の建物群(右京第952次)、長岡京期の建物群(右京第306・904次)、中・近世の建物や溝(右京第230・704次)などが確認されている。今回の調査地内には、西四坊坊間東小路が含まれることから、その側溝の検出及び周辺の土地利用について明らかになることが期待された。

現地調査にあたっては、地元自治会、住民の方々にご高配を賜るとともに、京都府教育委員会、長岡京市教育委員会、公益財団法人長岡京市埋蔵文化財センターほか関係機関にご指導・ご助言をいただいた。記して感謝申し上げます。

なお、調査に係る経費は、京都府乙訓土木事務所が全額負担した。

〔調査体制等〕

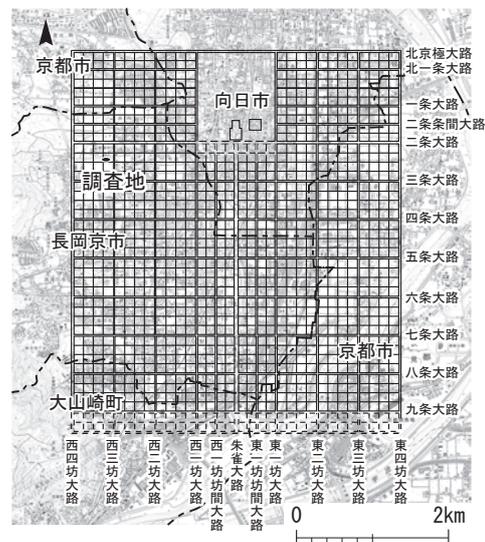
〈現地調査〉

調査責任者 調査課長

小池 寛

調査担当者 調査課課長補佐兼調査第4係長

中川和哉



第1図 調査地の位置

同 調査第4係調査員 松井 忍

調査場所 長岡京市粟生畑ヶ田

現地調査期間 令和5年11月6日～令和6年2月9日

調査面積 550㎡

〈整理作業〉

整理作業責任者 調査課長 小池 寛

整理作業担当者 調査課課長補佐兼調査第4係長 中川和哉

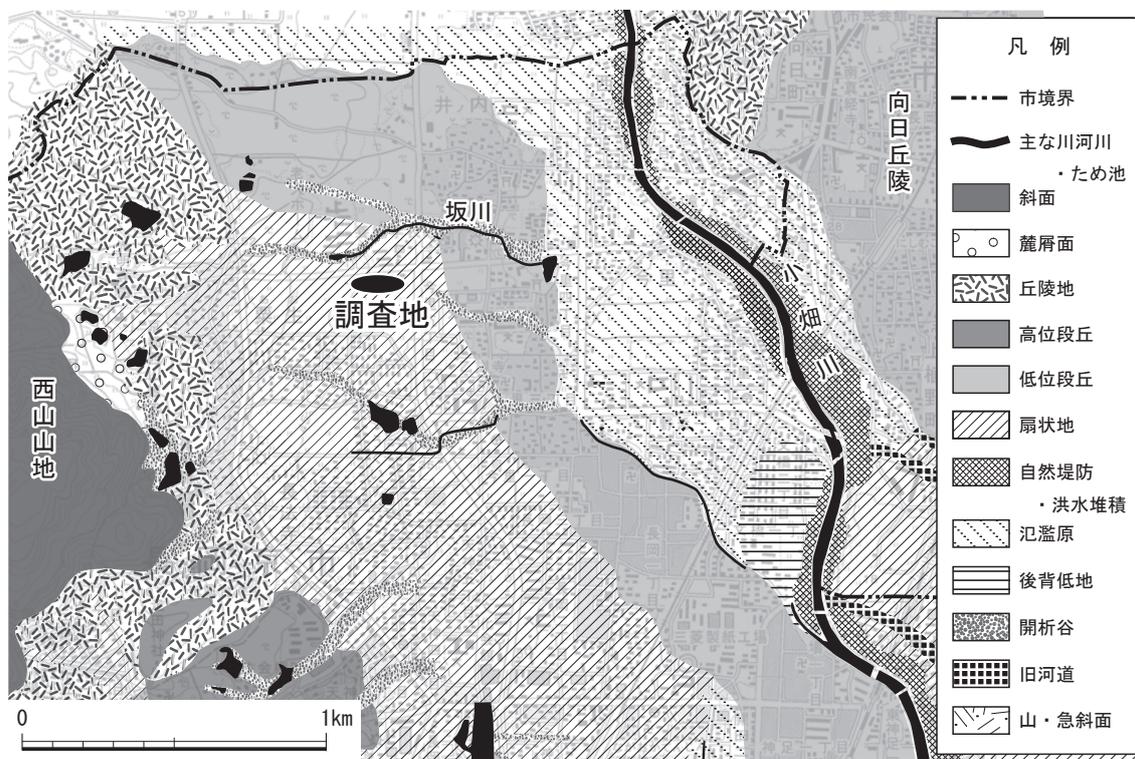
同 企画調整係調査員 松井 忍

整理作業期間 令和6年9月17日～令和7年3月31日

2. 位置と環境

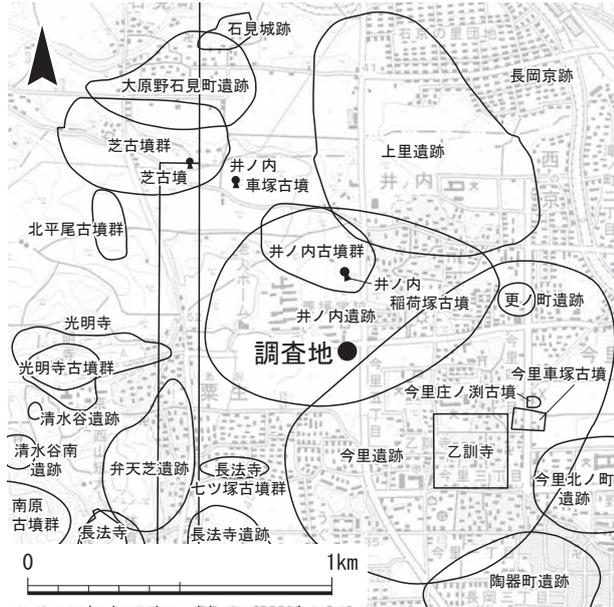
長岡京市は、京都盆地の西南部に位置しており、調査地である粟生畑ヶ田はその長岡京市の北方にある。調査地は西方の西山山地に沿うように、南東方向に広がる段丘を覆う扇状地及び緩扇状地となっている。扇状地の東側には低位段丘が広がり、小畑川を挟んだ東側に南北に延びる向日丘陵までの間は小畑川の氾濫原となっている。調査対象地となっている府道長法寺向日線の北側には現在の坂川が流れており、それに伴う東西方向の開析谷が広がっている。

井ノ内遺跡の北西部には、古墳時代後期の古墳である芝古墳(前方後円墳・全長約33m)、井ノ内車塚古墳(前方後円墳・全長約39m)、井ノ内稲荷塚古墳(前方後円墳・全長約46m)が位置する。北東部には縄文時代から古墳時代の集落遺跡である上里遺跡が広がる。特に、竪穴建物を主体と



第2図 周辺地形分類図

する居住域に土壙墓・土器棺墓による墓域が伴う縄文晩期の集落は近畿地方においても珍しく、集落内では石刀などの製作も行われていたと考えられている。南東部には旧石器時代から江戸時代まで営まれた今里遺跡があり、弥生時代の方形周溝墓や古墳時代の大型掘立柱建物、奈良時代の総柱倉庫群といった様々な時期の遺構・遺物が確認されている。さらに同じく南東部には、白鳳時代に創建され長岡京遷都後間もなく桓武天皇の実弟早良親王が幽閉されたと言われる乙訓寺がある。また、調査地西側には、12世紀末に創建された光明寺が現在も法灯を守っている。調査地である府道長法寺向日線は、向日市中心部とこの光明寺を結ぶことから、別名「光明寺道」とも呼ばれている。

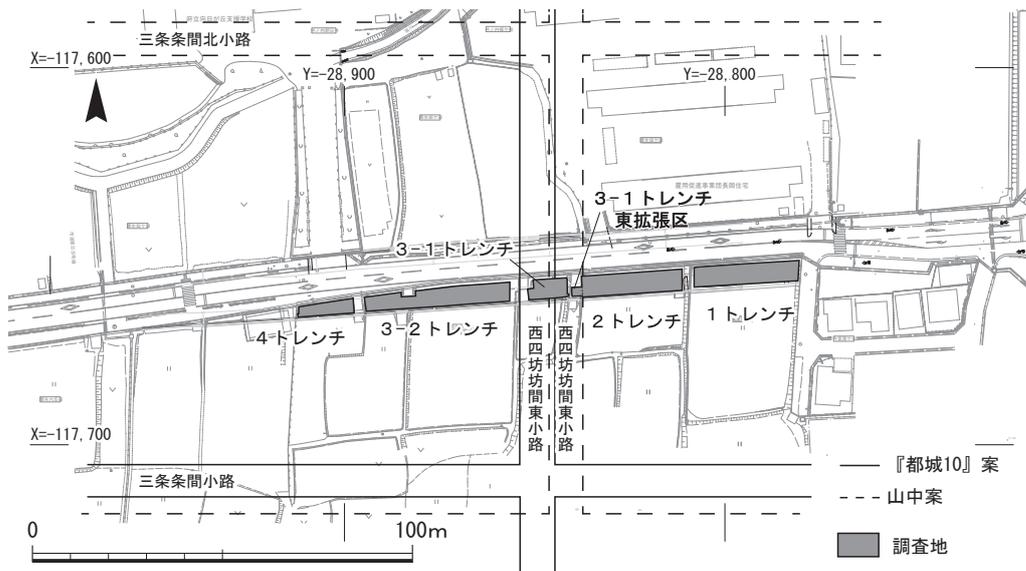


第3図 調査地周辺の遺跡

3. 調査の経緯と方法

調査対象地である府道の拡張部分に調査区を設定した。対象地南側の営農地への進入路及び駐車スペース、水路の温存等を考慮した上でトレンチを設定し、東から順に1、2、3-1、3-2、4トレンチとした(第4図)。

表土掘削及び遺構面直上までの掘削には重機を使用し、重機掘削後は人力で精査を行った。調査地が5m幅と限られており、掘削土を場外搬出できないために、1・2・4トレンチを先に調



第4図 トレンチ配置図

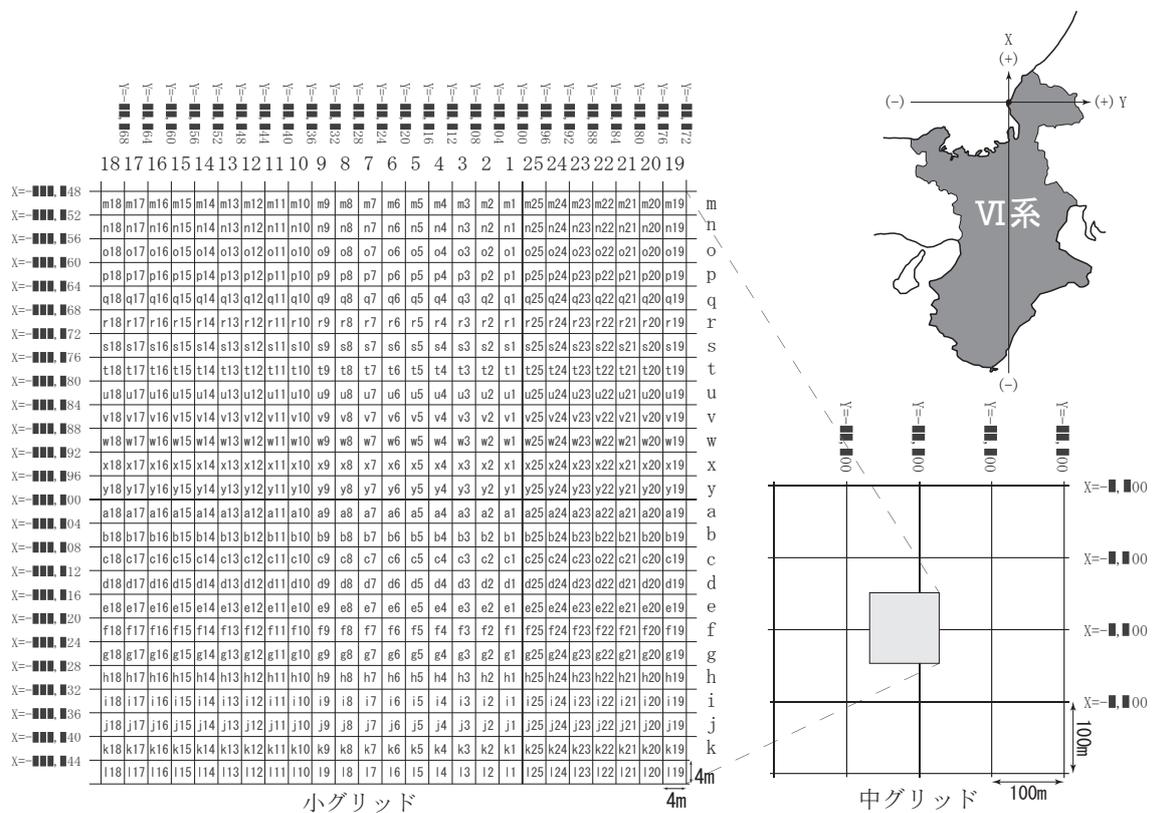
査し、これらの調査後にトレンチを埋め戻し、掘削土を移動して3-1・3-2トレンチの調査を行った。なお、3-1トレンチと2トレンチの間には条坊側溝(西四坊坊間東小路)が検出される可能性があったため、3-1トレンチの調査時に2トレンチ西側を一部拡張して、3-1トレンチ東拡張区として調査を行った。

検出した遺構については、その都度位置等の情報を平面図や断面図に記録し、並行して土層断面等の記録写真を撮影した。遺構面全体の調査後にはトレンチごとにそれぞれ全景写真を撮影し、調査の終盤には小型無人機(UAV)による写真撮影と測量を行い、図化は今年度の整理報告時に合わせて行った。

1) トレンチ名・地区(グリッド)名について

調査にあたっては、対象地が営農地に隣接しており、農地への進入路確保及び用水路の保存が必要であったため、必要な進入路ごとにトレンチを設定し、東から順に1・2・3-1・3-2・4トレンチとした。

遺物の取り上げに際しては、位置情報を迅速に理解するため、調査地全体を対象に世界測地系に基づき、平面直角座標系を利用した4mグリッドを設定した。X、Yの座標値のうち、整数値の下二桁が00となる線を基準に100m四方の中グリッドを設定し(G8・G9・G10)、これを東西と南北でそれぞれ25等分した。VI系平面直角座標系は北東角を起点としており、南と西に向かってX、Yの絶対値が増加する。この点を考慮して、南北方向は北からa~y、東西方向は1~25とし、各グリッドの名称は、m24、n1などとする(第5図)。中グリッドとしては、G8~G10



第5図 地区割り設定図

に相当しているが、現実的にはすべての中グリッドの中に同じ小グリッド名は存在しないため、遺物の取り上げ等にはトレンチ名と小グリッド名の表記で対応している。

2) 遺構番号について

検出した遺構は、調査トレンチ全域において通し番号をつけ、それぞれの遺構番号の頭には、遺構の性格を示す略号を付した。

使用した略号は、SD：溝、SK：土坑、SB：掘立柱建物、SH：竪穴建物、SA：柱穴列、SP：柱穴・ピット、SX：不明遺構・その他である。

なお、掘立柱建物の遺構番号については、建物を構成する柱穴番号の一番若いもので呼称している。

4. 調査概要

現地表面の標高は西端の 4 トレンチで 44.6m、東端の 1 トレンチで 41.9m、比高 2.7m を測る。以下、各トレンチにおける概要を記す。

1) 1 トレンチ (第 6 図)

1 トレンチは、現地表面の標高が東で 41.878m、西で 41.905m を測り、ベース面が東で 41.370m、西で 41.716m、比高約 0.35m を測る。特に西半が耕作地造成の際に削平されている影響で遺構密度が低い。中央より東側で中世の溝及び長岡京期前後の遺物を含む掘立柱建物 1 棟、ピット数基などを確認した。

2) 2 トレンチ (第 6 図)

2 トレンチは、現地表面の標高が東で 42.854m、西で 43.040m を測り、ベース面が東で 42.251m、西で 42.625m、比高約 0.37m を測る。トレンチ中央付近に柱穴が集中し、掘立柱建物 1 棟が復元できる。多数ある柱穴の中には、根石を持つものや柱材が残るものもある。

3) 3-1 トレンチ (第 7 図)

3-1 トレンチは、現地表面の標高が東で 43.498m、西で 43.708m を測り、ベース面が東で 42.924m、西で 43.196m、比高約 0.27m を測る。

当トレンチは、全調査区の中でも特に遺構が集中しており、多数の柱穴から掘立柱建物 2 棟が復元できる。建物の時期は、周辺の遺物の出土状況から、鎌倉時代前後とみられる。また、平安時代後期から中世の遺物を含む溝状遺構 SD 186・138・139 も確認した。

なお東拡張区では、新しい耕作区画溝とそれに伴う杭跡を確認したが、条坊側溝などは認められなかった。

4) 3-2 トレンチ (第 7 図)

3-2 トレンチは、現地表面の標高が東で 43.578m、西で 44.123m を測り、ベース面が東で 43.222m、西で 43.871m、比高約 0.65m を測る。

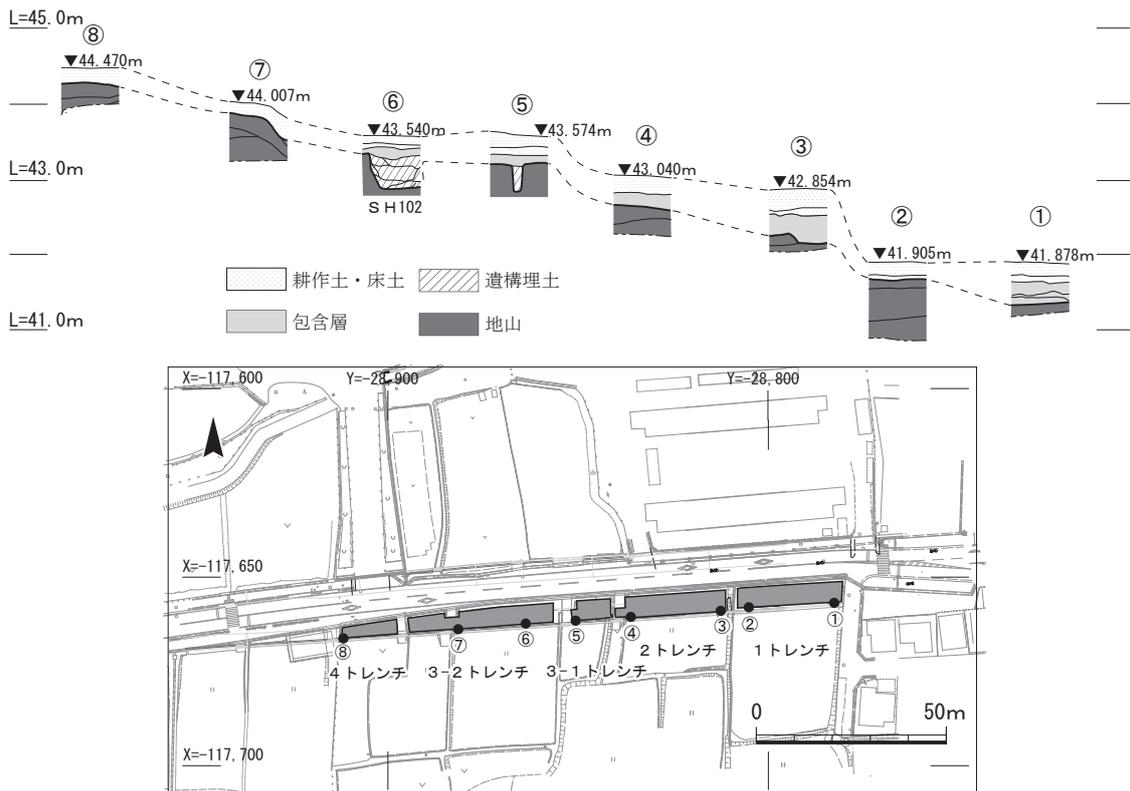
当トレンチは、中央より西側で安定したベースのシルト層が途切れて礫層となり、遺構が希薄になる。安定したベース面が広がるトレンチ東側では、古墳時代の溝 1 条、飛鳥時代の竪穴建物



第6図 1・2トレンチ遺構配置図



第7図 3・4トレンチ遺構配置図



第8図 各トレンチ柱状図

1棟、土坑2基、平安時代後期の井戸1基などを検出した。柱穴はトレンチのやや東寄りでも多く検出しており、長岡京期を含む平安時代のものでは、掘立柱建物1棟と柱穴列1条、時期不明のものでは、掘立柱建物1棟を確認した。

5) 4トレンチ(第7図)

4トレンチは、現地表面の標高が東で43.911m、西で44.484mを測り、ベース面が東で44.132m、西で44.257m、比高約0.13mを測る。

約0.2mの耕作土と床土直下で、瓦器片をわずかに含む南北方向の耕作溝を検出したのみで、顕著な遺構は認められなかった。

5. 基本層序(第8図)

調査対象地は調査前は耕作地で、0.2~0.3mの耕作土及び床土を除去すると、遺物包含層(灰黄褐色礫混じりシルト)もしくは地山が確認できる。1トレンチは特に中央付近にかけて地山の灰黄色シルトが上昇し、その下層に砂礫層が潜り込む。東側で認められた包含層はほとんどなく、耕作土直下で浅い遺構をわずかに検出するものの、ほとんどが地山となる。2トレンチはトレンチ中央から西側で包含層が最も薄くなり、それに伴って遺構密度も低くなる。3-1トレンチは包含層が比較的良好に残っており、遺構も多く認められた。3-2トレンチから4トレンチにかけては、地山である安定したシルト層(黄褐色粘質シルト)の下に砂礫土(にぶい黄褐色礫質土)が潜り込み、その境界を境に西側では遺構密度が極端に低くなる部分があった。坂川の旧流路(支流)の一部であった可能性がある。

6. 検出遺構

1) 中世

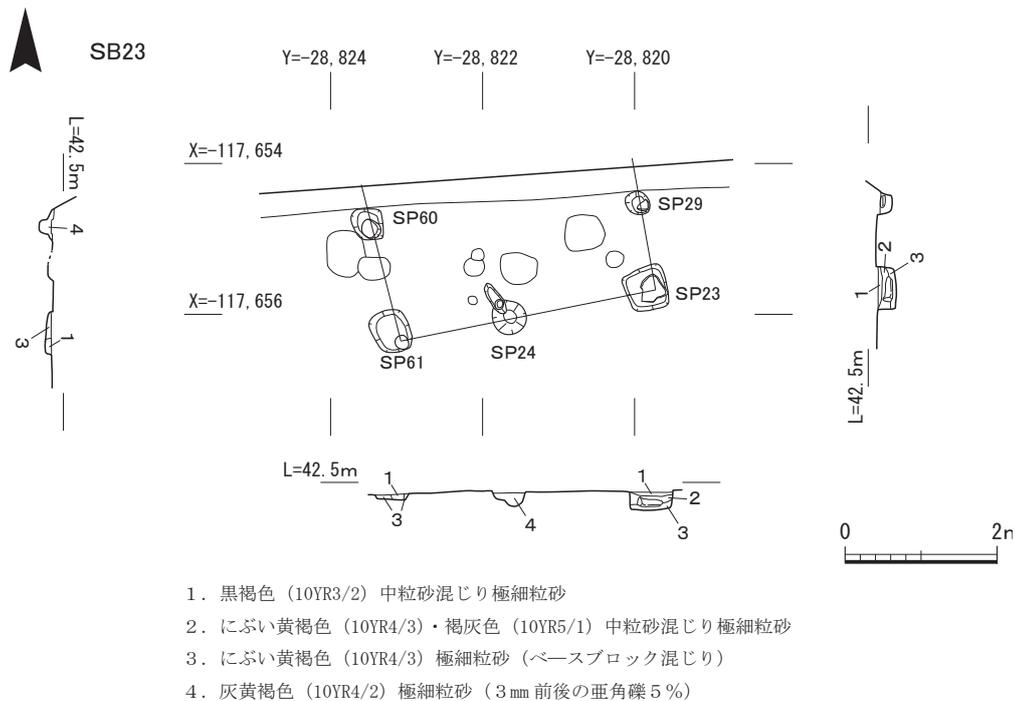
(1) 溝

SD139(第7図) 3-1 トレンチ西寄り(o・p13区)で検出した北西から南東に向かって斜めに走る溝である。幅0.45m前後、深さ0.2mを測り、SB131を構成する柱穴SP142に削平される。埋土から土師器皿(第17図1・2)と瓦器椀(3)が出土した。

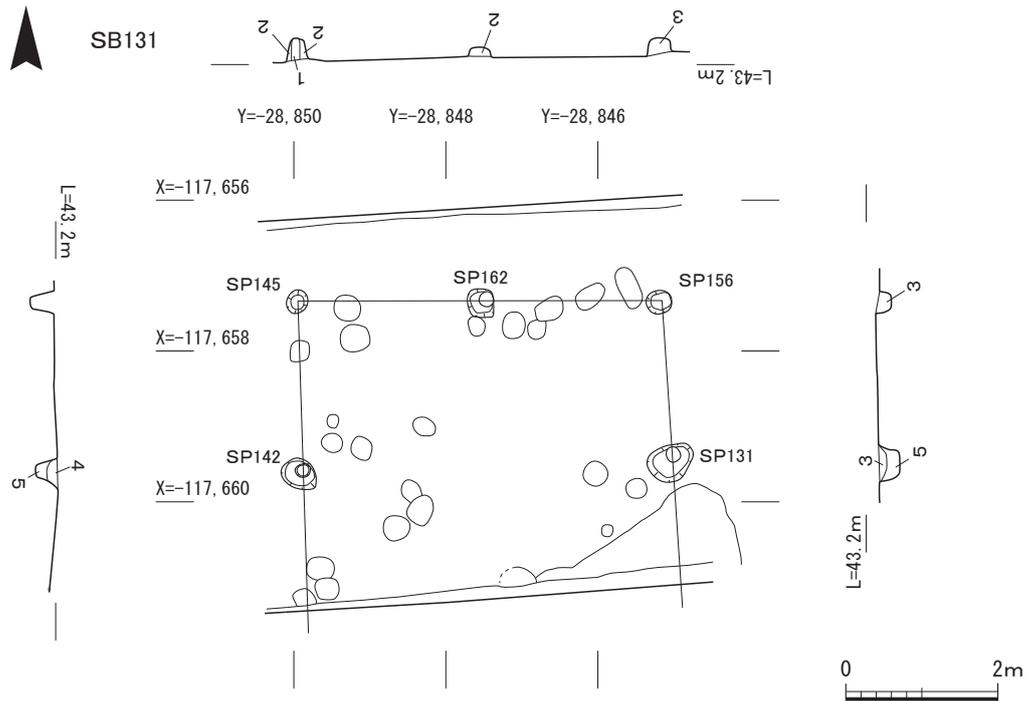
(2) 掘立柱建物

SB23(SP23・24・29・60・61:第9図) 2トレンチ中央北寄り(n6区)で検出した主軸方向を北からやや西に振る掘立柱建物である。東西2間、南北1間以上の規模で、さらに北側に展開するものとみられる。柱穴の掘形はSP24以外は隅丸方形を呈し、一辺0.3~0.4mのもの0.5~0.6mのものがある。SP23・29の底には根石が据えられていた。SP24は柱の抜き取り穴をもつような平面形で検出したが、断面で埋土の差を確認することはできなかった。柱間も東西が1.5m・1.9m、南北が1.1m・1.6mとばらつきがあり、SP24から瓦質土器(4)が出土していることから、中世の遺構と判断した。

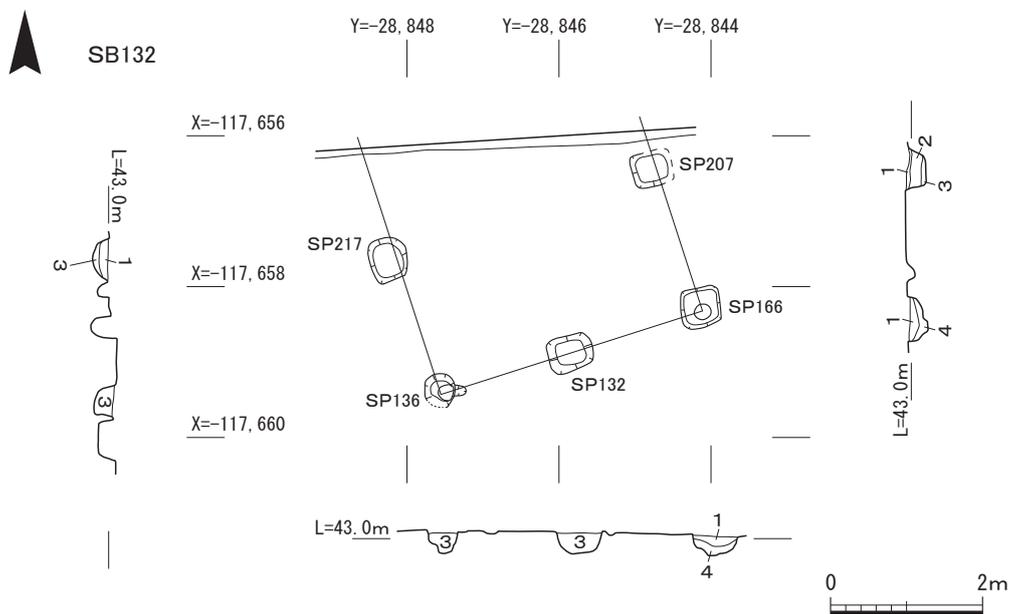
SB131(SP131・142・145・156・162:第10図) 3-1 トレンチ中央(o・p12・13区)で検出した主軸が南北方向の掘立柱建物である。東西2間、南北2間以上の規模で、南側に展開するものとみられる。柱穴の掘形は隅丸方形や楕円または円形を呈し、直径0.3m前後から0.4m、長辺0.6m、深さ0.13~0.3mなど規模や形状にもばらつきがある。柱間は東西2.3mと2.5m、南北2.0mと2.2mとやや不均等である。建物を構成する柱穴からは、瓦器椀(22~29)・瓦器皿(20・



第9図 掘立柱建物SB23平・断面図



1. 灰黄褐色 (10YR6/2) ・ にぶい黄褐色 (10YR4/3) 混じる細粒砂混じり極細粒砂
2. にぶい黄褐色 (10YR5/3) ・ 黄褐色 (10YR5/6) 混じる極細粒砂
3. にぶい黄褐色 (10YR4/3) 極細粒砂
4. にぶい黄褐色 (10YR5/3) ・ 黒褐色 (10YR3/2) 混じる極細粒砂
5. 灰黄褐色 (10YR5/2) 粘質細粒砂



1. 灰褐色 (7.5YR5/2) 極細粒砂
2. 灰黄褐～にぶい黄褐色 (10YR4/2～4/3) 細礫混じり極細粒砂 (3mm前後の歪円礫3%)
3. にぶい黄褐色 (10YR5/3・4/3) 礫混じり細粒砂 (3mm前後の歪円礫5%)
4. 灰黄褐・暗褐色 (10YR5/2・3/3) 斑状細粒砂。

第10図 掘立柱建物SB131・SB132平・断面図

21)・土師器皿(5～7・11～18)や瓦質三足羽釜(9)などが出土している。

S B 132(S P 132・136・166・207・217:第10図) 3-1トレンチ中央(o 12・13区)で検出した主軸方向を北からやや西に振る掘立柱建物である。東西2間、南北1間以上の規模で、さらに北側に展開するものとみられる。柱穴の掘形は隅丸方形を呈し、一辺0.4m前後または0.5～0.6m、深さ0.2～0.28mを測る。柱間は東西1.7mと1.8m、南北1.9mと2.0m間隔で、柱穴からの遺物は少ないことから時期は不明であるが、周辺の遺構分布などから中世の遺構と考えられる。

(3)ピット

S P 28(第6図) 2トレンチ中央北寄り(n 5区)で検出した直径0.4m、深さ0.13mを測るピットである。埋土から白磁碗片(48)が出土した。

S P 44(第6図) 2トレンチ中央北寄り(n 6区)で検出した直径0.15m、深さ0.06mを測るピットである。埋土から瓦器碗の底部(39)が出土した。

S P 75(第6図) 2トレンチ中央やや東寄り(o 5区)で検出した直径0.35m、深さ0.4mを測る円形のピットである。掘形中央には直径0.8mの柱材(第25図189)が残存していた。S P 33・58と並ぶ柱穴列の可能性もあるが、深さなども異なっており、別のものとしておく。

S P 141(第7図) 3-1トレンチ中央西寄り(o 13区)で検出した直径0.3m、深さ0.28mを測るやや楕円形のピットである。埋土から瓦器碗(36)が出土した。

S P 147(第7図) 3-1トレンチ西寄り(o 13区)の北壁際で検出した直径0.3m、深さ0.29mを測る円形のピットである。埋土から土師器皿(40・41)や瓦器皿(42)が出土した。

S P 160(第7図) 3-1トレンチ中央やや北寄り(o 12区)で検出した一辺0.28～0.35m、深さ0.34mを測る隅丸方形のピットである。埋土から瓦質三足羽釜(49)や瓦器碗、東播系須恵器鉢(51)などが出土した。

S P 183(第7図) 3-1トレンチ北東部(o 11区)で検出した直径0.3m、深さ0.13mの円形ピットである。埋土から瓦器碗(35)・土師器皿(46・47)が出土した。

S P 200(第7図) 3-1トレンチ中央部北壁近く(o 12区)で検出した直径0.25m、深さ0.11mの円形ピットである。東側を別のピットに削平される。埋土から瓦器碗(38)が出土した。

S P 229(第7図) 3-1トレンチ北西部(o 13区)で検出した一辺0.33m、深さ0.26mを測る隅丸方形のピットである。埋土から土師器皿(43)、瓦器皿(44)、瓦質三足羽釜(45)が出土した。

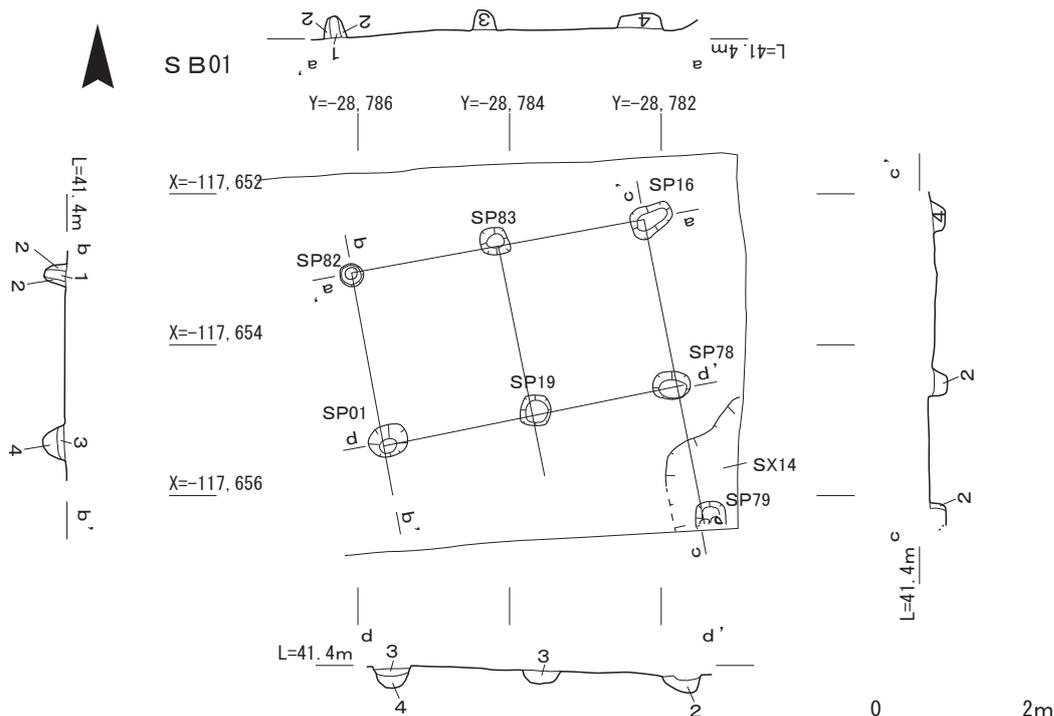
S P 245(第7図) 3-2トレンチ中央南壁際(p 20区)で検出した直径0.45m、深さ0.13mを測る円形のピットである。埋土から瓦器碗(37)が出土した。

S P 253(第7図) 3-1トレンチ南東部(p 11区)南壁際で検出した直径0.3m、深さ0.17mを測るピットである。埋土から瓦器碗片と土師器の手づくね土器(50)が出土した。

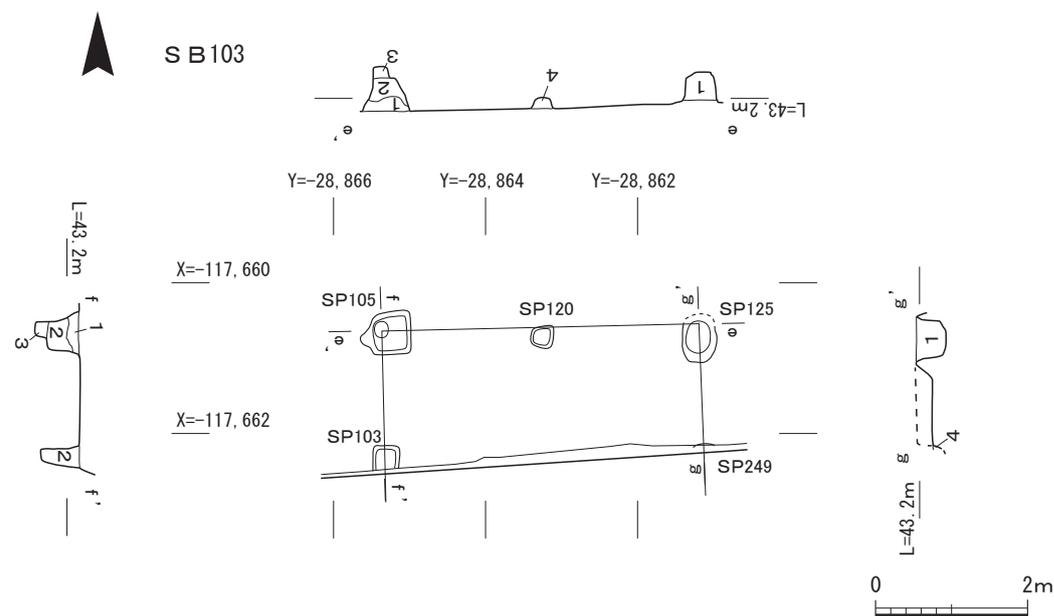
2)長岡京期から平安時代

(1)溝

S D 186(第7図) 3-1トレンチ北東部(o 11・12区)で検出した蛇行する溝状遺構である。



1. 黒褐色 (10YR3/2) 中粒砂混じり粘質極細粒砂
2. にぶい黄褐・褐灰色 (10YR5/3・5/1) 中粒砂混じり極細粒砂
3. 灰黄褐色 (10YR4/2) 粗粒砂混じり細粒砂
4. 灰黄褐色 (10YR4/2) 粗礫混じり細粒砂



1. にぶい黄褐色 (10YR5/3) 粘質極細粒砂 (ベースブロック混じり)
2. にぶい黄褐色 (10YR4/3) 極細粒砂
3. 黄褐色 (10YR5/6) 粘質土
4. 灰黄褐色 (10YR5/2) 粘質シルト

第11図 掘立柱建物 S B 01・S B 103平・断面図

幅0.4m、深さ0.03～0.05mと浅く、一部を S B 132を構成する S P 207に削平される。埋土から須恵器杯 A (第18図52)や土師器片が出土した。

(2)掘立柱建物・柱穴列

S B 01 (S P 01・16・19・78・79・82・83：第11図) 1トレンチ東端 (n 21・22区)で検出した主軸をやや北から西に振る掘立柱建物である。東西2間・南北2間以上の規模で、柱の並びから南に展開する総柱建物になる可能性がある。柱穴の掘形は一辺0.3～0.4mの隅丸方形または直径0.3mの円形、径0.36～0.58mの楕円形を呈し、深さは0.13～0.34mを測る。後述する S X 14が S P 79の埋土上層を覆っていた。建物を構成する柱穴の埋土からは土師器椀 A (53)や須恵器杯 B (54)などが出土しているが、建物主軸が南北方向から西に振れており、柱間は東西2mと揃うものの、南北は1.9mと2.3mで、規模などを含めてややばらつきがあることなどから、長岡京期を含めた平安時代と考えておく。

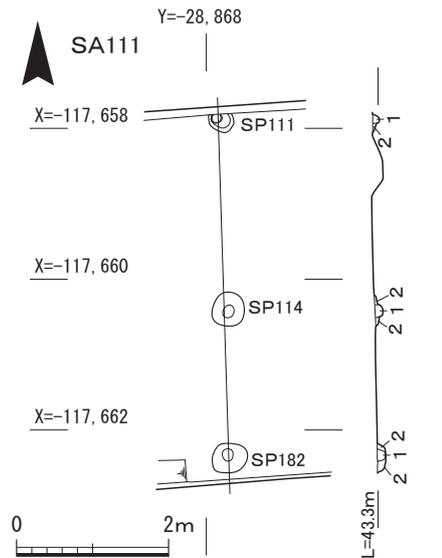
S B 103 (S P 103・105・120・125・249：第11図) 3-2トレンチ東寄り (p 16・17区)で検出した主軸が南北方向の掘立柱建物である。一部飛鳥時代の堅穴建物を削平しており、東西2間・南北1間以上で南に展開する可能性がある。柱穴の掘形は隅丸方形を呈し、一辺0.3m前後のものと0.4～0.6mのものがあり、柱間は東西が2.1m均等である。建物が主軸にのっており、建物を構成する柱穴から、土師器片口鉢 (59)や須恵器壺 G (57)、須恵器壺 H (58)などが出土しており、長岡京期とみられる。

S A 111 (S P 111・114・182：第12図) 3-2トレンチ東寄り (o・p 17区)で検出した南北方向の柱列である。2間分検出したが、調査区外につづくものとみられる。柱間は2.1m・1.95mを測る。構成する柱穴からは、須恵器杯蓋 (60・61)や瓦 (第23図171・172)などが出土している。

(3)井戸

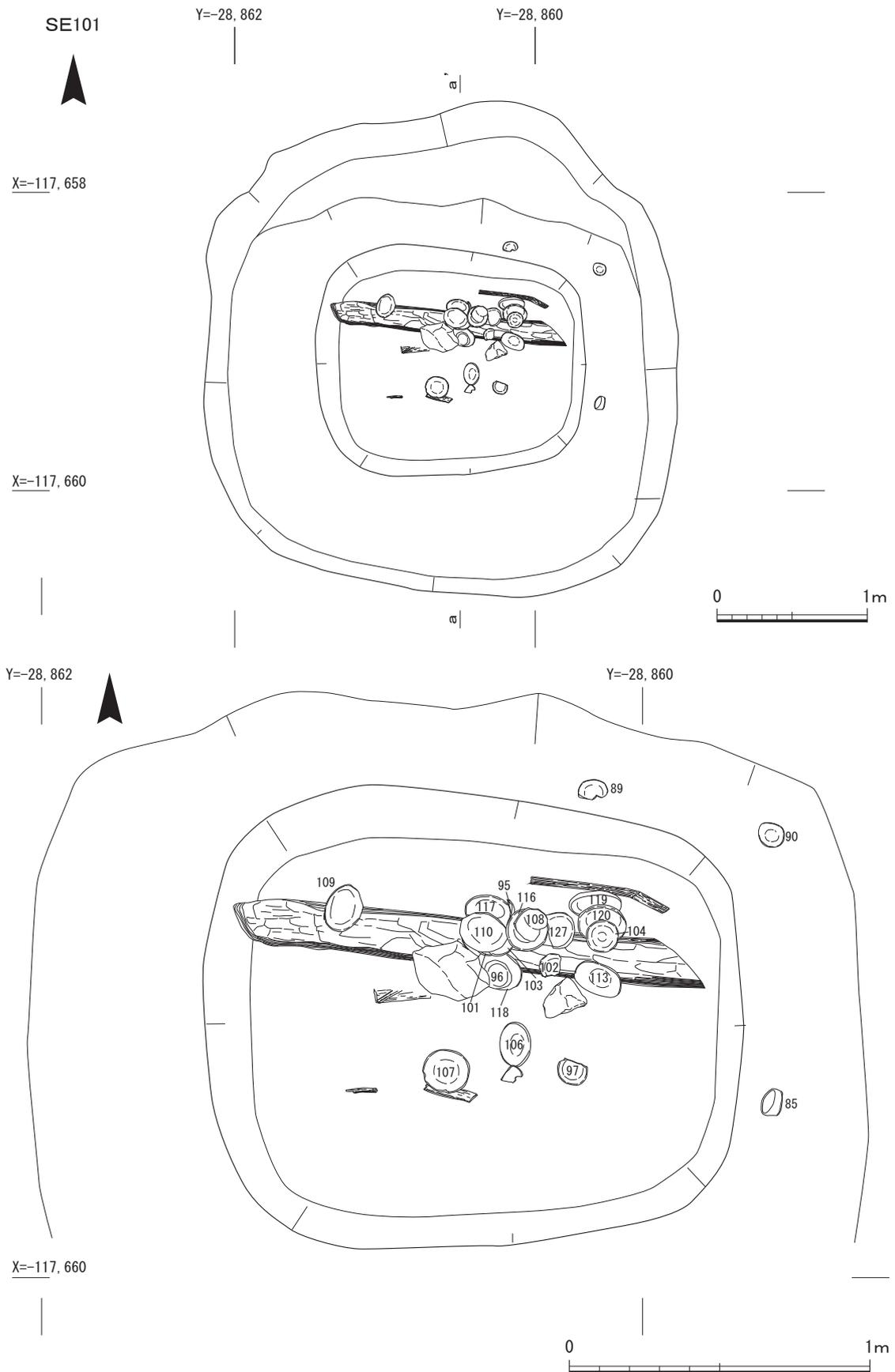
S E 101 (第13・14図) 3-2トレンチ東寄り (o・p 15・16区)で検出した井戸である。検出面での掘形は約3m四方で、深さは2.3mを測る。検出面から漏斗状にすぼまり、0.8m下がった地点から東西1.7m・南北1.5mの方形で真っすぐ立ち上がる掘形となる。地表面から1.8m掘削した時点で壁面が崩落したため、安全を考慮して最下層の埋土を重機によって掘削し、遺物を取り上げて最終深度のみを記録した。最下層より下は礫層となっており、湧水点に達していた。

井戸の構築材は抜き取られていたが、おそらく縦板組の井戸であったとみられる。北側にテラス状の平坦面が認められ、遺物も北側から廃棄されたかのように落ち込んでいたことから、北側の平坦面から井戸を利用していた可能性がある。

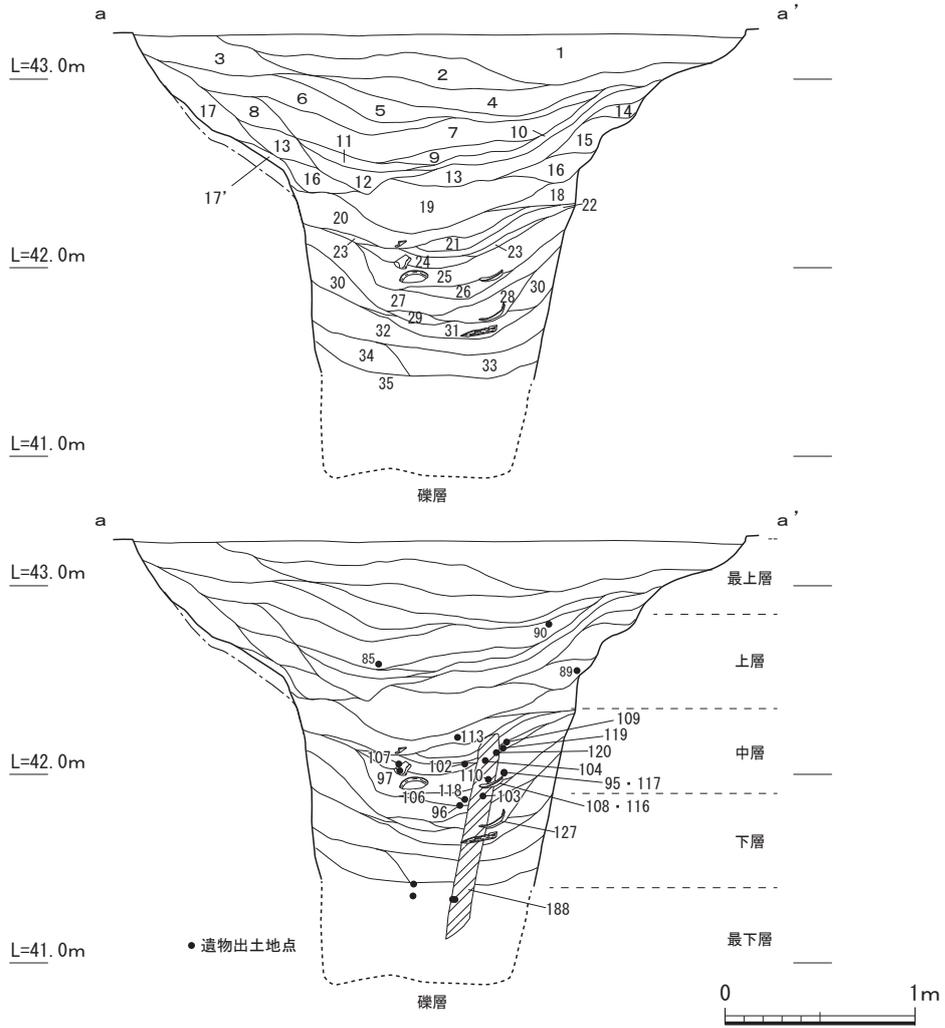


- 1. 暗褐色 (10YR3/3) 極細粒砂
- 2. にぶい黄褐色 (10YR5/4) シルト (ベースブロック混じり)

第12図 柱穴列 S A 111平・断面図



第13図 井戸 S E 101 平面図



- | | |
|---|--|
| 1. 暗褐色 (10YR3/3) 極細粒砂 (1 cm 以下の亜円礫 2%) | 粘質シルト |
| 2. にぶい黄褐色 (10YR4/3) 極細粒砂 (2 cm 以下の亜円礫 3%、黄褐色 (10YR5/6) ブロック 3% 含む) | 17. 灰黄褐色 (10YR5/2) 中粒砂混じり粘質シルト |
| 3. にぶい黄褐色 (10YR4/3) 細粒砂混じり極細粒砂 (1 cm 以下の亜円礫 10%) | 17'. 灰黄褐色 (10YR5/2) 中粒砂混じり粘質シルト (褐色 (10YR4/1) 粘土ブロック混じり) |
| 4. にぶい黄褐色 (10YR4/3) 細粒砂混じり極細粒砂 | 18. 黄灰色 (2.5Y4/1) ブロック混じりにぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘質シルト |
| 5. にぶい黄褐色 (10YR4/3) 細粒砂混じり極細粒砂 (層の最上部ににぶい黄褐色 (10YR5/3) 粘質土の薄い層が入る)) | 19. 黄灰色 (2.5Y4/1) 細粒砂質シルト |
| 6. にぶい黄褐色 (10YR4/3) 細粒砂混じり極細粒砂 | 20. 灰色 (5Y5/1) 細粒砂質シルト (3mm 前後の細礫混じる) |
| 7. 褐色 (10YR4/4) ブロック混じりにぶい黄褐色 (10YR4/3) 極細粒砂質シルト | 21. 灰色 (5Y5/1) 中粒砂混じり細粒砂 |
| 8. 灰黄褐色 (10YR5/2) 極細粒砂質シルト (3 cm 以下の亜円礫 2%) | 22. 灰色 (5Y4/1) 粘質土 (粘性強い) |
| 9. 暗褐色 (7.5YR3/3) 中粒砂混じり極細粒砂 | 23. オリーブ灰色 (5GY5/1) 細粒砂混じり粘質土 |
| 10. 褐色 (10YR5/1) 粘質土 p (9 層混じる) | 24. 灰色 (5Y4/1) 粘質土 (23 層ブロック少量混じる) |
| 11. 褐～灰黄褐色 (10YR4/4 ~ 5/2) 細粒砂質シルト (マンガン含む) | 25. 灰色 (5Y4/1) 細粒砂質シルト (有機質混じる・土器多く含む) |
| 12. 褐色 (10YR4/1) 粘土 | 26. 灰色 (5Y4/1) 粘土 |
| 13. 褐色 (7.5YR4/3・4/6) 混じり褐色 (7.5YR6/1) 中粒砂混じり極細粒砂 | 27. 緑灰色 (7.5GY5/1) 細粒砂混じりシルト質粘質土 |
| 14. にぶい黄褐色 (10YR4/3) 極細粒砂混じりシルト | 28. 灰色 (5Y5/1) 細粒砂混じりシルト |
| 15. 灰黄褐色 (10YR5/2) 極細粒砂質シルト | 29. オリーブ灰色 (5GY5/1) 細粒砂混じりシルト |
| 16. 明褐色 (7.5YR5/6) ブロック混じりにぶい黄褐色 (10YR4/3) | 30. 緑灰色 (7.5GY5/1) 細粒砂質シルト |
| | 31. 灰色 (5Y4/1) よりやや暗い粘土 |
| | 32. オリーブ灰色 (5GY5/1) 中粒砂混じりシルト |
| | 33. オリーブ灰色 (5GY5/1) 細粒砂混じりシルト |
| | 34. オリーブ灰色 (5GY5/1) 礫混じりシルト (3 cm 前後の亜角礫 7%) |
| | 35. 暗オリーブ灰色 (2.5GY4/1) 礫混じり細粒砂質シルト |

第14図 井戸 S E 101断面図

遺物は、最上層から最下層に分けてその都度取り上げた。最上層や上層取り上げ遺物の中には、飛鳥時代から平安時代初め頃の遺物も混入しており、これら周辺の遺構を壊して構築された井戸であることが考えられる。埋土の中層及び最下層を中心に平安時代後期の土師器皿(第19・20図)や瓦器椀(第20図)、斎串やもえさし、毬杖の球、折敷や曲物の底部などの木製品(第24・25図)が出土した。

(4)ピットほか

S P 116(第7図) 3-2トレンチ東寄り(o17区)で検出した円形のピットである。直径0.15m、深さ0.05mを測る。埋土から土師器椀A(62・63)、土師器皿A(64)が出土した。

S P 124(第7図) 3-2トレンチ東側(p16区)で検出したやや隅丸方形のピットである。上層を耕作溝とみられるS D104に削平されており、一辺0.37m、深さ0.13mを測る。埋土から土師器甕口縁部(66)が出土した。

S P 194(第7図) 3-2トレンチ東側(o15区)で検出した楕円形のピットである。長径0.3m、短径0.26m、深さ0.34mを測る。埋土から緑釉陶器の底部(67)と土師器片が出土した。

S X 14(第6図) 1トレンチ南東隅(n・o21区)で検出した不定形の落ち込み状遺構である。S B01を構成するS P 79の上層を覆っており、緑釉陶器の底部(65)などが出土した。

3)飛鳥時代

(1)竪穴建物

S H 102(第15図) 3-2トレンチ東寄り(p16・17区)で検出した住居跡と考えられる竪穴建物である。南側が調査区外となり、全容は明らかにできなかったが、東西3.8m、南北1.3m以上、深さ0.4mで北西部隅に竈を持ち、中央に切り合う土坑を確認している。北西隅の竈では、焼土と炭片を含む土の層状堆積が認められた。東壁際にわずかに周壁溝が認められたが、支柱穴は確認できなかった。遺構埋土からは、古墳時代末から飛鳥時代にかけての土師器高杯(第21図144)、須恵器杯H(140)・同低脚高杯(143)・同甕(150)などが出土している。

なお、建物内には土坑S K 210・231が構築され、同時期の遺物が出土している。

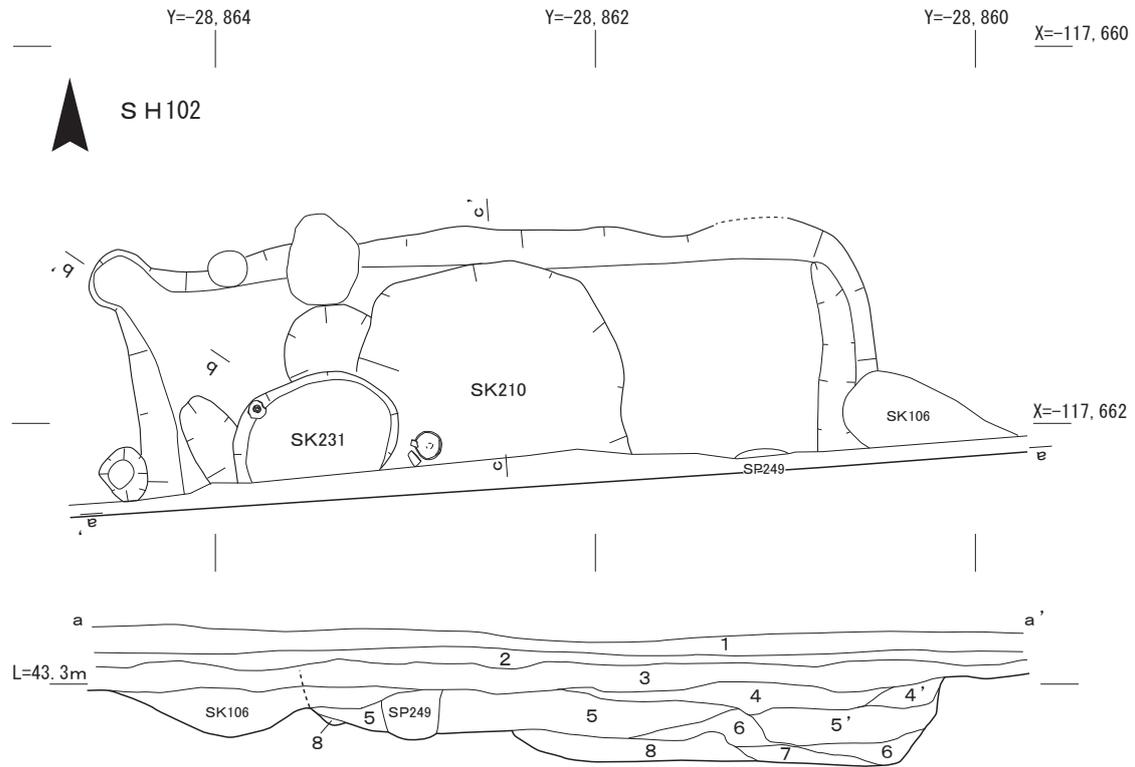
(2)土坑・ピット

S K 112(第16図) 3-2トレンチ中央(p19区)で検出した不定形土坑である。東西0.78m、南北2.0m、深さは0.32mから北半分で深くなり、0.54mを測る。

最下層に一部被熱痕跡のある0.15~0.18mの礫が重なって廃棄されていた。埋土から須恵器の低脚高杯(148)、杯H蓋(147)、大甕(149)などが出土した。

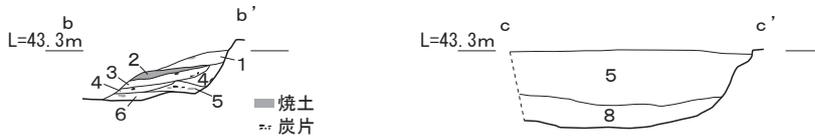
S K 123(第16図) 3-2トレンチ東寄り(o15区)で検出した不定形土坑である。北側は調査区外となるが、東西2.24m、南北0.72m以上、深さ0.24mを測る。埋土中層からは、古墳時代末から飛鳥時代の須恵器杯H身(152・153)などが出土した。

S K 240(第7図) 3-1トレンチ東壁際(o11区)で検出した不定形土坑である。東側は調査区外となり、長径0.46m以上、短径0.26m、深さ0.11mを測る。埋土から須恵器低脚高杯脚部(154)が出土した。



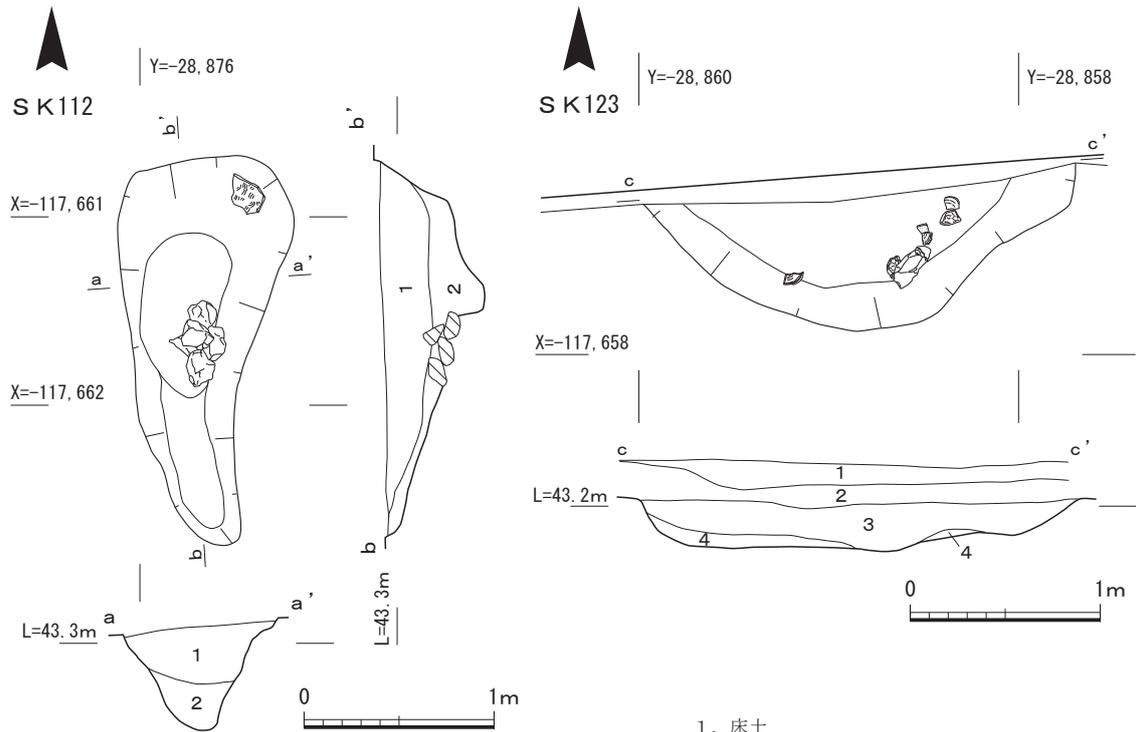
a-a', c-c' 共通

1. 耕作土
2. 黄灰色 (2.5Y4/1) 細粒砂 (褐色 (7.5YR4/6) になるマンガン層) (床土)
3. にぶい黄褐色 (10YR5/4) に黒褐色 (10YR2/3) のマンガンが斑状に混じる極細質シルト
4. 灰黄褐色 (10YR5/2) とにぶい黄褐色 (10YR4/6) の斑状極細粒砂
- 4' 4層と同じ (土器を含まない)
5. 灰黄色 (2.5Y6/2) ・暗褐色 (10YR3/3) 粘質極細粒砂 (炭片・土器混じる)
- 5' 5層と同じ (ベースブロック混じる)
6. 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 細砂質粘質土 (SK231)
7. にぶい黄褐色 (10YR4/3・5/4) 斑状に混じる粘質シルト (6層ブロック少し含む) (SK231)
8. 暗褐色 (10YR3/3) に灰黄褐色 (2.5Y4/2) 混じる粘質シルト (炭片・土器混じる) (SK210)



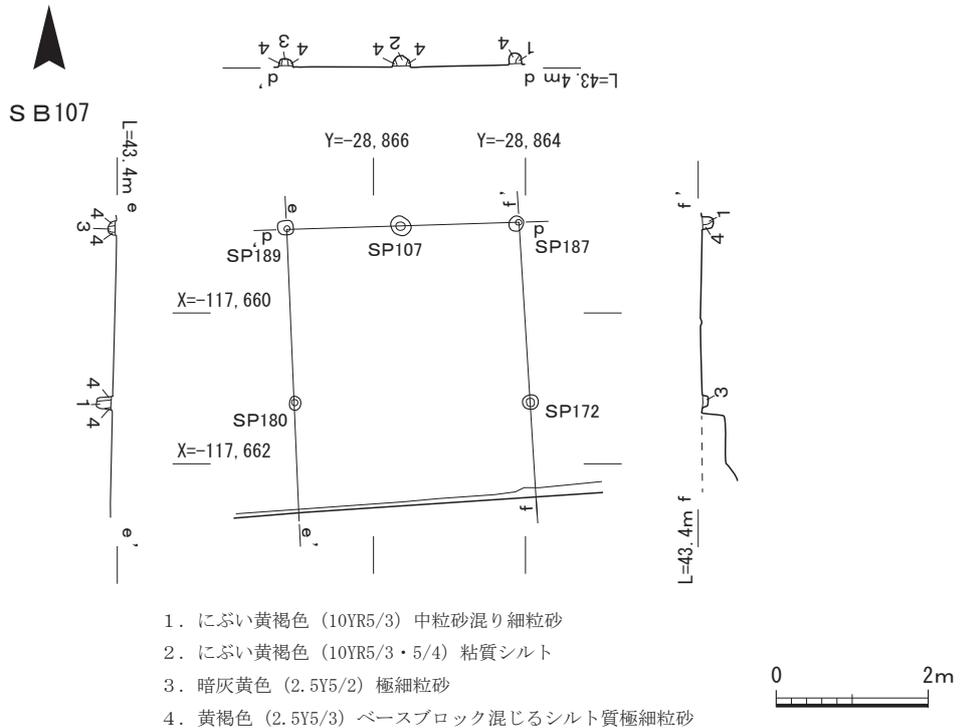
1. 灰褐色 (7.5YR5/2) ・ にぶい褐色 (7.5YR5/3) 斑状極細粒砂
2. 明赤褐色 (5YR5/6) 粘質土 (焼土)
3. 暗褐色 (10YR3/3) 粘質極細粒砂 (炭多い)
4. 灰黄褐色 (10YR4/2) ・ 褐色 (10YR4/4) 混じる粘質土
5. 灰黄褐色 (10YR4/2) ・ 褐色 (10YR4/4) 混じる粘質土 (炭・焼土多く混じる)
6. にぶい黄褐 (10YR5/4) 暗褐色 (10YR3/3) 混じる粘質極細粒砂

第15図 竪穴建物 SH102平・断面図



1. 灰黄褐色 (10YR6/2) に暗褐色 (10YR3/3) 混じる極細粒砂
2. にぶい黄褐色 (10YR4/3) に灰黄褐色 (10YR6/2) 混じる粘質極細粒砂

1. 床土
2. にぶい黄褐・褐色 (10YR5/3・4/4) 極細粒砂 (マンガン混じる) (包含層)
3. 暗褐色 (10YR3/4) 細粒砂混じり極細粒砂 (1cm以下の垂角礫わずかに混じる)
4. にぶい黄褐色 (10YR4/3) 極細粒砂 (ベースブロック混じり)



1. にぶい黄褐色 (10YR5/3) 中粒砂混り細粒砂
2. にぶい黄褐色 (10YR5/3・5/4) 粘質シルト
3. 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 極細粒砂
4. 黄褐色 (2.5Y5/3) ベースブロック混じるシルト質極細粒砂

第16図 土坑 S K 112・S K 123、掘立柱建物 S B 107 平・断面図

S P 108(第7図) 3-2トレンチやや東寄り(o17区)で検出した楕円形を呈するピットである。長径0.47m、短径0.28m、深さ0.33mを測り、埋土から須恵器杯H身(155)が出土した。

4)古墳時代

S D 100(第7図) 3-2トレンチ中央(o・p17・18区)で北から東に40°振る溝である。検出長6.12m、幅0.5~0.6m、深さは0.16mを測り、南に向かって浅くなり途切れている。埋土から須恵器杯Hの身と蓋(156・157)などが出土した。

5)時期不明

S B 107(S P 107・172・180・187・189:第16図) 3-2トレンチo・p17区で検出した南北方向の掘立柱建物である。東西2間、南北1間以上の規模で、南側に展開するものとみられる。柱穴の掘形は小さく、直径0.2m前後の円形か隅丸方形を呈し、深さも0.07~0.2mと浅い。出土遺物は小片ばかりで時期を決め得るものがない。

S P 110(第7図) 3-2トレンチp17区で検出した長径0.26m、短径0.23m、深さ0.09mを測る楕円形のピットである。S H 102を削平しており、須恵器蓋などとともに弥生後期から古墳時代にかけての高杯脚部(161)が出土した。

7. 出土遺物

整理箱9箱分の遺物が出土した。

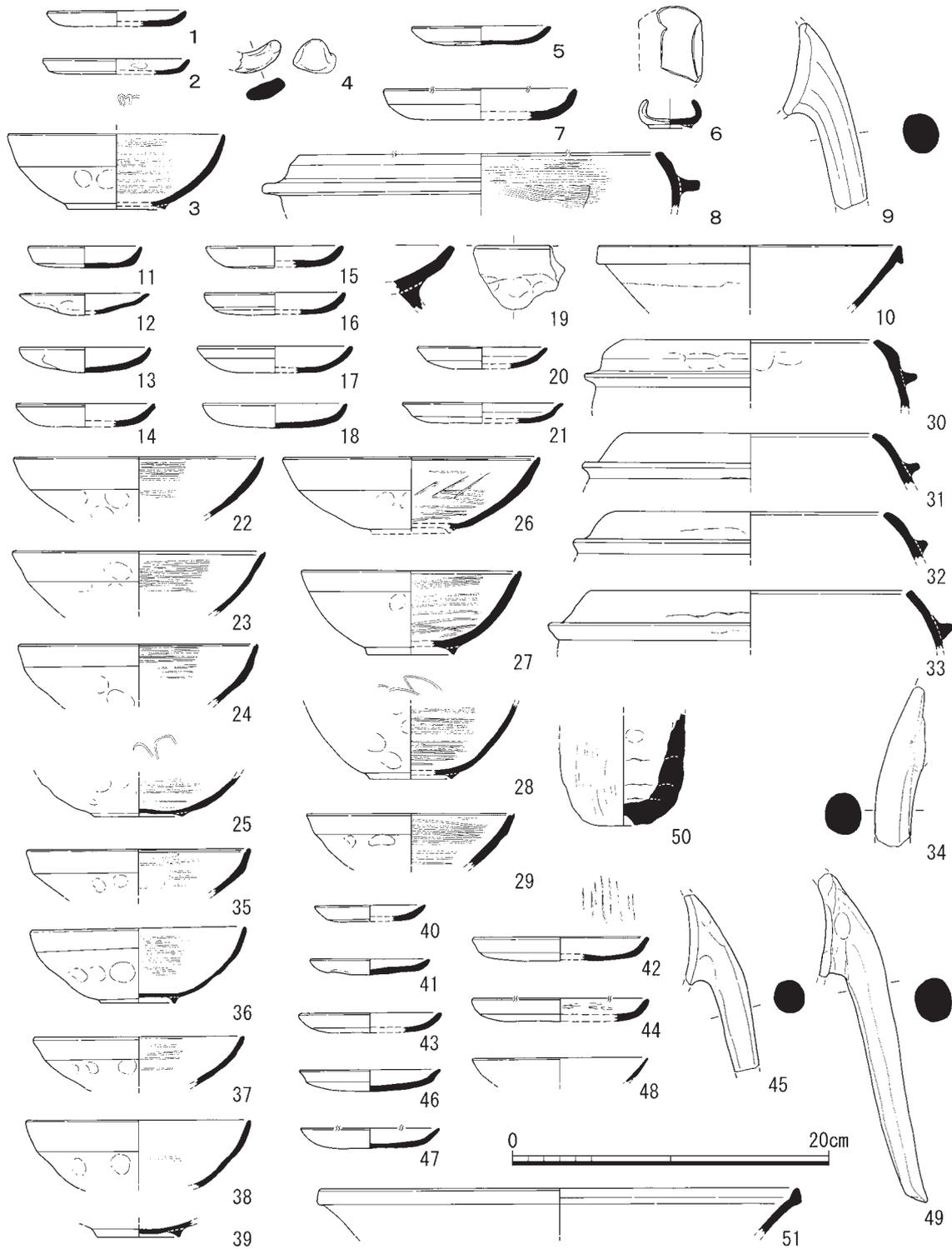
1)土器・土製品

(1)中世(第17図)

S D 139(1~3) 1・2は土師器皿である。いずれも口径9cm前後で深さ1cmと浅く、口縁部をわずかに外傾させる。2は端部内外面に煤が付着しており、灯明皿として使用されたとみられる。3は瓦器椀である。やや丸みを帯びた体部で、内面には圏線ミガキが残る。

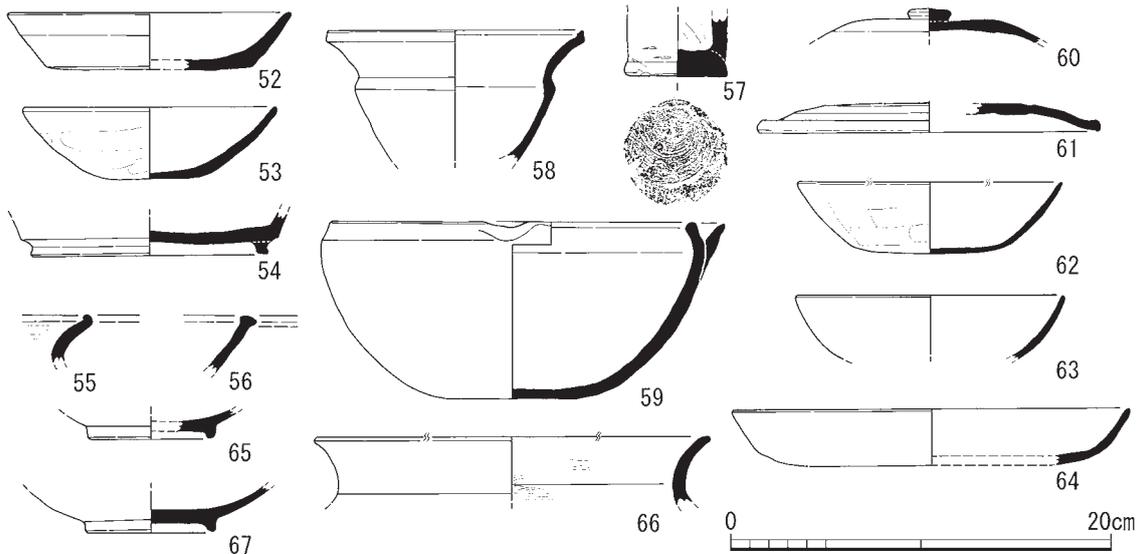
S B 23(4) 4は瓦質土器の把手部分である。幅2.5cmと小さく、あまりみられないものであるが、小形の鍋などにつくものか。S P 24から出土した。

S B 131(5~34) 5は土師器皿である。ややいびつであるが、外傾しながら外側に立ち上がる。6は土師器耳皿である。土師器皿の年代観よりやや古相で、混入品とみられる。S P 145から出土した。7は土師器皿である。器壁がややぼつてりと厚みがあり、端部は直立気味に立ち上がる。8は瓦質羽釜である。内面に細かいヨコハケが認められる。S P 162から出土した。9は瓦質三足羽釜の脚部である。10は白磁の椀Ⅳ類である。外に開く直線的な体部と玉縁を持つ。外面の釉は口縁部から体部上半のみに認められる。12世紀前半頃のものである。9・10はS P 131から出土した。11~18は土師器皿である。口径は8~9cm前後のものが中心となる。端部は直立気味に立ち上がるものと内湾気味に立ち上がるものがある。13の外面には粘土の切り込み痕跡が残る。19は土師器脚付皿である。脚部分をユビオサエによって貼り付ける。20・21は瓦器皿である。ミガキは認められない。22~29は瓦器椀である。22~24・29は端部の真上から沈線を施し、器壁が薄い大和型、26・27は端部の横位から沈線を施し器壁が厚い樟葉型である。いずれも内面



第17図 出土土器実測図1(中世)

に圏線ミガキが施されるが、大和型のものとは細く、楠葉型のものとは粗い。26の内面にはコテ当て痕が残る。外面にミガキの残るものはなく、断面三角形の小さな高台を貼り付けることから、いずれも13世紀のものと思われる。30~34は瓦質土器三足羽釜である。いずれも口縁部は内傾して短い鍔がつくタイプのものである。体部は少なくとも5個体あり、脚部もあるがいずれも接点はない。11~28・30~34はS P144出土、29はS P142からの出土である。



第18図 出土土器実測図2(長岡京期・平安時代)

S P 28(48) 48は白磁皿である。器壁は薄く、内外面に透明釉が施される。

S P 44(39) 39は瓦器椀の底部である。底部には断面三角形の小さな高台を貼り付ける。

S P 141(36) 36は瓦器椀である。摩滅気味であるが、内面に圏線ミガキが残る。口縁端部に沈線は認められない。

S P 147(40~42) 40・41は土師器皿である。口径7cm前後、深さ1cmと浅く、口縁部をわずかに外傾させる。42は瓦器皿である。見込みには極めて細かいジグザグ状ミガキが残る。

S P 160(49・51) 49は瓦質三足羽釜の脚部である。51は東播系須恵器鉢である。器壁は薄めで端部はやや上下に突出する。12世紀後半から13世紀始め頃とみられる。

S P 183(35・46・47) 35は瓦器椀である。内面には圏線ミガキが残り、端部は横位から沈線を施す樟葉型である。46・47は小形の土師器皿である。46にはヨコナデによる段が認められる。

S P 200(38) 38は瓦器椀である。器壁は薄く、内面にわずかにミガキが残る。

S P 229(43~45) 43は小形の土師器皿である。44は瓦器皿である。内面にわずかにミガキが残る。45は瓦質三足羽釜の脚部である。

S P 245(37) 37は瓦器椀である。外形は浅椀形で器壁は薄く、内面にミガキが残る。

S P 253(50) 土師質の手づくね土器である。外面に一部ハケが認められるが、内面には粘土の積み上げ痕が明瞭に残る。底部には貫通しない穴が認められるが、用途は不明である。

(2)長岡京期から平安時代(第18図)

S D 186(52) 52は須恵器杯Aである。内外面を回転ナデで、底部外面は軽いナデで仕上げる。

S B 01(53~55) 53は土師器椀Aである。全体的に摩滅しているが、外面はケズリによる面が見られる。54は須恵器杯Bである。高台を外寄りに貼り付ける。55は土師器甕の口縁部である。内面にやや粗めのヨコハケを施し、端部を折り曲げる。53はS P 01から、54・55はS P 79から出土した。

S B 103 (56~59) 56は須恵器盤の口縁部である。焼成はやや甘い。S P 103から出土した。57は須恵器壺Gである。底部近くのみ残存である。断面は橙褐色で底部外面は糸切り後無調整である。S P 105から出土した。58は須恵器壺Hである。狭い肩部に稜を持ち、口縁部は大きく外反して広口となる。口縁端部は上部につまみ上げ三角形状を呈する。59は土師器の片口鉢である。内湾しながら伸びる体部から口縁端部は内傾し、平らな底部を持つ。摩滅しているものの、内面は平滑に仕上げられ、体部外面上半には一部粘土積み上げ痕が観察できる。いずれもS P 125から出土した。

S A 111 (60・61) 60は須恵器蓋である。ボタン状の扁平なつまみを持つ。61は須恵器杯B蓋である。頂部外面はヘラケズリし、端部はわずかに折り返す。60はS P 111、61はS P 114から出土した。

S P 116 (62~64) 62・63は土師器碗Aである。いずれも磨滅しているが、62は外面を口縁部近くまでケズリ薄く仕上げている。64は土師器皿Aである。端部は折り返さず丸く仕上げる。

S P 124 (66) 66は土師器甕の口縁部である。内面にヨコハケが残る。

S P 194 (67) 67は緑釉陶器の碗か皿の底部である。釉薬は認められないが、底部は削り出しの輪高台で、手法としては緑釉陶器のものである。見込み部分には、成型後器面が乾燥する前についたとみられる重ねた痕跡と、焼成時についたとみられる灰色の重ね焼き痕が円形に残る。

S X 14 (65) 65は緑釉陶器の底部である。底部は削り出し高台で、内外面にはわずかに釉薬が残る。高台内面には、わずかに墨痕が観察できる。

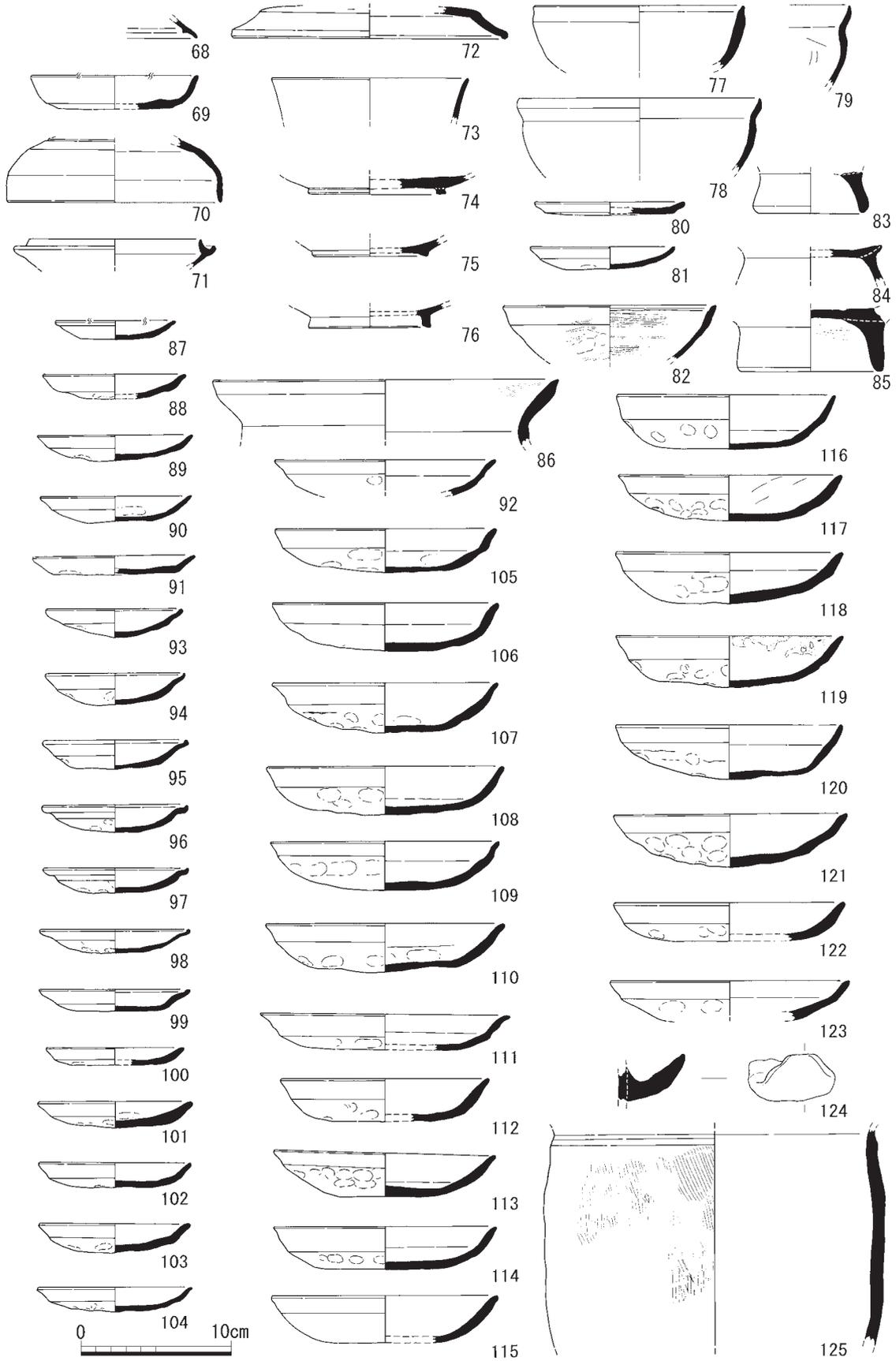
S E 101 (第19・20図) S E 101は周辺の遺構を壊して構築された井戸であるため、混入品も多く存在する。そのため、明らかな混入品については、最初にまとめて報告し、そのあとで層ごとの一括資料として上層から順にまとめて報告する。

68~79は平安時代以前の遺物で混入したものである。68は須恵器杯G蓋の口縁部である。返りが短く、69のような杯と組み合うものか。69は須恵器杯G身である。底部はほぼ無調整であるが、蓋の可能性もある。

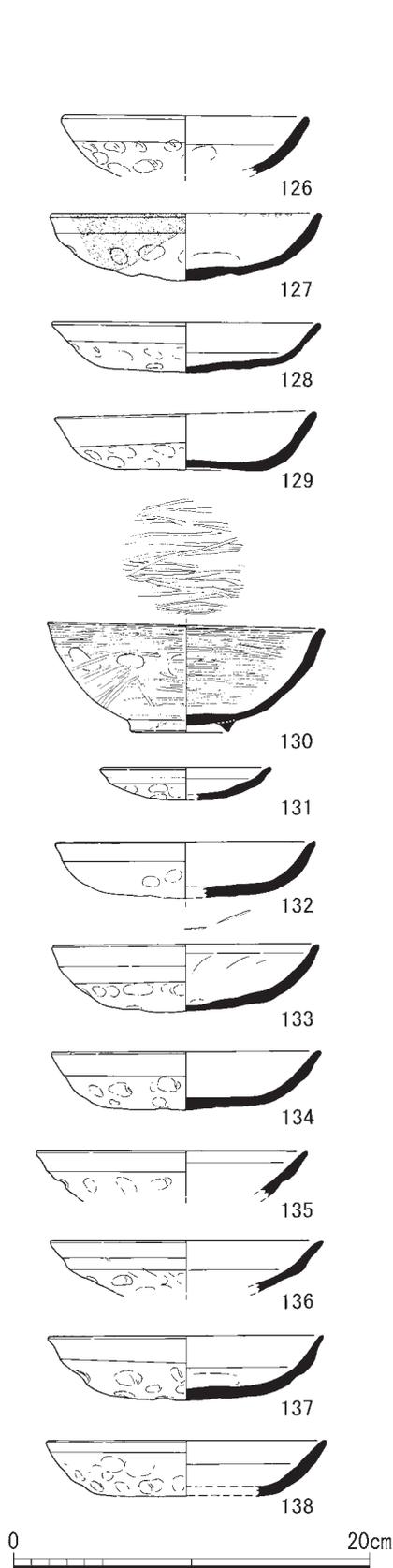
70は須恵器杯H蓋である。天井部外面を回転ヘラケズリで、口縁部周辺は回転ナデで調整し、体部との間には段差が認められない。71は須恵器杯H身である。口縁部が内傾しながら短く立ち上がり、受け部から0.5cm突出する。これらは、古墳時代末から飛鳥時代に位置づけられる。

72は須恵器杯蓋である。天井部外面を回転ヘラケズリで調整し、口縁端部には沈線を施す。73は須恵器杯である。口縁部が外上方に直線的に開く。74は須恵器杯Bの底部である。75は須恵質の緑釉陶器である。釉は残っていないが、高台を削り出すなど製作技法は緑釉陶器のものである。76は灰釉陶器の皿である。高台を削り出す。75・76は9世紀頃のものである。77は土師器杯Cである。端部をやや斜め上につまみ上げてわずかに外反させる。78・79は土師器鉢である。口縁部はやや内湾しながら短く立ち上がる。77~79は飛鳥時代頃か。

80~82は井戸最上層から出土した。80・81は土師器の小形皿である。80は極めて浅く小さく立ち上がり、器壁も厚い。81は器壁が薄く、やや内湾しながら立ち上がる。



第19図 出土土器実測図3(平安時代S E101-1)



第20図 出土土器実測図4
(平安時代S E101-2)

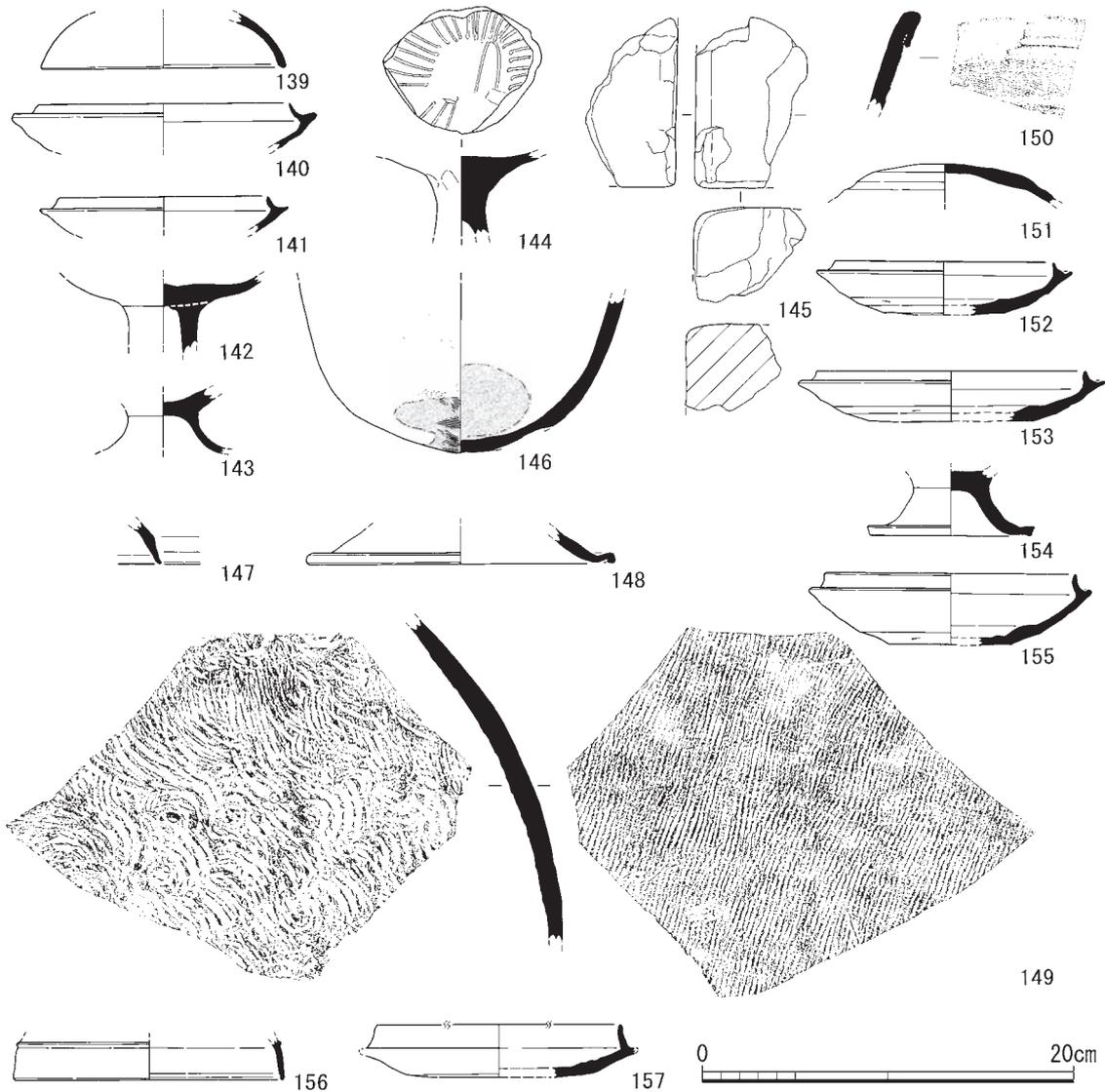
82は瓦器椀である。端部の少し下がった位置に沈線を横位から施す樟葉型で、口縁部周辺の器壁が厚く、内面は圏線ミガキ、外面にもわずかにミガキが残存する。

83~92は、井戸上層から出土した。83~85は台付皿である。いずれも高台部分のみで、皿の口縁部は残存していない。86は土師器甕の口縁部である。口縁部内面にはわずかにハケが残る。87~92は土師器皿である。直径10cm前後と15cm前後の2種類に大別できる。小形のものは、器高が1.8cm前後で口縁部が斜め外側に緩く開くもの(88~90)と、器高が1.2cm程度で口縁部が底部から短く外傾するもの(87・91)がある。大形の92は端部に煤が付着しており、燈明皿とみられる。

93~125は、井戸中層から出土した。93~123は土師器皿である。直径9~10cmの小形品(93~104)と14~16cmの大形品(105~123)の2種類に大別できる。93~99はいわゆる「て」の字口縁で、器壁の薄いもの(93・98)とやや厚手のもの(94~97)がある。小形の皿にも薄手のもの(102・104)とやや厚手のもの(100・101・103)がある。大形の皿は、薄手で端部をやや強く外反させるもの(105~111)と、やや厚手で斜めに緩く開くもの(112~123)がある。98及び119の内面には油煙の痕が大きく残っており、燈明皿として使用されたとみられる。104・120・121は北側から滑り落ちるように重なりあって出土したものである。124・125は土師器甕の把手とその体部である。125の外面にはタテハケが認められる。124と125は、色調・胎土等も異なっており、別個体である。

126~130は、井戸下層から出土した。126~129は土師器皿である。いずれも口縁部の外反は緩く、ほぼ直線的である。127・128は内外面に煤が付着しており、燈明皿として使用されたとみられる。130は完形の瓦器椀である。内面には隙間なく圏線ミガキが施され、外面にも密にヘラミガキされる。口縁端部には横位から沈線が施され、樟葉型とみられる。

131~138は、井戸最下層から出土した土師器皿である。小形の131は、口縁端部をやや強くナデて外反させる。大形のものは、口縁端部が直線的に開くもの(133・134・138)と、端部の外反が緩いもの(132・135~137)がある。外面下半のユビオサエの中には爪痕が残るもの(134・136~138)もある。



第21図 出土土器実測図5(古墳時代・飛鳥時代)

混入品を除く土器は、全ての層において平尾編年^(注6)で4B~4C段階の特徴を持っており、層による大きな時期差は認められないことから、11世紀後半頃に位置付けられよう。

(3) 飛鳥時代(第21図)

S H102(139・140・143~145) 139・140は須恵器杯Hの蓋と身である。蓋の端部は丸く収め、外面に稜をもたない。身は口縁部が内傾しながら短く立ち上がり、受け部から0.5cm突出する。いずれもTK209型式から飛鳥I^(注7)の特徴をもつ。143は須恵器低脚高杯である。杯部・脚部とも端部を欠損するが、内外面とも回転ナデで調整する。144は土師器高杯である。杯部の見込みには放射状ヘラミガキを施す。外面をナデで調整するが、一部に幅0.7cmの工具痕が残る。145は土製の埴とみられるものである。胎土は粗く、長辺9.35cm、短辺6.0cm、厚さ4.9cmを測る。

S K210(146) 146は土師器の長胴甕である。上半部は失われ全容は不明であるが、胎土はやや粗く、内外面に黒斑が認められる。外面の一部にはわずかにハケが残る。

S K231(141・142) 141は須恵器杯H身である。口縁部が内傾しながら短く立ち上がり、受

け部から0.6cm突出する。142は須恵器高杯である。焼成は甘く軟質である。全体を回転ナデで調整し、内面の見込み部分を一方向ナデで調整する。

S K 112 (147~149) 147は須恵器杯蓋口縁部である。端部は丸く仕上げる。148は須恵器高杯脚部である。回転ナデにより調整を行い、端部を小さく折り返す。149は須恵器甕体部である。外面は平行タタキによって調整しており、内面には同心円の当て具痕が残る。

S K 123 (150~153) 150は須恵器甕の口縁部である。2cm幅のハケ状工具で波状文を施し、上下に沈線を引く。151~153は須恵器杯Hの蓋と身である。151は頂部に回転ヘラケズリと回転ナデで調整する。152と153は口径の大小はあるが、口縁部が内傾しながら短く立ち上がり、受け部から0.5cm突出し、底部を回転ヘラケズリする。いずれもTK209型式から飛鳥Iの特徴をもつ。

S K 240 (154) 154は須恵器低脚高杯である。内外面を回転ナデで調整する。

S P 108 (155) 155は須恵器杯H身である。口縁部は内傾しながら短く立ち上がり、受け部から0.8cm突出する。底部は回転ヘラケズリする。飛鳥Iの特徴をもつ。

(4)古墳時代(第21図)

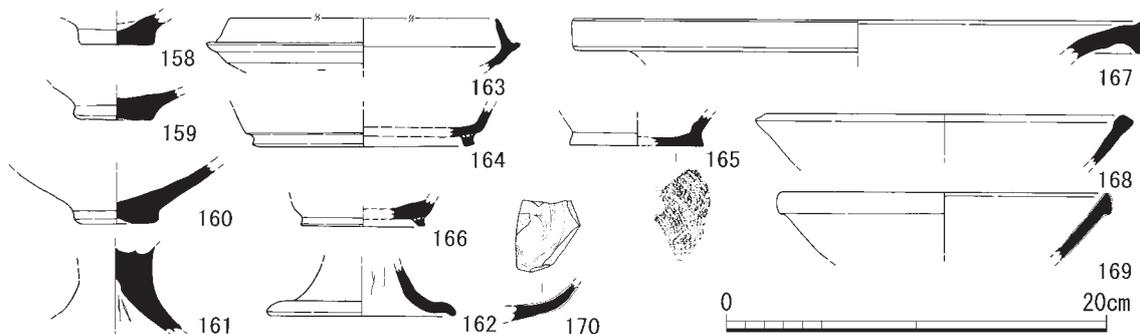
S D 100 (156・157) 156・157は須恵器杯蓋と杯身である。蓋には口縁端部に浅い沈線が認められ、外面もわずかに稜をもつ。身は受け部の端が欠損しているものの、口縁部の立ち上がりが受け部から上方へ1.3cm突出しており、TK10型式の特徴をもつ。

(5)包含層・混入品(第22図)

158~170は精査中や包含層、または遺構出土の混入品の土器である。出土地点の詳細については末尾の観察表を参照いただきたい。

158は弥生土器甕の底部である。159・160は弥生土器壺の底部である。いずれも磨滅しており調整は不明である。161・162は弥生から古墳時代初め頃の土師器高杯の脚部である。いずれも内面に絞り痕が認められる。163は須恵器杯身である。TK10型式頃の特徴を持つ。出土したSD104は浅く平安時代の井戸SE101を切る耕作溝であるため、こちらは混入品である。164は須恵器杯Bの底部である。断面台形の高台をやや外側に貼り付ける。

165は須恵器壺Gの底部である。糸切り痕が認められる。166は須恵器壺の底部である。断面台形の小さな高台を貼り付ける。167は須恵器甕の口縁部である。168は東播系須恵器の鉢である。口縁端部に重ね焼きの痕跡が認められる。11世紀頃のものか。169は白磁碗である。端部にやや



第22図 出土土器実測図6(包含層・その他)

肉厚の玉縁をもつIV類のもので、11世紀後半から12世紀前半のものである。170は龍泉窯系の青磁皿である。体部中位で屈曲する皿I類とみられる。底部は露胎で、見込みに楡状工具で花文を描く。12世紀中頃から後半のものである。

2)瓦(第23図)

SA111 171・172はいずれも平瓦である。凸面を縄目タタキで調整し、凹面は布目痕跡と一部にケズリが残る。いずれもSP111から出土した。

3)石製品(第23図)

173はSP114から出土したサヌカイト製の石鏃である。基部に抉りを持つ凹基式である。

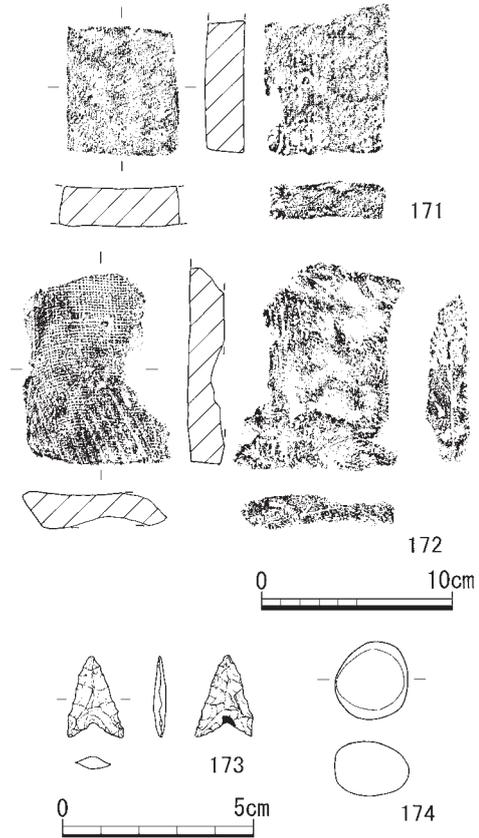
174はSP77から出土した基石と見られる石製品である。縦2.02cm、横1.97cm、厚さ1.4cmを測る。白色でやや平べったく、全体が滑らかである。

4)木製品(第24・25図)

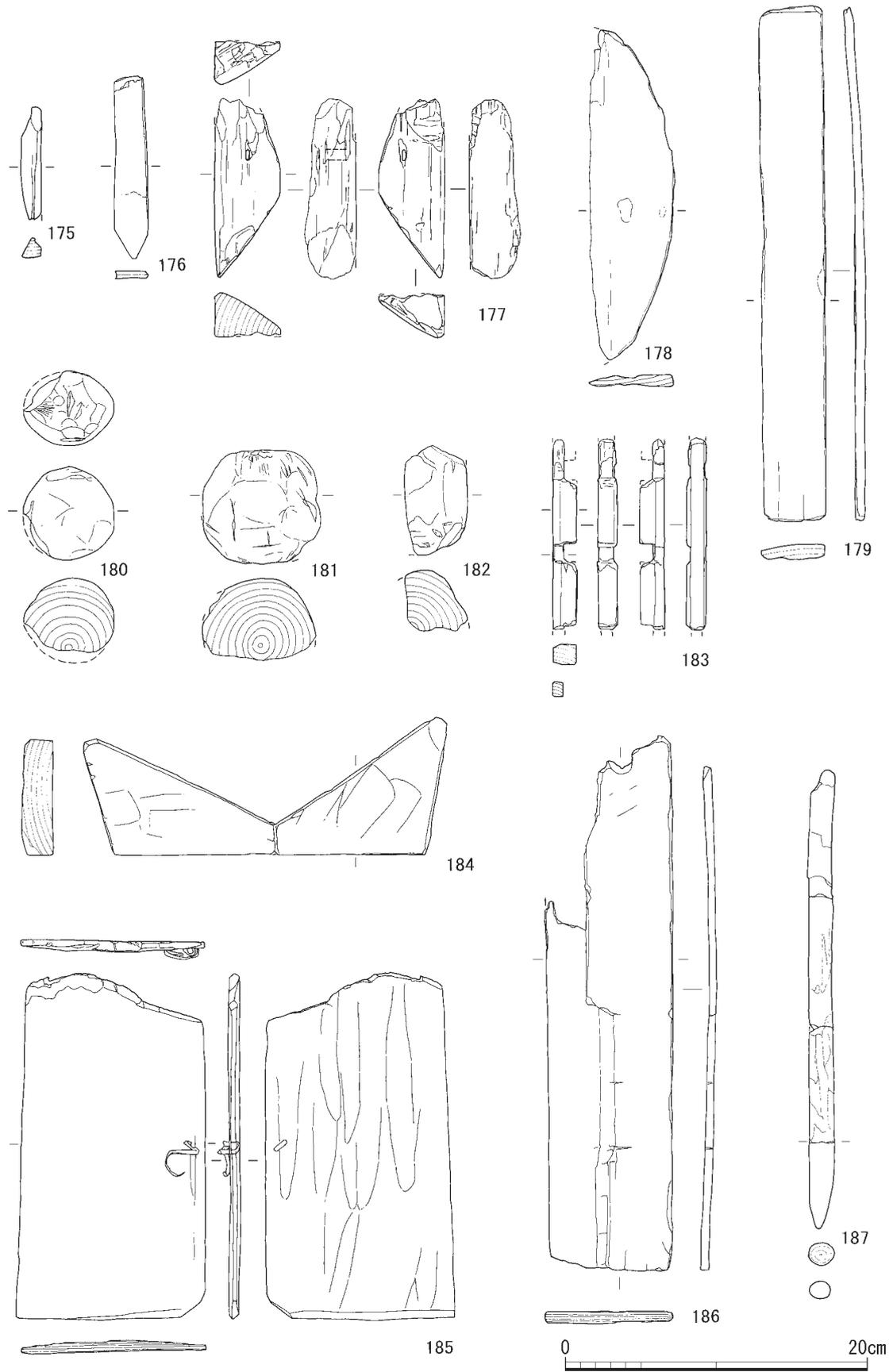
木製品のほとんどがSE101からの出土である。材質については、株式会社吉田生物研究所に樹種同定を委託した。

SE101 (175~188) 175はもえさしである。先端の一部が炭化している。上層から出土した。樹種はマツである。176は斎串である。先端を「V」字状に加工する。中層から出土した。樹種はスギである。177は部材片である。斜めに切断された痕があり、一か所に穿孔されている。井戸の部材の一部であった可能性がある。中層から出土した。178は曲物の底板である。木取りは板目であるが表面の加工痕は不明である。樹種はヒノキである。中層から出土した。179は折敷の底板である。厚さは0.7cmで、短辺端部の両側には刃物による切断面が認められる。樹種はスギである。

180~182は毬杖の球(毬)である。直径6~7cm前後のものともみられる。やや粗く面取りしながら球状に加工した痕跡が認められる。180・181の樹種はカキノキ、182はアカガシである。いずれも中層から出土した。183は不明木製品である。4.2cmおきに1.3cm幅で、横から見るとコの字形になるように3か所を方形に切り欠く。樹種はヒノキである。最下層から出土した。184は角材である。切断した残りの材とみられ、片面に手斧で削った痕跡が認められる。下層から出土した。185は折敷の底板である。端部にサクラ樹皮の紐が残存し、上面の一部には綴じていた曲物の痕跡が筋状に残る。裏面には鉋で削った痕跡が認められる。樹種はヒノキである。下層から出土した。186は板材である。スギを割っただけの板目材で加工痕はない。井戸枠の縦板であった可能性がある。下層から出土した。187は切断された棒材である。先端が尖るように加工され、



第23図 出土瓦・石製品実測図



第24図 出土木製品実測図1

3か所で切断された跡があるが、全体的に樹皮が残る。最下層から出土した。188は加工材である。全長187cm、幅16.8cm、厚さ6.4cmを測り、両面に手斧で丁寧加工した痕跡が残る。樹種はマツである。中～最下層にかけて出土した。

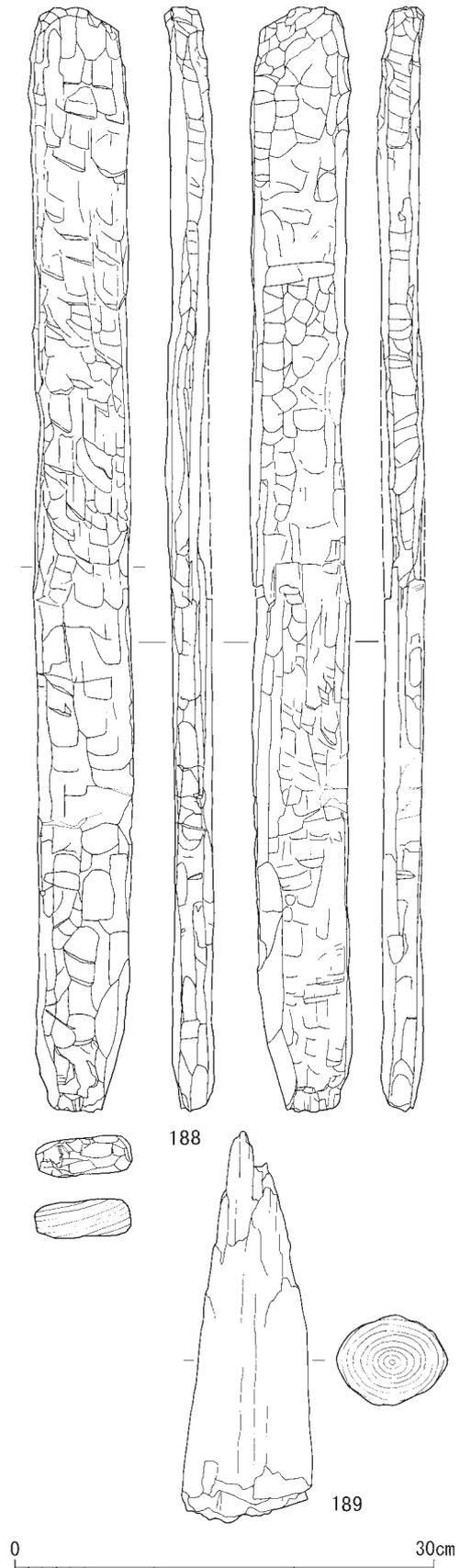
S P 75 (189) 89は柱穴内で検出した柱材である。材質はモミである。

8. まとめ

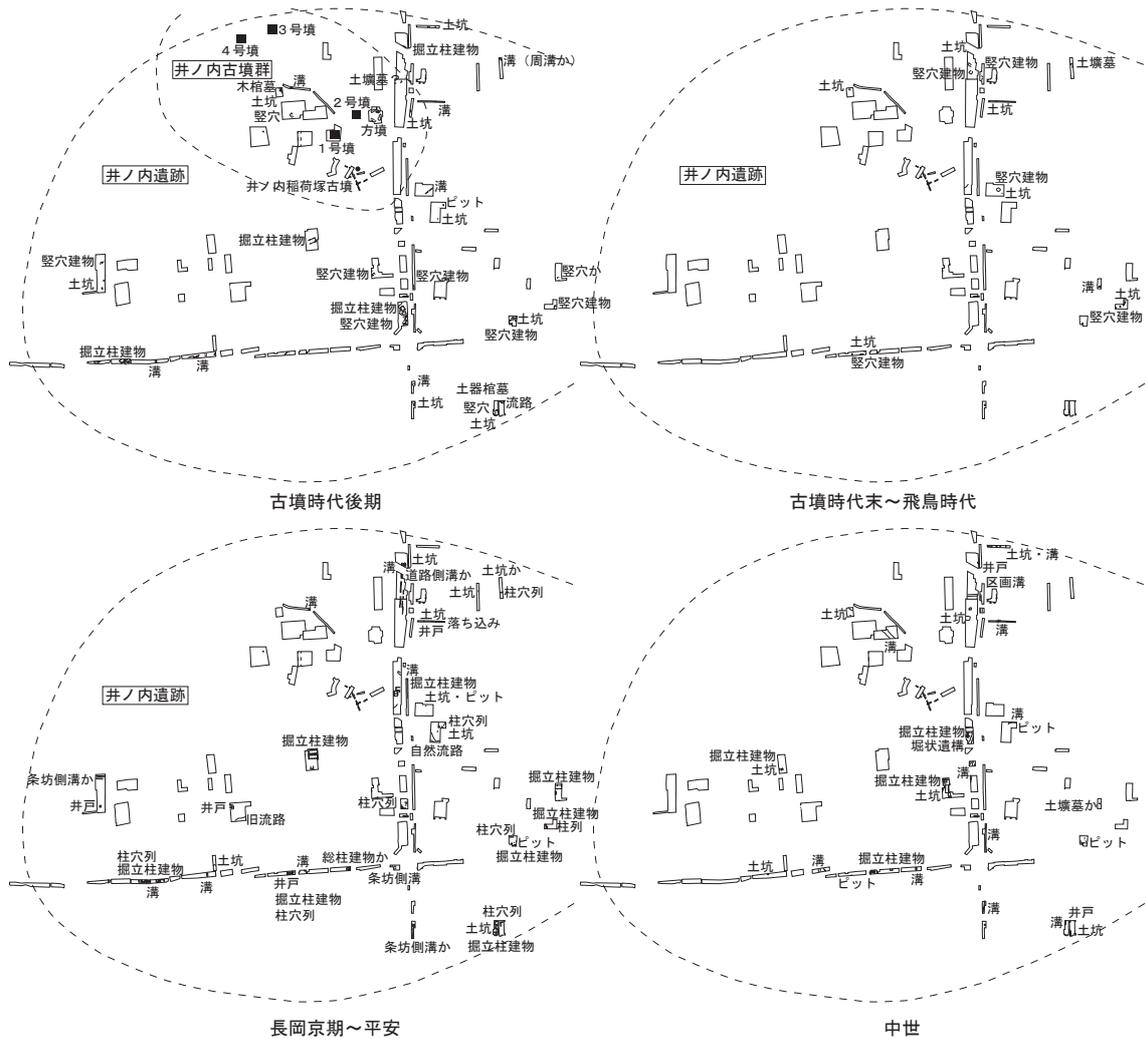
今回の調査においては、長岡京跡の条坊遺構は確認できなかったものの、一部の調査区において長岡京期とみられる遺構・遺物を確認した。また、井ノ内遺跡としては古墳時代後期から中世にかけての良好な資料を得ることができた。中でも、井戸 S E 101の資料は乙訓地域における11世紀後半の一括資料として注目すべきものである。

調査地周辺における遺構の変遷をみると、古墳時代後期では、井ノ内古墳群周辺に木棺墓や土壌墓といった埋葬施設が構築され、その周辺に居住域の広がりがみられた。古墳時代末から飛鳥時代にかけては古墳群を避けた外側へと居住域が広がり、調査地より南側への広がりも認められるようである。長岡京期から平安時代の遺構については、今回の調査では条坊側溝は認められなかったが、調査地中央付近(3-2トレンチ)において長岡京期の遺物を含む掘立柱建物や柱列を確認している。周辺における調査でも、井戸や条坊側溝、道路状遺構、掘立柱建物などが確認されており、長岡京期から平安時代にかけて調査地を含めた周辺一帯で開発が行われたことを如実に示している。

一方、今回の調査で見つかった平安末(11世紀後半)頃の遺構については遺物を含めあまり周辺でも見つかっておらず、今回の調査でも同時期の遺物を伴う建物遺構は確認できていない。井戸を使用した住空間が周辺に存在したと考えるならば、例えば明



第25図 出土木製品実測図2



第26図 調査地周辺の遺構変遷図

確な時期の遺物は伴わないが、井戸 S E 101 に近接する S B 107 をその候補として挙げることも可能であろう。中世の遺構については、井ノ内遺跡の中央部に掘立柱建物がやや集中しているが、その周辺に堀状遺構が認められるなど集落の中心となる地域が存在したことを示している。

今回の調査では、耕地化する際に遺構面が削平されており、単純に遺構密度だけで語ることはできないが、3-1 トレンチを中心とした13世紀の遺物を含む遺構の広がりを確認することができた。今回は、道路拡張予定地という限られた範囲の中での調査であったものの、各時期を通して様々な遺構・遺物を確認することができ、大きな成果があったと言えよう。(松井 忍)

注1 山本輝雄ほか1988「右京第235次(7ANGYT-3地区)調査略報 右京第253次(7ANGYT-5地区)調査略報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報 昭和61年度』(財)長岡京市埋蔵文化財センター

(財)長岡京市埋蔵文化財センター2013『長岡京市埋蔵文化財発掘調査資料選(二)』

注2 奥村清一郎ほか1980「2. 長岡京跡右京第27次発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報(1980-2)』京都府教育委員会

小田桐 淳1988「右京第236次(7ANGYT-4地区)調査略報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報 昭和61年度』

(財)長岡京市埋蔵文化財センター2012『長岡京市埋蔵文化財発掘調査資料選(一)』

竹井治雄ほか2010「2. 長岡京跡右京第952次(7ANGYT-7地区)・井ノ内遺跡発掘調査報告」『京都府遺跡調査報告集第137冊』(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

注3 竹井治雄1999「4.長岡京跡右京第615次(7 ANIHJ-6地区)発掘調査概要」『京都府遺跡調査報告集第89冊』(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

注4 岩松 保ほか1989「長岡京跡右京第277・306次発掘調査概要(7ANHKB-3・4)」『京都府遺跡調査概報第34冊』(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

木村泰彦2009「右京第904次(7ANGSK-2区)調査略報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報 平成19年度』(財)長岡京市埋蔵文化財センター

注5 岩崎 誠1988「右京第230次(7ANGYT-2地区)調査略報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報 昭和61年度』(財)長岡京市埋蔵文化財センター

柴 暁彦2002「2. 長岡京跡右京第704次(7ANGSK-1地区)・井ノ内遺跡発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報第102冊』(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

注6 平尾政幸2019「土師器再考」『洛史 研究紀要』第12号(公財)京都市埋蔵文化財研究所

注7 西 弘海1982「土器の時期区分と型式変化」『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ』奈良文化財研究所 学報第31冊

付表1 出土土器・土製品観察表

〈凡例〉

口径欄の記号 復元径:() ・小数点第2位を四捨五入、第1位で表示

器高欄の記号 残存高:() ・/:計測不能、-;該当部位なし

底径欄の記号 復元底径:() ・残存率;特に表記のないものは口縁部、底)は底部、体)は体部、基)は基部

番号	種類	器種	トレンチ	出土地点	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率	色調	調整	備考
1	土師器	皿	3-1	S D 139	8.8	1.0	-	1/12 強	にぶい橙 (5YR7/4)	内面:ナデ、外面:ナデ・無調整	
2	土師器	皿	3-1	S D 139	9.2	1.0	-	2/12 弱	にぶい橙 (5YR6/4)	内面:ヨコナデ・ナデ、外面:ヨコナデ・無調整	油煙痕
3	瓦器	椀	3-1	S D 139	13.6	(4.8)	-	3/12 強	灰 (N5/0)	内面:圏線ミガキ・ミガキ、外面:ヨコナデ・ユビオサエ・ナデ	貼り付け高台
4	瓦質土器	把手	2	S P 24 (S B 23)	-	/	-	把手一部	灰白 (N7/0)		
5	土師器	皿	3-1	S P 145 (S B 131)	8.6	1.2	-	3/12 強	淡橙 (5YR8/4)	内面:ナデ、外面:ナデ・無調整・ユビオサエ	
6	土師器	耳皿	3-1	S P 145 (S B 131)	-	1.8	3.5	底) 3/12	淡橙 (5YR8/4)	内外面:ナデ	貼り付け高台
7	土師器	皿	3-1	S P 142 (S B 131)	(12.0)	2.0	-	1/12 以下	浅黄橙 (10YR8/4)	内面:ヨコナデ・ナデ、外面:ヨコナデ・無調整	
8	瓦質土器	羽釜	3-1	S P 162 (S B 131)	(23.0)	(3.6)	-	1/12 強	灰 (N4/0)	内面:ヨコハケ、外面:磨滅	
9	瓦質土器	三足羽釜(脚部)	3-1	S P 131 (S B 131)	-	(11.8)	-	脚) 1/2	にぶい黄橙 (10YR6/3)	ナデ	
10	白磁	椀	3-1	S P 131 (S B 131)	19.0	(4.1)	-	1/12 強	灰白 (2.5Y8/1) 釉調:灰黄 (2.5Y7/2)	内面:施釉、外面:釉だまり・施釉・露胎・回転ヘラナデ	
11	土師器	皿	3-1	S P 144 (S B 131)	7.0	1.4	-	1/12	にぶい黄橙 (10YR7/3)	内面:ナデ・ユビオサエ、外面:ナデ	
12	土師器	皿	3-1	S P 144 (S B 131)	8.2	1.4	-	4/12	橙 (2.5YR7/6)	内面:ナデ・磨滅、外面:ナデ・磨滅・ユビオサエ	いびつ
13	土師器	皿	3-1	S P 144 (S B 131)	8.2~ 8.5	1.7	-	10/12	橙 (5YR7/6~ 2.5YR7/6)	内外面:ナデ・磨滅	いびつ

番号	種類	器種	トレンチ	出土地点	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率	色調	調整	備考
14	土師器	皿	3-1	S P 144 (S B 131)	8.6	1.5	-	3/12 強	にぶい橙 (7.5YR7/4)	内面：ナデ、外面：沈線・ナデ・磨滅	
15	土師器	皿	3-1	S P 144 (S B 131)	8.6	1.4	-	3/12 弱	橙 (5YR7/6)	内面：ナデ・磨滅、外面：ナデ・無調整	
16	土師器	皿	3-1	S P 144 (S B 131)	8.8	1.4	-	3/12 強	にぶい褐 (7.5YR6/3)	内面：ヨコナデ、外面：ヨコナデ・ナデ	
17	土師器	皿	3-1	S P 144 (S B 131)	9.6	1.7	-	2/12	にぶい黄橙 (10YR7/3)	内外面：ヨコナデ	
18	土師器	皿	3-1	S P 144 (S B 131)	9.0	1.6	-	3/12 強	にぶい黄橙 (10YR7/2)	内面：磨滅、外面：ナデ	
19	土師器	脚付皿	3-1	S P 144 (S B 131)	-	(4.1)	-	1/12 以下	橙 (7.5YR7/6)	内面：ナデ、外面：ナデ・ユビオサエ	貼り付け
20	瓦器	皿	3-1	S P 144 (S B 131)	8.0	(1.5)	-	3/12 強	灰 (N5/0)	内外面：ナデ	
21	瓦器	皿	3-1	S P 144 (S B 131)	10.0	1.3	-	2/12 強	灰 (N4/0)	内面：ナデ、外面：ナデ・無調整	
22	瓦器	椀	3-1	S P 144 (S B 131)	15.6	(3.9)	-	3/12 弱	灰 (N5/0)	内面：圏線ミガキ、外面：ヨコナデ・ユビオサエ・ナデ	大和型被熱か
23	瓦器	椀	3-1	S P 144 (S B 131)	15.8	(4.0)	-	3/12 弱	灰 (N5/0)	内面：沈線・圏線ミガキ、外面：ヨコナデ・ユビオサエ・ナデ	大和型
24	瓦器	椀	3-1	S P 144 (S B 131)	15.0	(3.8)	-	1/12 強	灰 (N4/0) ~ 赤橙 (10R6/8)	内面：沈線・圏線ミガキ、外面：ヨコナデ・ナデ・ユビオサエ	
25	瓦器	椀	3-1	S P 144 (S B 131)	-	(2.6)	5.5	3/12	灰白 (N7/0)	内面：圏線ミガキ・ミガキ、外面：ユビオサエ・ナデ	貼り付け高台
26	瓦器	椀	3-1	S P 144 (S B 131)	16.0	(4.7)	-	4/12	灰 (N6/0)	内面：ヨコナデ・沈線一条・圏線ミガキ、外面：ヨコナデ・磨滅・ユビオサエ・ナデ・磨滅	楠葉型コテ当て痕
27	瓦器	椀	3-1	S P 144 (S B 131)	13.7	(5.4)	-	1/12 強	灰白 (N7/0)	内面：ヨコナデ・沈線一条・圏線ミガキ、外面：ヨコナデ・ユビオサエ・ナデ	楠葉型器面良好貼り付け高台
28	瓦器	椀	3-1	S P 144 (S B 131)	-	(4.7)	5.2	3/12 強	灰 (N7/0)	内面：圏線ミガキ・暗文、外面：ナデ・ユビオサエ	貼り付け高台
29	瓦器	椀	3-1	S P 142	13.0	(3.4)	-	2/12 弱	灰 (N5/0)	内面：上からの沈線・圏線ミガキ、外面：ヨコナデ・ユビオサエ・ナデ	大和型
30	瓦質土器	羽釜	3-1	S P 144 (S B 131)	16.0	(4.4)	-	1/12 強	灰 (N4/0)	内面：ヨコハケ・ユビオサエ・磨滅、外面：ナデ・ユビオサエ・磨滅	
31	瓦質土器	羽釜	3-1	S P 144 (S B 131)	15.3	(3.3)	-	1/12 以下	灰 (N5/0)	内面：ナデ・磨滅、外面：磨滅	
32	瓦質土器	羽釜	3-1	S P 144 (S B 131)	16.8	(2.9)	-	2/12 弱	黄灰 (2.5Y6/1)	内面：ヨコナデ、外面：ナデ・磨滅	
33	瓦質土器	羽釜	3-1	S P 144 (S B 131)	19.6	(3.7)	-	1/12	黄灰 (2.5Y4/1)	内面：ナデ・磨滅、外面：ナデ	
34	瓦質土器	三足羽釜 (脚部)	3-1	S P 144 (S B 131)	-	(9.4)	-	約 1/3	にぶい褐 (7.5YR6/3)		
35	瓦器	椀	3-1	S P 183	14.0	(3.0)	-	2/12 強	灰 (N4/0)	内面：横からの沈線・圏線ミガキ、外面：ヨコナデ・ユビオサエ・磨滅	楠葉型
36	瓦器	椀	3-1	S P 141	13.5	4.6 ~ 4.9	-	ほぼ完形	灰 (N5/0)	内面：圏線ミガキ・磨滅、外面：ヨコナデ・ナデ・ユビオサエ・無調整	いびつ貼り付け高台
37	瓦器	椀	3-2	S P 245	13.2	(3.2)	-	2.5/12	灰 (N5/0)	内面：ヨコナデ・圏線ミガキ、外面：ヨコナデ・ユビオサエ	
38	瓦器	椀	3-1	S P 200	14.1	(4.3)	-	2/12 強	灰 (N6/1)	内面：磨滅、外面：ヨコナデ・ユビオサエ・ナデ	
39	瓦器	椀 (底部)	2	S P 44	(5.2)	(0.8)	-	1/12	外面：暗灰 (N3/0) 断面：灰白 (N8/0)	内面：磨滅、外面：ナデ	貼り付け高台

番号	種類	器種	トレンチ	出土地点	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率	色調	調整	備考
40	土師器	皿	3-1	S P 147	7.0	1.0	-	2/12	にぶい橙 (7.5YR6/4)	内面：ヨコナデ・ナデ、外面：ヨコナデ・無調整	
41	土師器	皿	3-1	S P 147	7.4	1.0	-	3/12 強	にぶい橙 (7.5YR7/4)	内面：ヨコナデ・ナデ、外面：ヨコナデ・ユビオサエ・無調整	
42	瓦質土器	皿	3-1	S P 147	11.0	1.6	-	2/12 弱	灰 (N7/0)	内面：ヨコナデ・ナデ・ミガキ・ユビオサエ、外面：ヨコナデ・ユビオサエ・無調整	
43	土師器	皿	3-1	S P 229	8.8	1.3	-	2/12 強	浅黄橙 (7.5YR8/4)	内面：ヨコナデ・ナデ、外面：ヨコナデ・無調整	
44	瓦器	皿	3-1	S P 229	11.0	1.5	-	1/12	灰 (N5/0)	内面：ヨコナデ・ナデ、わずかにミガキあり、外面：ヨコナデ・ナデ・無調整	
45	瓦質土器	三足羽釜 (脚部)	3-1	S P 229	-	11.0	-	1/2 本	外：灰 (N4/0) 内：にぶい黄橙 (10YR7/4)	ユビオサエ	
46	土師器	皿	3-1	S P 183	8.8	1.4	-	3/12 強	橙 (2.5YR6/6)	内面：ヨコナデ・ナデ、外面：ヨコナデ・無調整	
47	土師器	皿	3-1	S P 183	8.7	1.3	-	2/12 強	淡橙 (5YR8/4)	内外面：磨滅	
48	白磁	皿	2	S P 28	11.1	1.6	-	1/12 以下	灰白 (2.5Y8/2)	内外面：施釉	
49	瓦質土器	三足羽釜 (脚部)	3-1	S P 160	-	(21.0)	-	脚部完存	黄灰 (2.5Y5/1)	ナデ・ユビオサエ	
50	土師質	手づくね土器	3-1	S P 253	-	(最大 7.0)	-	(最大 体) 12/12	灰白 (10YR8/2)	内面：ユビオサエ 外面：磨滅・ナデ・ハケ	黒斑有
51	須恵器	鉢	3-1	S P 160	30.0	(3.0)	-	1/12 弱	灰白 (N7/0)	内外面：回転ナデ	
52	須恵器	杯A	3-1	S D 186	14.8	3.1	-	口) 1/12 強	灰白 (7.5Y8/1)	内面：回転ナデ、外面：回転ナデ・ナデ	
53	土師器	椀A	1	S P 01 (S B 01)	13.3	(3.8)	-	3/12 強	橙 (2.5YR6/8)	内面：ナデ (磨滅) 外面：ユビオサエ (ケズリか)	
54	須恵器	杯B	1	S P 79 (S B 01)	12.3	(2.1)	-	6/12 弱	灰白 (N7/0)	内面：ヨコナデ・ナデ、外面：回転ナデ	貼り付け高台
55	土師器	甕	1	S P 79 (S B 01)	-	(2.5)	-	1/12 以下	にぶい橙 (5YR7/4)	内面：ヨコハケ (荒)、外面：ナデ (磨滅)	
56	須恵器	盤	3-2	S P 103 (S B 103)	/	(3.0)	-	1/12 以下	灰白 (7.5Y8/1)	内外面：磨滅	
57	須恵器	壺G (底部)	3-2	S P 105 (S B 103)	-	(3.3)	5.0	底) 12/12	青灰 (5B5/1) 断面：橙 (2.5YR6/8)	内面：ナデ上げ・回転ナデ、外面：ナデ・糸切り無調整	
58	須恵器	壺H	3-2	S P 125 (S B 103)	13.4	(7.0)	-	4.5/12	灰白 (5Y7/1)	内外面：回転ナデ	
59	土師器	片口鉢	3-2	S P 125 (S B 103)	19.0	9.4	-	底) ほぼ完形	橙 (2.5YR6/8)	内外面：磨滅	
60	須恵器	蓋	3-2	S P 111 (S A 111)	-	(1.8)	-	天井) 2/12 強	灰白 (7.5Y7/1)	内面：：回転ナデ、外面：回転ナデ・ナデ	ツマミ径 2.2 cm
61	須恵器	杯B蓋	3-2	S P 114 (S A 111)	17.8	(1.5)	-	4/12 強	灰 (N6/0)	内面：：回転ナデ・ナデ、外面：回転ナデ・ヘラケズリ	口縁部ゆがみあり
62	土師器	椀A	3-2	S P 116	13.8	3.8	-	口) 1/12 以下	橙 (5YR6/6)	内外面：磨滅 ケズリか	
63	土師器	椀A	3-2	S P 116	14.0	(3.4)	-	1/12 強	橙 (5YR7/6)	内外面：磨滅 ケズリか	
64	土師器	皿A	3-1	S P 116	21.0	3.0	-	1.5/12	橙 (7.5YR7/6)	内外面：磨滅	
65	緑釉陶器	底部	1	S X 14	6.3	(1.3)	-	3/12	橙 (7.5YR7/6)	内外面：施釉	削り出し高台
66	土師器	甕	3-2	S P 124	(20.8)	(3.1)	-	1/12	橙 (5YR7/6)	内面：ナデ・ヨコハケ、外面：ナデ	

番号	種類	器種	トレンチ	出土地点	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率	色調	調整	備考
67	緑釉陶器	椀か	3-2	S P 194	6.6	(2.2)	-	底) 12/12	浅黄橙 (10YR8/4)	内外面：回転ナデ	削り出し高台底部に墨痕
68	須恵器	杯G蓋	3-2	SE 101 最上層	(10.0)	(1.4)	-	1/12 以下	灰白 (N7/0)	内面：回転ナデ、外面：ナデ	混入品
69	須恵器	杯G身	3-2	SE 101 最上層	11.0	2.3	-	1/12 以下	灰白 (7.5Y7/1)	内面：回転ナデ、外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ・無調整	混入品
70	須恵器	杯H蓋	3-2	SE 101 中層	14.2	(4.2)	-	2/12 弱	灰白 (N7/0)	内面：回転ナデ、外面：回転ナデ・回転ヘラケズリ	混入品
71	須恵器	杯H身	3-2	SE 101 上層	11.4	(1.9)	-	6/12 弱	灰白 (N7/0)	内外面：回転ナデ	混入品
72	須恵器	杯蓋	3-2	SE 101 上層	18.3	(2.2)	-	2.5/12	灰 (N6/1)	内面：回転ナデ、外面：回転ナデ・回転ヘラケズリ	混入品
73	須恵器	杯(口縁部)	3-2	SE 101 上層	13.0	(2.9)	-	1/12 強	灰白 (5Y7/1)	内外面：回転ナデ	混入品
74	須恵器	杯B	3-2	SE 101 上層	-	(1.1)	7.4	2/12	灰 (N5/0)	内面：回転ナデ・一方向ナデ、外面：回転ナデ	貼り付け高台混入品
75	緑釉陶器	底部	3-2	SE 101 最上層	7.5	(0.9)	-	3/12 強	灰白 (10YR8/1)	内外面：回転ナデ	削り出し高台
76	灰釉陶器	皿	3-2	SE 101 上層	-	(1.3)	8.0	3/12 弱	灰 (N6/1)	内外面：回転ナデ	削り出し高台
77	土師器	杯C	3-2	SE 101 最上層	14.0	(4.3)	-	1/12 以下	浅黄橙 (7.5YR8/4)	内外面：磨滅	
78	土師器	鉢	3-2	SE 101 上層	16.0	(5.0)	-	1/12	橙 (2.5YR6/8)	内外面：磨滅	
79	土師器	鉢	3-2	SE 101 中層	/	(5.6)	-	1/12 以下	外：橙 (2.5YR6/8) 内：にぶい橙 (2.5YR6/4)	内外面：磨滅・工具痕	
80	土師器	皿	3-2	SE 101 最上層	10.0	0.9	-	2/12	淡橙 (5YR8/4)	内面：ヨコナデ・ユビオサエ・ナデ、外面：ヨコナデ・ナデ	
81	土師器	皿	3-2	SE 101 最上層	9.6	1.5	-	6/12	橙 (7.5YR7/6)	内面：ヨコナデ・ナデ、外面：ヨコナデ・ナデ・ユビオサエ	
82	瓦器	椀	3-2	SE 101 最上層	14.0	(3.7)	-	1/12 強	灰 (N5/0)	内面：沈線・圏線ミガキ、外面：ナデ・ヨコナデ・ミガキ・ユビオサエ	楠葉型
83	土師器	台付皿	3-2	SE 101 上層	-	(2.7)	(7.6)	底) 1/12 以下	橙 (5YR7/6)	内面：ヨコナデ、外面：ナデ	いびつ
84	土師器	台付皿	3-2	SE 101 上層	-	(2.0)	8.8	底) 5/12	橙 (5YR7/4)	内外面：ナデ	貼り付け高台
85	土師器	台付皿	3-2	SE 101 上層	-	(4.2)	9.2	底) 12/12	にぶい橙 (7.5YR7/4)	内面：ヨコナデ・ハケ、外面：ヨコナデ	貼り付け高台
86	土師器	甕	3-2	SE 101 上層	23.0	(4.0)	-	1/12 弱	にぶい黄橙 (10YR7/3)	内面：ハケ(磨滅)、外面：ヨコナデ	
87	土師器	皿	3-2	SE 101 上層	8.0	1.3	-	1/12	にぶい橙 (7.5YR7/4)	内外面：ナデ	
88	土師器	皿	3-2	SE 101 上層	9.4	1.7	-	3/12 強	浅黄橙 (10YR8/4)	内面：ヨコナデ、外面：ヨコナデ・ユビオサエ	
89	土師器	皿	3-2	SE 101 上層	9.9~10.3	1.8	-	6/12 弱	橙 (5YR7/6)	内面：ヨコナデ・ナデ・ユビオサエ、外面：ヨコナデ・ナデ(磨滅)	
90	土師器	皿	3-2	SE 101 上層	10.0	1.7~1.85	-	完形	浅黄橙 (7.5YR8/4)	内面：ユビオサエ・ナデ・ヨコナデ、外面：ヨコナデ・ナデ	
91	土師器	皿	3-2	SE 101 上層	10.8	1.3	-	3/12	淡橙 (5YR8/3)	内外面：ヨコナデ・ユビオサエ・ナデ	
92	土師器	皿	3-2	SE 101 上層	14.6	(2.4)	-	1.5/12	灰白 (2.5Y7/1)	内面：ヨコナデ・ナデ、外面：ヨコナデ・ユビオサエ	口縁部煤付着
93	土師器	皿	3-2	SE 101 中層	9.0	1.9	-	完形	灰白 (10YR8/2)	内面：ヨコナデ・ナデ、外面：ヨコナデ	「て」の字
94	土師器	皿	3-2	SE 101 中層	9.2	2.1	-	完形	にぶい橙 (7.5YR7/4)	内外面：ヨコナデ・ナデ・ユビオサエ	「て」の字

番号	種類	器種	トレンチ	出土地点	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率	色調	調整	備考
95	土師器	皿	3-2	SE 101 中層	9.4	2.0	-	ほぼ完形	にぶい黄橙 (10YR7/3)	内面:ヨコナデ・ナデ、外面:ヨコナデ・ナデ・ユビオサエ	「て」の字
96	土師器	皿	3-2	SE 101 中層	9.5	1.9	-	完形	灰黄 (2.5Y7/2)	内面:ヨコナデ・ナデ、外面:ヨコナデ・ナデ・ユビオサエ	「て」の字
97	土師器	皿	3-2	SE 101 中層	9.6	1.7	-	7/12	浅黄橙 (7.5YR8/3)	内面:ヨコナデ・ユビオサエ、外面:ヨコナデ・ユビオサエ・ナデ	「て」の字
98	土師器	皿	3-2	SE 101 中層	9.9	1.6	-	5/12	灰白 (10YR8/2)	内面:ヨコナデ・ユビオサエ、外面:ヨコナデ・ナデ・ユビオサエ	「て」の字、内面に煤付着
99	土師器	皿	3-2	SE 101 中層	(10.0)	1.5	-	1/12 以下	にぶい橙 (5YR7/3)	内面:ヨコナデ・ナデ、外面:ヨコナデ・ナデ・ユビオサエ	「て」の字
100	土師器	皿	3-2	SE 101 中層	9.2	1.2	-	3/12 弱	灰白 (10YR8/2)	内面:ヨコナデ・ナデ、外面:ヨコナデ・ユビオサエ	
101	土師器	皿	3-2	SE 101 中層	9.6 ~ 10.1	1.5 ~ 1.8	-	完形	灰黄 (2.5Y7/2)	内面:ヨコナデ・ユビオサエ、外面:ヨコナデ・ナデ・ユビオサエ	
102	土師器	皿	3-2	SE 101 中層	10.0	1.7	-	4/12	灰黄 (2.5Y7/2)	内面:ヨコナデ・ナデ、外面:ヨコナデ・ナデ・ユビオサエ	
103	土師器	皿	3-2	SE 101 中層	10.0	2.0	-	ほぼ完形	浅黄橙 (7.5YR8/3)	内面:ヨコナデ・ナデ、外面:ヨコナデ・ナデ・ユビオサエ	
104	土師器	皿	3-2	SE 101 中層	10.2	1.7	-	完形	淡橙 (5YR8/3)	内面:ヨコナデ・一方向ナデ、外面:ヨコナデ・ユビオサエ	
105	土師器	皿	3-2	SE 101 中層	14.8	3.0	-	4/12	浅黄橙 (10YR8/3)	内外面:ヨコナデ・ユビオサエ・ナデ	
106	土師器	皿	3-2	SE 101 中層	15.0	3.3	-	完形	灰白 (10YR8/2)	内外面:ヨコナデ・ナデ・ユビオサエ	
107	土師器	皿	3-2	SE 101 中層	15.0	3.4	-	完形	にぶい橙 (7.5YR7/4)	内外面:ヨコナデ・ユビオサエ・ナデ、	
108	土師器	皿	3-2	SE 101 中層	15.6	3.2	-	3/12 弱	にぶい黄橙 (10YR7/3)	内面:ヨコナデ・ナデ、外面:ヨコナデ・ユビオサエ	
109	土師器	皿	3-2	SE 101 中層	15.2	3.3	-	完形	浅黄橙 (7.5YR8/3)	内面:ヨコナデ・ナデ、外面:ヨコナデ・ナデ・ユビオサエ	
110	土師器	皿	3-2	SE 101 中層	15 ~ 15.8	3.3	-	ほぼ完形	にぶい黄橙 (10YR7/3)	内面:ヨコナデ・ユビオサエ、外面:ヨコナデ・ナデ・ユビオサエ	
111	土師器	皿	3-2	SE 101 中層	16.6	2.4	-	1/12 強	にぶい黄橙 (10YR7/2)	内面:ヨコナデ・ナデ、外面:ヨコナデ・ユビオサエ・ナデ	内面に工具痕
112	土師器	皿	3-2	SE 101 中層	13.8	2.9	-	2/12 強	灰白 (10YR8/2)	内面:ナデ (磨滅)・ユビオサエ、外面:ヨコナデ・ナデ・ユビオサエ	
113	土師器	皿	3-2	SE 101 中層	14.8	2.8 ~ 3.2	-	完形	灰白 (10YR8/2)	内面:ヨコナデ・ナデ、外面:ヨコナデ・ユビオサエ・ナデ	
114	土師器	皿	3-2	SE 101 中層	14.8	3.0	-	3/12 強	灰白 (2.5Y7/1)	内面:ヨコナデ・ナデ、外面:ヨコナデ・ナデ・ユビオサエ	ゆがみあり
115	土師器	皿	3-2	SE 101 中層	15.0	3.2	-	2/12 強	浅黄橙 (7.5YR8/3)	内面:ヨコナデ・ナデ、外面:ヨコナデ・無調整	
116	土師器	皿	3-2	SE 101 中層	14 ~ 14.5	3.7	-	完形	浅黄橙 (10YR8/3)	内面:ヨコナデ・一方向ナデ、外面:ヨコナデ・ユビオサエ	
117	土師器	皿	3-2	SE 101 中層	14.8 ~ 15.3	3.1	-	完形	灰白 (10YR8/2)	内面:ヨコナデ・ユビオサエ・ナデ、外面:ヨコナデ・ユビオサエ	
118	土師器	皿	3-2	SE 101 中層	15.0	3.5	-	10/12	灰白 (10YR7/2)	内面:ヨコナデ・ナデ、外面:ヨコナデ・ユビオサエ・ナデ	
119	土師器	皿	3-2	SE 101 中層	15.0	3.5	-	完形	灰白 (10YR8/2)	内面:ヨコナデ・一方向ナデ、外面:ヨコナデ・ユビオサエ・ナデ	油煙付着
120	土師器	皿	3-2	SE 101 中層	15.0	3.7	-	完形	浅黄橙 (7.5YR8/3)	内面:ヨコナデ・ナデ、外面:ヨコナデ・ナデ・ユビオサエ	
121	土師器	皿	3-2	SE 101 中層	15.2	3.6	-	6/12	にぶい黄橙 (10YR7/2)	内面:ヨコナデ・ナデ、外面:ヨコナデ・ユビオサエ・ナデ	
122	土師器	皿	3-2	SE 101 中層	15.4	(2.6)	-	5/12	灰黄 (2.5Y7/2)	内面:ヨコナデ・ナデ、外面:ヨコナデ・ナデ・ユビオサエ	

番号	種類	器種	トレンチ	出土地点	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率	色調	調整	備考
123	土師器	皿	3-2	SE 101 中層	15.8	(2.7)	-	2/12弱	灰黄 (2.5Y7/2)	内面：ヨコナデ・ナデ、外面：ヨコナデ・ユビオサエ・ナデ	
124	土師器	甕 (把手)	3-2	SE 101 中層	-	(3.2)	-	把手部のみ	灰白 (2.5Y7/1)	外面：磨滅	
125	土師器	甕	3-2	SE 101 中層	-	(14.5)	-	3/12程度	橙 (2.5Y7/8)	内面：ナデ (磨滅)、外面：ヨコナデ・タテハケ	
126	土師器	皿	3-2	SE 101 下層	13.6	(3.3)	-	2.5/12	灰白 (7.5YR8/2)	内面：ヨコナデ・ナデ・ユビオサエ、外面：ヨコナデ・ユビオサエ	
127	土師器	皿	3-2	SE 101 下層	15.0	3.8	-	6/12弱	灰黄 (2.5Y7/2)	内・外面：ヨコナデ・ナデ・ユビオサエ、	内外面に煤付着
128	土師器	皿	3-2	SE 101 下層	15.0	2.8~ 2.9	-	11/12	淡赤橙 (2.5YR7/4)	内面：ヨコナデ・ナデ、外面：ヨコナデ・ナデ・ユビオサエ・	全面煤付着
129	土師器	皿	3-2	SE 101 下層	14.5	3.0~ 3.4	-	9/12	灰白 (10YR8/2)	内面：ヨコナデ・一方向ナデ、外面：ヨコナデ・ナデ・ユビオサエ	底部に作業台の痕跡
130	瓦器	椀	3-2	SE 101 下層	15.5	5.8~ 6.3	-	11/12	外面：暗灰 (N3/0) 断面：灰白 (N8/0)	内面：沈線・圏線ミガキ・ミガキ、外面：ミガキ	貼り付け高台楠葉型
131	土師器	皿	3-2	SE 101 最下層	9.5	1.9	-	2.5/12	浅黄橙 (7.5YR8/3)	内面：ヨコナデ・ナデ、外面：ヨコナデ・ナデ・ユビオサエ	
132	土師器	皿	3-2	SE 101 最下層	14.4	3.2	-	4/12弱	灰白 (10YR7/2)	内面：ヨコナデ・ナデ、外面：ヨコナデ・ナデ・ユビオサエ	底部に工具痕か
133	土師器	皿	3-2	SE 101 最下層	14.8	3.8	-	完形	灰白 (2.5Y8/2)	内外面：ヨコナデ・ナデ・ユビオサエ	内面に放射状の工具痕
134	土師器	皿	3-2	SE 101 最下層	15.0	3.3	-	9/12	淡黄 (2.5Y8/3)	内外面：ヨコナデ・ナデ・ユビオサエ	爪痕有
135	土師器	皿	3-2	SE 101 最下層	15.0	(2.6)	-	1/12強	灰白 (5Y7/2)	内面：ヨコナデ・ナデ、外面：ヨコナデ・ユビオサエ・ナデ	爪痕有
136	土師器	皿	3-2	SE 101 最下層	15.2	(3.0)	-	2/12強	浅黄橙 (10YR8/3)	内面：ヨコナデ・ナデ、外面：ヨコナデ・ナデ・ユビオサエ	爪痕有
137	土師器	皿	3-2	SE 101 最下層	15.3	3.7	-	7/12	灰白 (10YR7/1)	内外面：ヨコナデ・ユビオサエ・ナデ	爪痕有
138	土師器	皿	3-2	SE 101 最下層	15.6	(3.2)	-	3/12	灰白 (2.5Y8/1)	内面：ヨコナデ・ナデ、外面：ヨコナデ・ナデ・ユビオサエ	
139	須恵器	杯H 蓋	3-2	SH 102 西半	13.0	(3.0)	-	1/12強 (2片)	灰白 (N7/0)	内外面：回転ナデ	
140	須恵器	杯H 身	3-2	SH 102 東半	(13.4)	(2.6)	-	1/12以下	灰 (N6/0)	内外面：回転ナデ	
141	須恵器	杯H 身	3-2	SK 231 (SH 102)	(11.2)	(2.0)	-	1/12以下	灰 (N6/1)	内外面：回転ナデ	
142	須恵器	高杯	3-2	SK 231 (SH 102)	-	(3.5)	基) 4.2	基) 完形	灰白 (7.5Y8/1)	内面：回転ナデ・一方向ナデ、外面：回転ナデ	
143	須恵器	低脚 高杯	3-2	SH 102 北側	3.8	(2.8)	-	基) 12/12	灰白 (N7/0)	内外面：回転ナデ	
144	土師器	高杯	3-2	SH 102 北側	-	(4.1)	基) 2.6	基) 完形	橙 (2.5YR6/8)	内面：放射状ヘラミガキ、外面：ナデ (磨滅)	
145	土製品	磚	3-2	SH 102 北側	(9.4)	(6.0)	(4.9)	不明	橙 (2.5YR6/8)		
146	土師器	長胴甕	3-2	SK 210 (SH 102)	-	(9.2)	<17.4)	体) 12/12	明褐灰 (7.5YR 7/2)	内面：磨滅、外面：ハケ	黒斑あり
147	須恵器	杯蓋	3-2	SK 112 南西部	-	(2.4)	-	1/12以下	灰 (N6/0)	内外面：回転ナデ	
148	須恵器	高杯 (脚部)	3-2	SK 112 南西部	16.4	(1.9)	-	1/12以下	灰白 (5Y7/1)	内外面：回転ナデ	
149	須恵器	甕 (体部)	3-2	SK 112 北東部	-	/	-	1/12以下	灰 (N5/0)	内面：同心円タタキ、外面：平行タタキ	

番号	種類	器種	トレンチ	出土地点	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率	色調	調整	備考
150	須恵器	壺か	3-2	S K 123	-	(5.5)	-	1/12 以下	灰白 (7.5Y8/1) 外面：灰 N5/0	外面：回転ナデ・波状文・ハケ (幅 2mm)・沈線	
151	須恵器	蓋か	3-2	S K 123	-	(2.1)	-	天井部 7/12	灰白 (7.5Y8/1)	内面：回転ナデ、外面：回転ナデ・回転ヘラケズリ	
152	須恵器	杯 H 身	3-2	S K 123	11.8	2.9	-	4/12 強	灰白 (N8/0)	内面：回転ナデ、外面：回転ナデ・回転ヘラケズリ	
153	須恵器	杯 H 身	3-2	S K 123	14.4	2.8	-	1.5/12	灰白 (7.5Y7/1)	内面：回転ナデ、外面：回転ヘラケズリ	
154	須恵器	低脚高杯 (脚部)	3-1	S K 240	-	3.2	底) 8.6 基) 4.0	基) 完存 裾) 1/12	灰白 (N7/0)	内外面：回転ナデ	基部
155	須恵器	杯 H 身	3-2	S P 108	13.4	3.9	-	3/12 強	灰白 (7.5Y7/1)	内面：回転ナデ、外面：回転ナデ・回転ヘラケズリ	
156	須恵器	杯 H 蓋	3-2	S D 100	(14.4)	(2.3)	-	1/12 以下	灰 (N6/0)	内外面：回転ナデ	沈線による段
157	須恵器	杯 H 身	3-2	S D 100	(13.0)	(2.9)	-	1/12 以下	灰白 (N7/0)	内面：回転ナデ、外面：回転ナデ・回転ヘラケズリ	
158	弥生土器	底部	3-2	S H 102 下層	-	(1.2)	3.6	6/12 弱	外面：オリブ黒 (5Y3/1) 内面：橙 (7.5YR7/6)	内面：磨滅	
159	弥生土器	壺 (底部)	3-2	S H 102 (S K 210)	-	(1.8)	3.8	底) 12/12	橙 (2.5YR7/6)	内面：磨滅、外面：ナデ	
160	弥生土器	壺 (底部)	3-2	S H 102 1区	-	(2.7)	3.8	6/12	橙 (5YR6/6)	内面：磨滅、外面：磨滅	黒斑あり
161	弥生土器	高杯 (脚部)	3-2	S P 110	-	(4.4)	基) 4.0	基) 12/12	橙 (5YR6/8)	内面：絞り痕、外面：磨滅	
162	弥生土器	高杯 (脚部)	3-2	S H 102 (東半)	-	(2.7)	9.8	3/12 弱	橙 (5YR6/6)	内面：ヨコナデ・磨滅・絞り痕、外面：ナデ・磨滅	
163	須恵器	杯 H 身	3-2	S D 104	(14.0)	(2.7)	-	1/12 以下	灰白 (N8/0)	内面：回転ナデ、外面：回転ナデ・回転ヘラケズリ	
164	須恵器	杯 B	2	S P 28	(11.0)	(2.0)	-	2/12 強	灰白 (N7/0)	内外面：回転ナデ	貼り付け高台
165	須恵器	壺 G (底部)	2	o10 区 竹暗渠横	-	(1.6)	7.0	3/12	灰白 (N7/0)	内外面：回転ナデ	底部糸切り
166	須恵器	壺 (底部)	2	北壁精査	-	1.3	6.0	1/12 以下	灰白 (N7/0)	内外面：回転ナデ	貼り付け高台
167	須恵器	甕 (口縁)	1	西半精査	29.8	(2.1)	-	1/1 以下	灰 (N6/1)	内外面：回転ナデ	
168	須恵器	鉢	2	南側溝断ち割り	18.5	(1.9)	-	1/12 強	灰白 (2.5Y8/1)	内外面：回転ナデ	
169	白磁	椀	2	o10 区 竹暗渠横	17.0	(3.6)	-	1/12	灰白 (5Y7/2)	内外面：施釉	白磁椀 IV 類
170	青磁	皿	2	o10 区 竹暗渠横	/	/	-	1/1 以下	灰 (10Y6/1)	内面：施釉 (文様)、外面：施釉・露胎部	龍泉系皿 I 類

付表2 出土瓦観察表

報告番号	種類	トレンチ	出土地点	長さ (cm)	幅・径 (cm)	厚さ	色調	調整
171	平瓦	3-2	SP111・O17区	(7.0)	(6.3)	2.0	にぶい黄橙 (10YR7/3)	凸面：タタキ 凹面：ケズリ・布目 (摩滅)
172	平瓦	3-2	SP111 (SA111)・O17区	(10.4)	(7.4)	1.9	灰 (N7/0)	凸面：縄目タタキ 凹面：布目・ケズリ

付表3 出土石製品・木製品観察表

番号	種類	トレンチ	出土地点	長さ	幅	高さ・厚さ	材質 (樹種)	備考
173	石鏃	3-2	S P 114	2.2	1.5	0.4	サヌカイト	重さ：0.69 g 色調：灰白 (7.5Y7/1) 残存率：完 (少々欠損部アリ)
174	基石	1	S P 77	2.0	2.0	1.4	石英か	
175	もえさし	3-2	S E 101 上層	(7.5)	-	1.3cm	マツ科マツ属 [二葉松類]	
176	斎串	3-2	S E 101 中層	12.2	-	0.5	スギ科スギ属 スギ	加工痕あり
177	部材片	3-2	S E 101 中層	(12.0)	(4.4)	断面-2.9 (3.35-最大)	ヒノキ科ヒノキ属	縦5mm 横3mm の穿孔、切断面あり
178	曲物の底板	3-2	S E 101 中層	(22.1)	(5.6)	(0.8)	ヒノキ科ヒノキ属	
179	折敷の底板	3-2	S E 101 中層	34.5	4.3	0.7	スギ科スギ属 スギ	両端は刃物による切断
180	毬杖の球	3-2	S E 101 中層	6.3	6.0	-	カキノキ科カキノキ属	残存率：10/12 程度
181	毬杖の球	3-2	S E 101 中層	7.6	7.9	(5.5)	カキノキ科カキノキ属	残存率：1/2～2/3、放射組織
182	毬杖の球	3-2	S E 101 中層	(7.3)	(4.2)	(4.1)	ブナ科コナラ属アカガシ亜属	残存率：1/4、加工痕あり
183	不明木製品	3-2	S E 101 最下層	(12.7)	1.6(最大)	1.3(最大)	ヒノキ科ヒノキ属	3か所に切り欠き
184	角材	3-2	S E 101 下層	24.0	9.2	2.1	-	部材採取後の廃材か
185	折敷の底板	3-2	S E 101 下層	(23.2)	12.5 (最大)	0.7	ヒノキ科ヒノキ属	サクラ皮ヒモ幅：0.3cm 裏は鉋加工
186	板材	3-2	S E 101 下層	(71.6)	11.6	0.8 程度	スギ科スギ属 スギ	針葉樹 (削っただけ) 井戸枠 (縦板) の可能性あり
187	加工棒	3-2	S E 101 最下層	(30.7)	1.7(最大)	1.5	-	樹皮残存。刃物で切断されている。磨滅により工具痕は不明瞭
188	加工材	3-2	S E 101 中～下層	187.0	16.8	6.4	マツ科マツ属 [二葉松類]	
189	柱材	2	S P 75 (柱)	(33.3)	11 (最大)	7.7	マツ科モミ属	

2. 芝山遺跡・芝山古墳群第22次 (X-3区)発掘調査報告

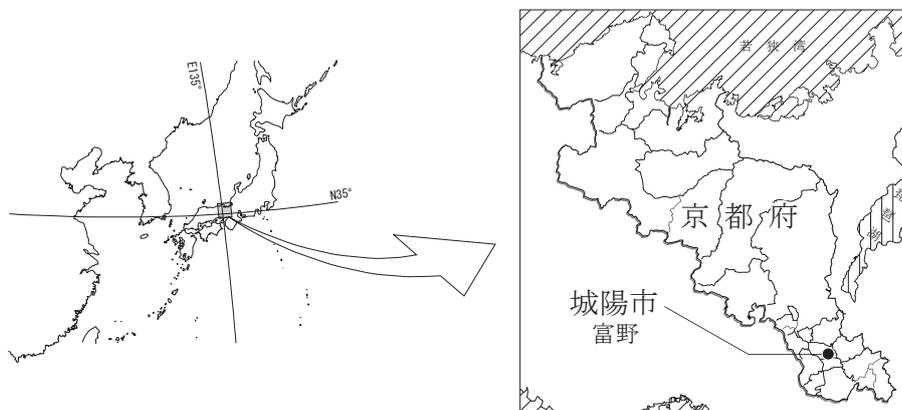
1. はじめに

今回の発掘調査は、新名神高速道路整備事業(大津～城陽)に伴い、西日本高速道路株式会社の依頼を受けて実施したものである。新名神高速道路は愛知県名古屋市を起点とし、兵庫県神戸市に至る総延長約174kmの高速道路である。既存の名神高速道路や京滋バイパス、近畿自動車道などと交通機能を分担することで、名神高速道路等の渋滞の緩和、利用者の利便性の向上を図ることを目的として建設が進められている事業である。新名神高速道路の予定路線のうち、京都府内では宇治田原町、城陽市、京田辺市、八幡市を通過する路線として17.7kmが計画された。この内、本書で報告する芝山遺跡・芝山古墳群が所在する城陽市域には、この他に下水主遺跡・水主神社東遺跡・小樋尻遺跡が所在する。

発掘調査は、下水主遺跡で平成24年度～令和3年度(第1・4・6・9～12次)、水主神社東遺跡で平成23年度～令和元年度(第1・2・5～8・11・13次)、小樋尻遺跡で平成29年度～令和2年度(第3・5・6・8・11次)、芝山遺跡・芝山古墳群で平成27年度～令和3年度(第15～21次)に実施されている。下水主遺跡第1・4・6・9～12次調査、水主神社東遺跡第1・2・5～7次調査、芝山遺跡・芝山古墳群第15～21次調査については、報告書を刊行している。

新名神高速道路整備事業に伴う平成27年度～令和3年度の芝山遺跡・芝山古墳群の発掘調査では、A地区からV地区の調査区名が付けられていたことから、今回の調査区はX地区とした。

令和5年度に調査を実施したX地区は3か所に分かれることから、調査順にX-1区、X-2区、X-3区とした。X-1・2区は、新名神高速道路と一般府道山城総合運動公園城陽線(府道256号)が立体交差する南西側にあたる。X-1区は平成14年度の一般府道上狛城陽線(現在の一般府道山城総合運動公園城陽線)建設に伴う第13次調査E地区の北西隅に接し、X-2区は第13次調査E地区の南西隅に接している。X-3区は、X-1・2区から東へ約230mに位置し、令



第1図 調査地の位置

和2年度の調査区であるV-1区の東側とV-5区の南側に接している。なお、X-1・2区については、令和5年度に報告書を刊行している。X-3区では、令和2年度V-5区の調査で周溝の一部がみつかったV-2号墳の埋葬施設2基と東側周溝を検出した。2基の埋葬施設からは副葬品がまとまって出土したため、今年度に整理作業及び報告書の刊行を行うこととなった。

現地調査にあたっては、京都府教育委員会、城陽市教育委員会のほか、各関係機関、地元の方々にご指導・ご協力をいただいた。

なお、調査に係る経費は、西日本高速道路株式会社関西支社新名神京都事務所が全額負担した。本文は、整理作業を担当した小泉裕司が執筆した。

付表1 芝山遺跡・芝山古墳群調査回数一覧表

年度	回数	調査期間	調査面積	調査機関	報告書	発行年	備考		
昭和52年度	1次	1977.4.1～ 1977.5.2	560 m ²	城陽市教育委員会	『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第7集	1978年			
昭和60年度	2次	1985.5.21～ 1986.3.25	3,760 m ²	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター	『京都府遺跡調査概報』第20冊	1986年			
昭和61年度	3次	1986.5.6～ 1986.9.2	4,960 m ²	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター	『京都府遺跡調査概報』第25冊	1987年			
平成5年度	4次	1994.2.1～ 1994.3.26	300 m ²	城陽市教育委員会	『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第28集	1995年			
平成6年度	5次	1994.8.1～ 1995.1.31	753 m ²	城陽市教育委員会					
平成7年度	—	1995.12.20～ 1995.12.21	14 m ²	城陽市教育委員会	—	—	試掘		
平成8年度	6次	1996.12.17～ 1997.1.27	180 m ²	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター	『京都府遺跡調査概報』第77冊	1997年			
平成9年度	7次	1997.3.17	—	城陽市教育委員会	『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第34集	1998年	試掘		
平成10年度	8次	1998.5.12～ 1998.10.31	1,089 m ²	城陽市教育委員会	『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第37集	1999年			
平成10年度	9次	1998.12.9～ 1999.2.18	680 m ²	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター	『京都府遺跡調査概報』第89冊	1999年			
平成13年度	10次	2001.12.17～ 2002.2.27	1,600 m ²	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター	『京都府遺跡調査概報』第105冊	2002年			
平成13年度	11次	2002.1.31～ 2002.2.8	—	城陽市教育委員会	『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第44集	2003年	試掘		
平成14年度	12次	2002.5.9～ 2002.5.31	240 m ²	城陽市教育委員会					
平成14年度	13次	2002.7.8～ 2003.2.27	4,500 m ²	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター	『京都府遺跡調査概報』第110冊	2004年			
平成15年度	14次	2003.4.16～ 2003.8.13	1,800 m ²	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター					
平成27年度	15次	2016.1.26～ 2016.3.4	550 m ²	(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター	『京都府遺跡調査報告集』第189冊	2023年			
平成28年度	16次	2016.4.25～ 2017.3.7	7,000 m ²	(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター					
平成29年度	17次	2017.4.17～ 2018.2.27	2,865 m ²	(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター					
平成30年度	18次	2018.4.12～ 2018.9.4	2,855 m ²	(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター					
平成30年度	19次	2018.7.9～ 2019.2.27	3,028 m ²	(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター					
平成31年度	20次	2019.4.22～ 2020.2.27	5,559 m ²	(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター					
令和2年度	21次	2020.5.7～ 2021.2.26	4,850 m ²	(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター					
令和5年度	22次	2023.5.22～ 2023.10.30	378 m ²	(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター			『京都府遺跡調査報告集』第194冊	2024年	X-1・2区
			122 m ²				本報告書	2025年	X-3区
令和5年度	23次	2023.8.1～ 2023.10.25	350 m ²	(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター			『京都府遺跡調査報告集』第194冊	2024年	

〔調査体制等〕

〈現地調査〉

調査責任者	調査課長	小池 寛
調査担当者	調査課課長補佐兼調査第4係長	中川和哉
	同 調査第4係調査員	小槻賢志

調査場所 京都府城陽市富野上ノ芝

現地調査期間 令和5年8月17日～令和5年10月30日

調査面積 122㎡

〈整理作業〉

整理作業責任者	調査課長	小池 寛
整理作業担当者	調査課課長補佐兼調査第4係長	中川和哉
	同 調査第4係副主査	小泉裕司

整理作業期間 令和6年4月1日～令和7年3月31日

2. 遺跡の地理的・歴史的環境

芝山遺跡・芝山古墳群が所在する城陽市域は南北5.4km、東西9.0kmで東西にやや長く、東部の山地・丘陵と西部の平野に二分される。山麓には宇治丘陵と呼ばれる大阪層群からなる洪積丘陵が東から西へのびており、宇治丘陵からは大谷川、長谷川、青谷川が西へ流下し扇状地を形成している。市域西部には木津川が形成した沖積平野が、河川に平行して南北に広がっている。

市域における最も古い人々の営みの痕跡としては、大谷川扇状地南側の丘陵上に所在する芝ヶ原遺跡で約2万年前の舟底形石器とナイフ形石器が出土している。縄文時代には、芝山遺跡・芝山古墳群の南側の丘陵上に所在する森山遺跡で後期後半の集落が営まれている。また、芝山遺跡・芝山古墳群や森山遺跡が所在する丘陵の西側に広がる平野部では、水主神社東遺跡で縄文時代後期～晩期の自然流路内に設置された木組み遺構や木道、杭列、小樋尻遺跡で縄文時代晩期の竪穴建物や土器棺が確認されている。近年の調査により、平野部における縄文時代後期～晩期の縄文人の営みが明らかになりつつある。弥生時代の人々の営みを知る遺跡は少ないが、森山遺跡や下水主遺跡で弥生時代後期の小規模な集落が営まれている。古墳時代初めには、大谷川扇状地南側の丘陵上に芝ヶ原古墳が築造される。これを契機として、大谷川扇状地とそれを望む丘陵上を中心に古墳時代前期～後期にかけて有力首長墳が連綿と築かれ、久津川古墳群が形成される。古墳時代前期には、西山古墳群、尼塚古墳群、上大谷8・15号墳、尼塚方墳などが築造される。また、芝山遺跡・芝山古墳群が所在する同じ丘陵上には梅の子塚古墳群(前方後円墳2基)が築造される。古墳時代中期には、南山城地域最大の前方後円墳である久津川車塚古墳(全長272m)や芭蕉塚古墳(全長161m)が築造され、古墳時代中期に南山城地域を治める大首長がこの地に存在したことを示している。このほかに丸塚古墳・梶塚古墳・芝ヶ原9～10号墳などが築造される。古墳時代後期には、芝ヶ原1～7号墳や上大谷1～5号墳などが築造される。また市域南部の青谷地域で

芝山遺跡は東から西へ延びる丘陵上に所在し、東西約950m・南北約840mを遺跡範囲とする縄文時代から中世の複合遺跡である。昭和52年度から平成15年度まで断続的に城陽市教育委員会と当調査研究センターにより発掘調査が実施されている。平成27年度～令和2年度には当調査研究センターが新名神高速道路建設に伴う発掘調査を実施している。これまでの発掘調査で、古墳時代から近世の土地利用の様子が明らかとなっている。古墳時代前期には竪穴建物1棟が確認され、小規模な集落が営まれる。古墳時代後期末ごろから竪穴建物が多数造られ、大規模な集落が営まれる。この集落は飛鳥時代後半に掘立柱建物へ移行し、平安時代初めまで存続する。掘立柱建物の大半は奈良時代のもので、奈良時代前半には官衙的な建物群が出現する。官衙的建物群の東側を南北に平行して走る溝が部分的に検出されており、道路遺構の側溝の可能性が指摘されている。平安時代初め以降は、中世と推定される掘立柱建物1棟の他には顕著な遺構は確認されていない。近世以降は耕作溝や粘土採掘坑が確認されている。

芝山遺跡内では、昭和52年度の調査で一辺約11mの方墳1基、昭和60年度の調査で10～20mの方墳や円墳が10基、平成6年度の調査で一辺約11mの方墳3基が確認された。これらのことから芝山遺跡内に削平された10～20mの方墳や円墳が多数存在することが想定されたため、芝山古墳群としてとして取り扱われるようになった。芝山古墳群では、これまでの調査で4世紀前半～6世紀末に築造された10～20mの方墳や円墳が39基確認されている。

3. 調査区並びに基本層序

1) 調査区

東西約23m・南北約5mの長方形の調査区である。V-2号墳の埋葬施設全体を検出するため、調査区中央付近の南壁を東西約4mにわたり南へ約2m拡張した。調査区の西側は令和2年度調査のV-1区、北側はV-5区に接する。東側と南側は、北東から南西に延びる丘陵斜面にあたり、現在は工専用道路の設置などにより急斜面となっている。

2) 基本層序

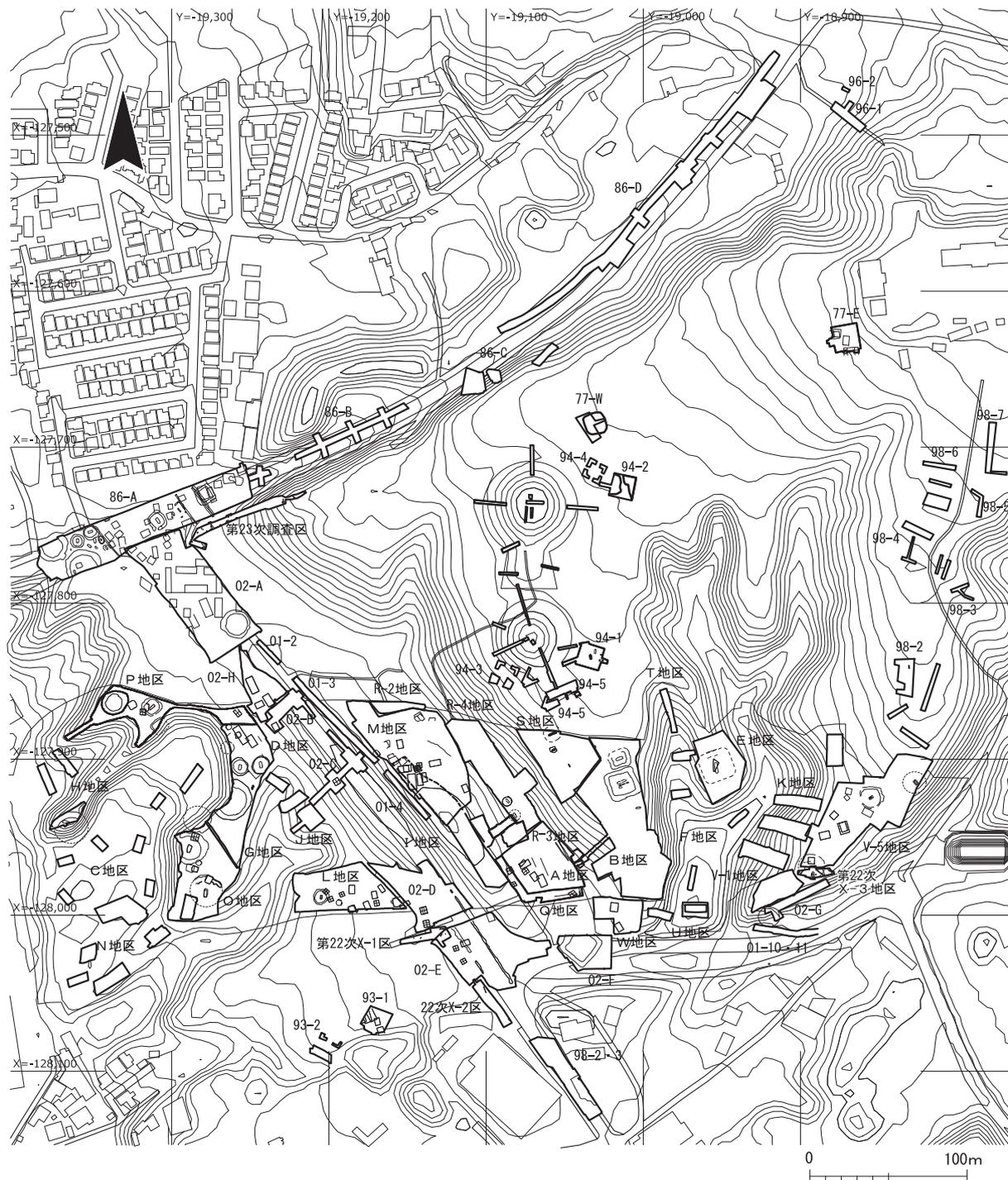
基本層序は、盛土(第6図第1層)、表土のにおい黄褐色砂質土層(第6図第2層)、明赤褐色砂質土層(第6図第9層)である。表土直下の明赤褐色砂質土層(第6図第9層)が地山層で、遺構検出面となる。

4. 検出遺構

遺構を検出した地山上面は東から西へわずかに傾斜し、調査区西端がやや急斜面となる。

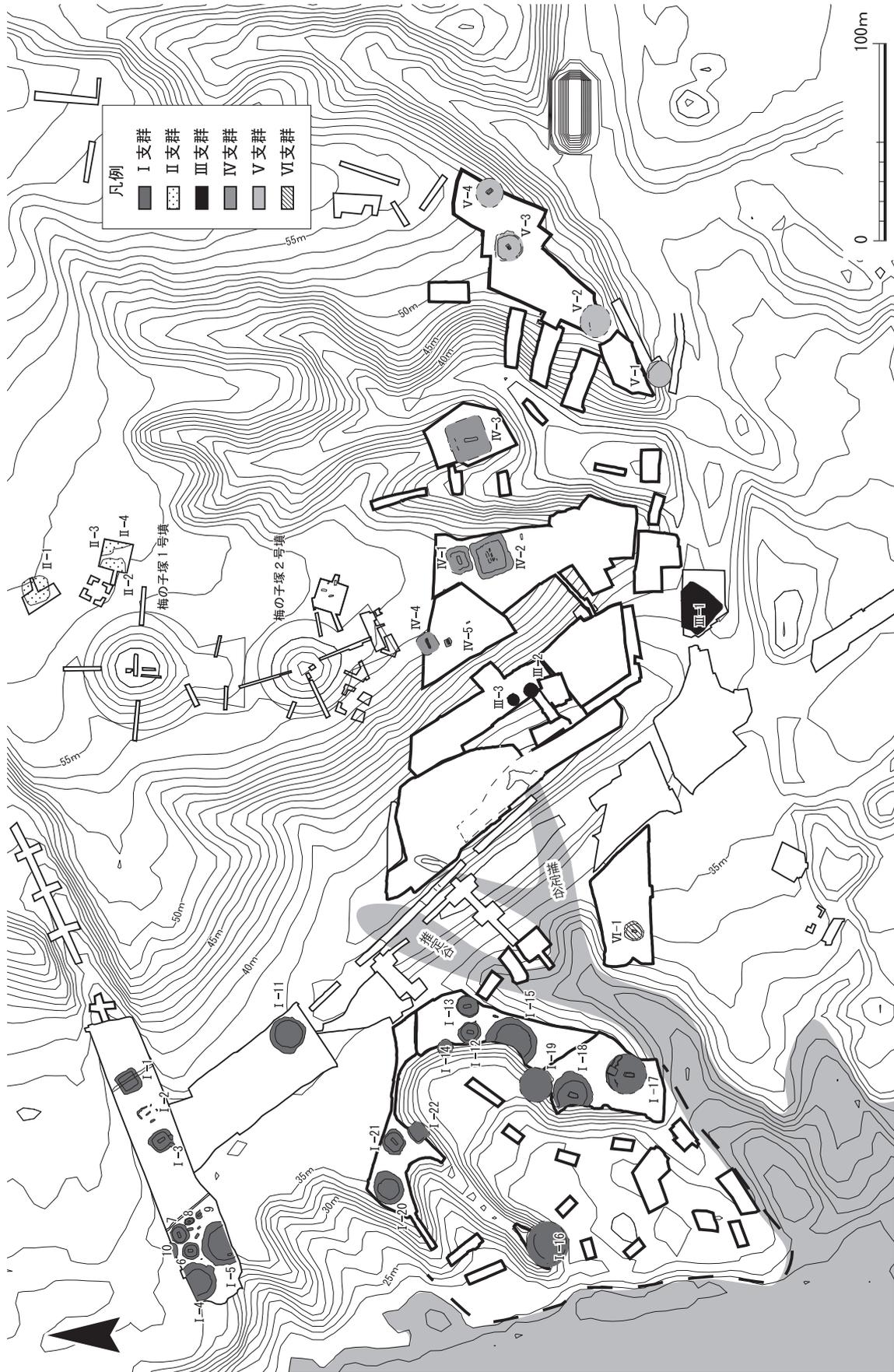
検出した遺構は、V-2号墳の埋葬施設2基(SX01・SX10)と東側周溝(SD02)、溝2条(SD03・SD07)、柱穴状遺構3か所である。遺構の検出標高は、52.19～53.18mである。

令和2年度V-5区の調査でV-2号墳の埋葬施設SX51とされた遺構については、X-3区では検出されなかった。このためSX51をあらためて検出し遺構の性格を確認する目的で、北側に隣接するV-5区を東西約4m・南北約2mの範囲を再掘削した。しかし、地盤改良工事で遺

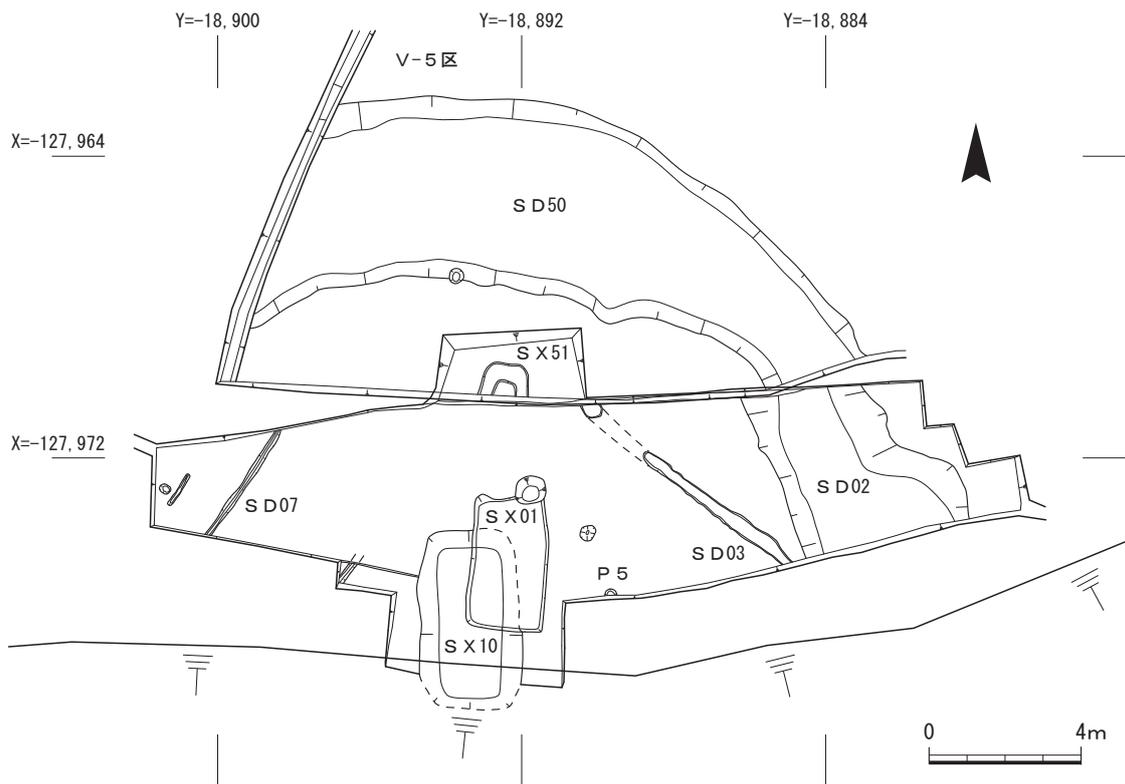


- | | | | |
|--------------|----------------------|------------------|-------------------|
| 77-○：第1次調査 | 『城陽埋蔵文化財調査報告書』第7集 | 01-○：第10次調査 | 『京都府遺跡調査概報』第105冊 |
| 86-○：第2・3次調査 | 『京都府遺跡調査概報』第20冊・第25冊 | 02-○：第13・14次調査 | 『京都府遺跡調査概報』第110冊 |
| 93-○：第4次調査 | 『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第28集 | A～W地区(第15～21次調査) | 『京都府遺跡調査報告集』第189冊 |
| 94-○：第5次調査 | 『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第28集 | 第22次調査X-1・2区 | 『京都府遺跡調査報告集』第194冊 |
| 96-○：第6次調査 | 『京都府遺跡調査概報』第77冊 | 第22次調査X-3区 | 本報告書 |
| 98-○：第8次調査 | 『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第37集 | 第23次調査区 | 『京都府遺跡調査報告集』第194冊 |
| | ※地図中央南端 | | |
| 98-○：第9次調査 | 『京都府遺跡調査概報』第89冊 | | |
| | ※地図中央東端 | | |

第3図 芝山遺跡・芝山古墳群全調査区配置図



第4図 芝山古墳群支群分布図



第5図 X-3区トレンチ平面図

構面が30cm程掘り下げられており、S X51を再検出することはできなかった。令和2年度の調査状況から、S X51は東西1.4m、南北1 m程度の方形の柱穴状遺構と推定される。

1) V-2号墳

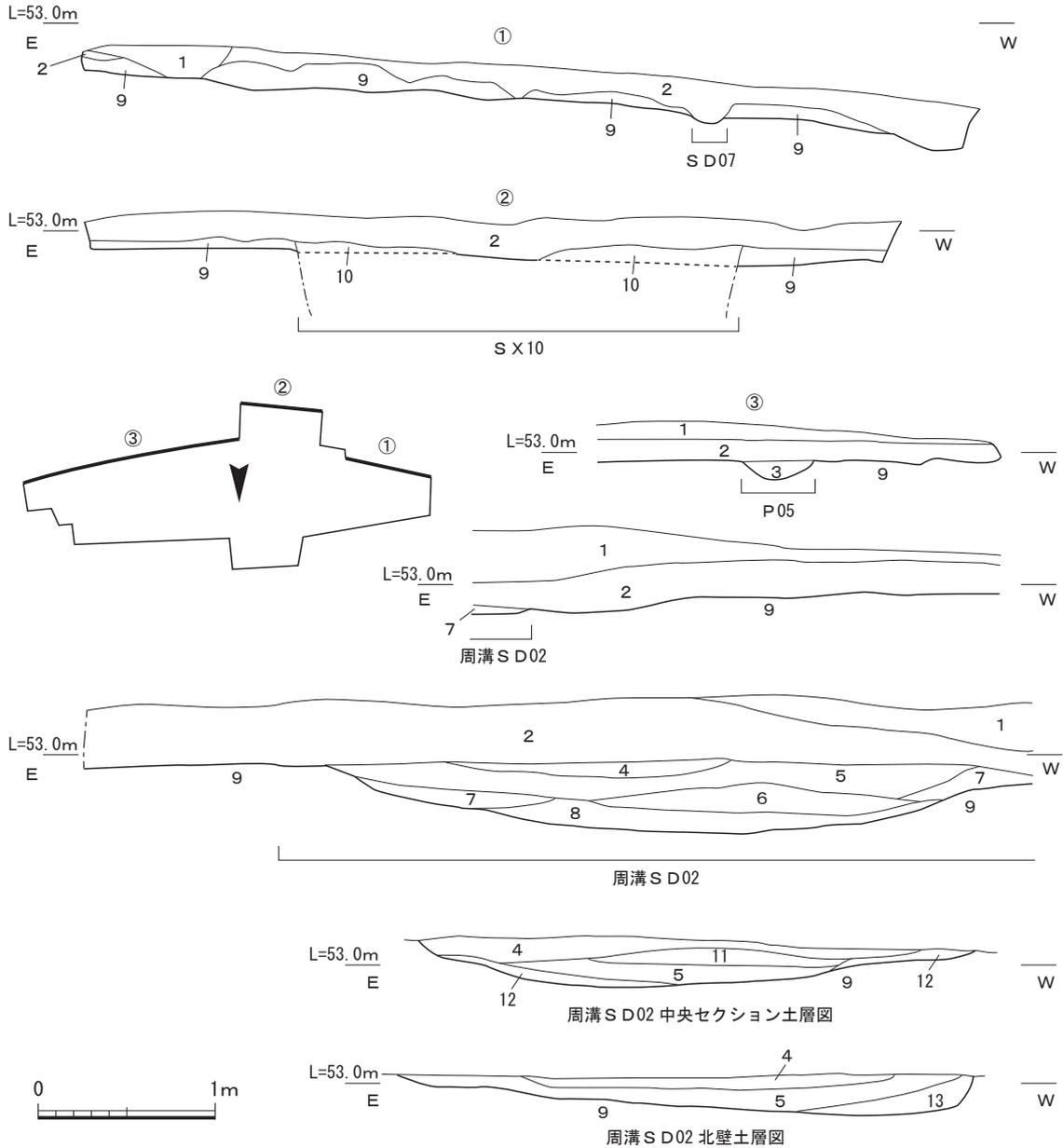
(1) 埋葬施設 S X01 (第7・8図)

重機で表土除去を行ったところ、調査区中央付近の調査区南壁沿いで壺などの須恵器数点を確認した。また調査区中央の表土直下でも須恵器杯蓋2点を確認した。これらの周辺を精査したところ、南北方向の埋葬施設を検出した。

検出した埋葬施設は木棺を直葬したもので、大半が削平されていたが、地山層を掘り込んだ基底部分が遺存していた。検出した墓壙は隅丸長方形状を呈し、北東隅は攪乱されていた。遺存する墓壙の規模は、南北長が約3.5m、東西幅が約2.0m、深さが14~20cmである。墓壙の埋土は、明褐色砂質土(第7図第1・5層)である。

墓壙底のやや東寄り、長側板が両小口板より突出した組合せ式木棺の痕跡を検出した。検出した木棺の規模は、長さが3.0m、幅が北小口で0.93m、南小口で0.8mである。また木棺の内法は、長さが約2.7m、幅が北小口で約0.75m、南小口で約0.68mと推定される。木棺の主軸は、N 5° Eである。

木棺内の埋土は橙色砂質土(第7図第3層)と褐色砂質土(第7図第4層)で、墓壙の埋土である明褐色砂質土(第7図第1層)との間に朱混じりの赤褐色砂質土(第7図第2層)が薄く広がっている。朱混じりの赤褐色砂質土は、内面に朱が塗布された木棺の蓋の痕跡と考えられる。また、木

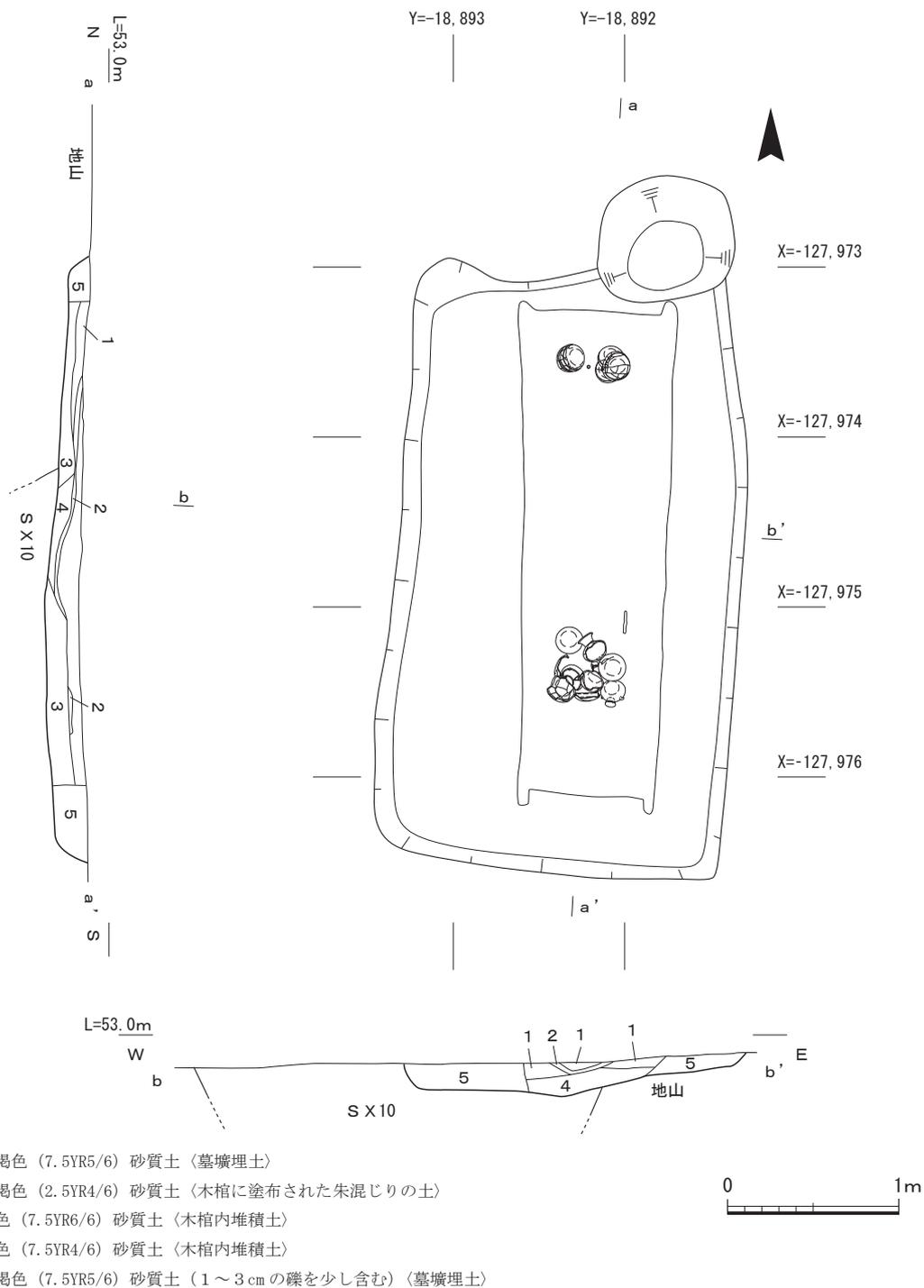


- | | |
|---|---|
| 1. 盛土 | 9. 明赤褐色 (5YR5/8) 砂質土 (地山) |
| 2. にぶい黄褐色 (10YR5/4) 砂質土 (表土) | 10. (SX10 埋土) |
| 3. 明褐色 (7.5YR5/6) 砂質土 (1~2cmの礫を少し含む) (P05埋土) | 11. 明褐色 (7.5YR5/6) 砂質土 (1~3cmの礫を所々に含む) (SD02埋土) |
| 4. 明褐色 (7.5YR5/6) 砂質土 (SD02埋土) | 12. 明褐色 (7.5YR5/6) 砂質土 (1cmの礫を少し含む) (SD02埋土) |
| 5. 橙色 (7.5YR6/8) 砂質土 (1~3cmの礫を少し含む) (SD02埋土) | 13. 明褐色 (7.5YR5/8) 砂質土 (1~3cmの礫を所々に含む) (SD02埋土) |
| 6. 明黄褐色 (10YR6/6) 砂質土 (1~3cmの礫を多く含む) (SD02埋土) | |
| 7. 褐色 (10YR4/6) 砂質土 (SD02埋土) | |
| 8. 褐色 (10YR4/6) 砂質土 (2~3cmの礫を少し含む) (SD02埋土) | |

第6図 X-3区調査トレンチ南壁土層図・周溝S D02土層図

棺内では側板に沿うように帯状の朱混じりの土が検出されており、側板の内面にも朱が塗布されていたと考えられる。朱は分析・観察の結果、ベンガラであることが判明した。

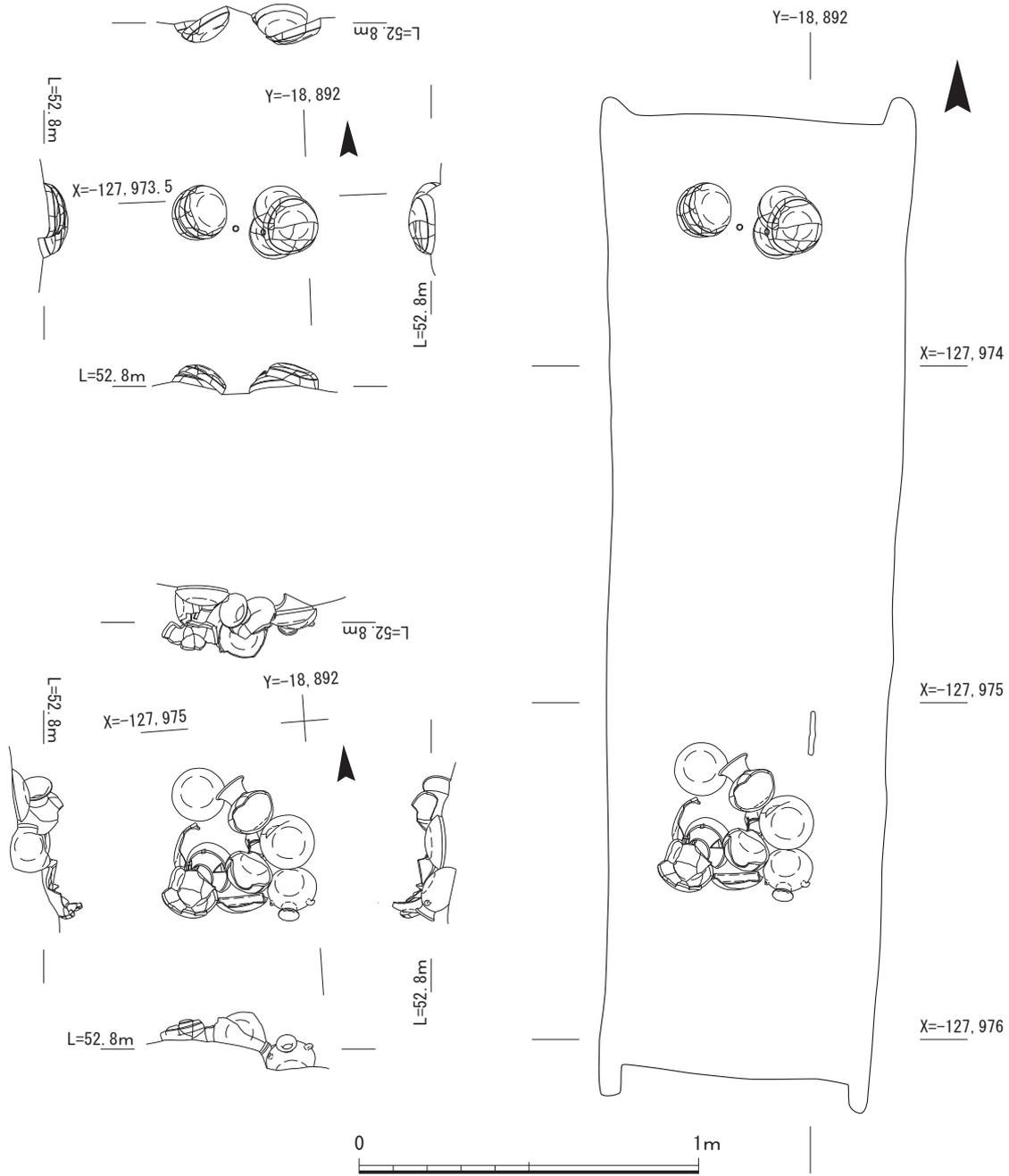
木棺内の北小口では、須恵器5点(第11図1~5)と銀製耳環2点(第11図17・18)が出土した。表土除去時に確認した須恵器杯蓋2点は北小口の須恵器群にあたる。北小口の須恵器5点は杯蓋



第7図 V-2号墳上層埋葬施設S X01平・断面図

で、西側に2点(第11図1・2)、東側に3点(第11図3~5)が重ねられた状態で出土した。西側2点と東側3点の間は8cmあり、この間からは銀製耳環1点(第11図17)が出土した。また、東側3点の西辺上でも銀製耳環1点(第11図18)が出土した。

木棺内の南半では、須恵器11点(第11図6~16)と刀子1点(第11図21)が出土し、表土除去時に確認した須恵器壺数点は南半の須恵器群にあたる。南半の須恵器11点は、杯身5点(第11図6~10)・有蓋脚付長頸壺2点(第11図14・16)・壺蓋1点及び壺蓋つまみ片1点(第11図13・15)・提



第8図 V-2号墳上層埋葬施設(S X01)副葬品出土状況図

瓶1点(第11図11)・広口壺1点(第11図12)である。有蓋脚付長頸壺2点を中心にして、その周囲に杯身・広口壺・提瓶が置かれていた。刀子1点(第11図21)は、南半の須恵器群から北東に約15cm離れた位置から出土した。この他に、木棺埋土のふるいがけ作業でガラス製小玉2点(第11図19・20)が出土した。

北小口の須恵器群は、置かれた状態や銀製耳環の出土状況から被葬者の枕と考えられる。また木棺の北小口の幅が、南小口より13cm広くなっている。これらのことから、被葬者は北頭位で埋葬されていたと考えられる。南半の須恵器群が足先に置かれていたとすると、被葬者の身長は150cm程度と推定される。

(2) 埋葬施設S X10(第9・10図)

埋葬施設S X01の西側で、地山層(明赤褐色砂質土)よりやや茶色がかった明褐色砂質土の広がりが認められた。慎重に精査を行ったところ、明褐色砂質土は部分的に埋葬施設S X01と重複して南北方向の長方形に広がっていることが確認できた。長方形に広がる明褐色砂質土は遺構埋土の可能性が考えられたため、地山層と明褐色砂質土の違いを見極めながら掘削を行った。その結果、検出面から23cm下、51cm下、63cm下で、甕体部片と思われる須恵器片が各1点出土した。このことから、長方形に広がる明褐色砂質土は人為的に掘り込まれた遺構の埋土と判断した。さらに掘削を進めたところ、検出面から約90cm下で、須恵器群が出土したことから、長方形遺構は埋葬施設S X01の下層に構築された埋葬施設であると判断した。

埋葬施設S X10は、地山層を掘り込んだ墓壙内に木棺を直葬したもので、墓壙北東部分の4分の1ほどが埋葬施設S X01と重複している。このため北東部分の墓壙上端は、埋葬施設S X01の構築により13~20cm削平されている。また墓壙南端の上端も、本来の丘陵斜面が工事により削られたため削平されている。検出した墓壙は隅丸長方形を呈し、検出した墓壙の規模は南北長が4.75m、東西幅が2.7m、墓壙底部での南北長が4.0m、東西幅が北辺で1.7m、南辺で1.6mである。墓壙の深さは、1.03~1.16mである。墓壙の埋土は、明褐色砂質土(第9図第1~3・9・11層)、黄褐色砂質土(第9図第8層)である。

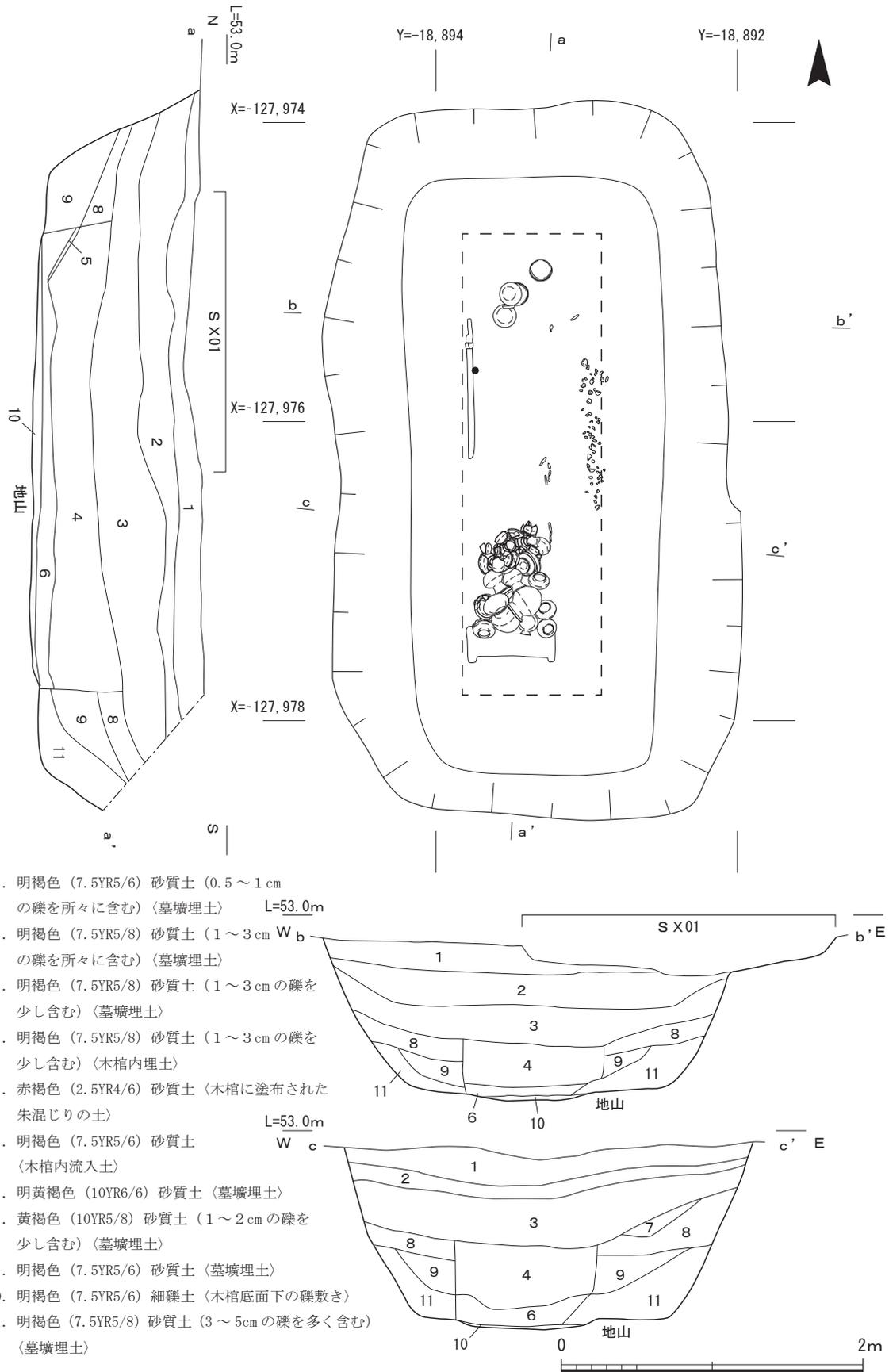
墓壙のほぼ中央で、組合せ式箱形木棺の痕跡を検出した。木棺の規模は長さが3.07m、幅が0.94mあり、高さは0.5m程度と推定される。木棺の主軸は、真北(N0°)である。墓壙底部には、地山層の上に厚さ3~5cmの明褐色細礫土層(第9図第10層)がみられた。明褐色細礫土は木棺の範囲に限られることから、木棺を埋納する際に墓壙底部に敷かれたものと考えられる。

木棺の北端では、朱混じりの赤褐色砂質土(第9図第5層)が北から南へ傾斜して薄く広がっていた。朱混じりの赤褐色砂質土は、内面に朱が塗布された木棺の蓋の痕跡と考えられる。また、木棺の北と南の小口や東側辺の中央付近では、木棺の側辺に沿うように帯状の朱混じりの土が検出されており、側板の内面にも朱が塗布されていたと考えられる。

木棺内の北小口で須恵器杯蓋2点・杯身2点(第12図22~25)が出土した。杯蓋1点(第12図22)は木棺の南北中心線のやや東寄りに置かれていた。中心線の杯蓋から南西へ7cm離れた位置には、杯蓋(第12図24)の上に伏せた杯身(第12図25)が重ねられて置かれていた。重ねられた杯蓋・杯身の南西には、伏せた杯身(第12図23)が接して置かれていた。

重ねられた杯蓋・杯身と伏せた杯身の接する位置には、刀子1点(第14図58)が切先を西にして東西方向に置かれていた。刀身には布目痕が部分的に残存しており、布に包んで埋納されたと考えられる。

伏せて置かれた杯身から南西へ15cmの西側板沿いには、切先を南に向けた大刀1振り(第14図53)が置かれていた。また切先から南へ約7cmの位置では、薄い板状の鉄片3点(第14図54~56)が出土した。鉄片の内面には木質が残存しており、鞆尻金具と考えられる。大刀の鍔に残存していた鞆口金具や鞆尻金具の表面には布目痕があり、大刀は布に包んで埋納されていたと考えられ



第9図 V-2号墳下層埋葬施設S X10平・断面図

る。また、大刀の理化学処理作業で刀身の中央付近に刀子1点(第14図57)が錆着しているのが確認され、大刀の上に刀子を重ねて置かれていたことが判明した。

大刀の切先から北へ約60cmの位置では、大刀の下やその周辺でガラス製小玉19点(第15図73～91)がまとまって出土した。また、大刀の理化学処理作業で大刀の錆に取り込まれているガラス製小玉6点(第15図102～107)が確認された。これにより大刀の下やその周辺から出土したガラス製小玉は、25点となった。この他に木棺埋土のふるいがけ作業で10点(第15図92～101)がみつかり、木棺内から出土したガラス製小玉の総数は35点となった。

伏せて置かれた杯身から東へ約25cmの位置で鉄鏃の頸部～茎部(第14図59)、杯身から東へ約40cmの位置で鉄鏃の鏃身部(第14図60)が出土した。大刀の切先から東へ約45cmの位置で、鉄鏃の頸部～茎部(第14図61)が出土した。その南側に隣接したところでは鉄鏃及び鉄鏃片8点(第14図63～70)がまとまって出土した。

木棺南半の中央では、須恵器24点(第12図26～44・第13図45～49)と土師器直口壺1点(第13図50)がまとまって出土した。須恵器24点は、杯蓋と杯身各4点(第12図26～33)・有蓋長脚高杯と有蓋長脚高杯蓋各3点(第12図34～39)・短頸壺蓋1点(第12図40)・短頸壺4点(第12図41～44)・提瓶1点(第13図45)・小型甕1点(第13図46)・中型甕1点(第13図47)・直口壺2点(第13図48・49)である。北端に有蓋長脚高杯3点を東西に並べて置き、その南側に杯・壺・甕などが置かれていた。土師器直口壺は、北東隅に置かれていた。

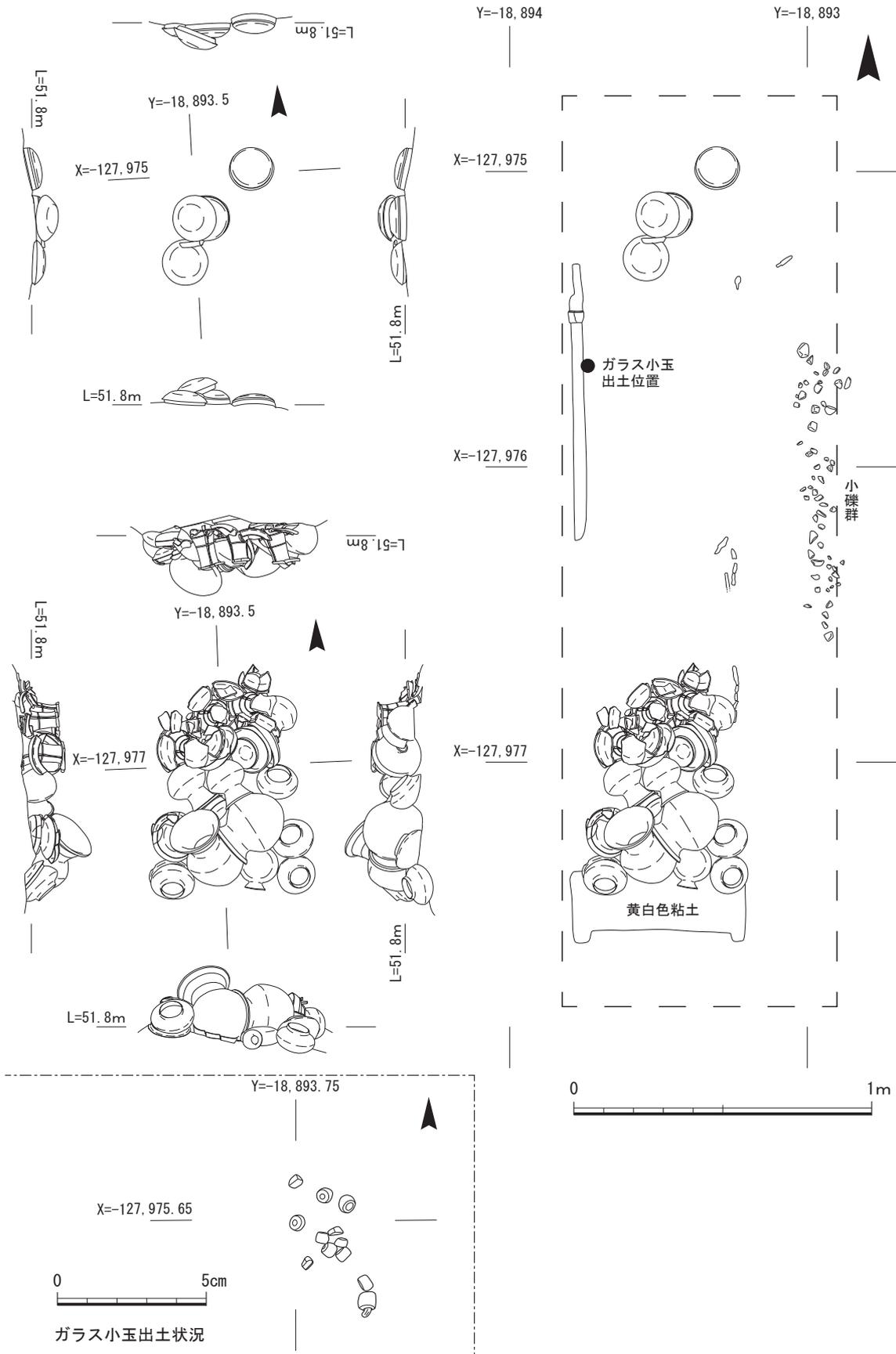
南半須恵器群の北約10cmの位置で鉄鏃1点(第14図62)、南半須恵器群の北東隅に隣接して鉄鏃2点(第14図71・72)が出土した。

南半須恵器群の南側に接して長形状に広がる黄白色粘土を検出した。黄白色粘土は東西約60cm、南北約20cm、厚さ4～5cmあり、黄白色粘土の北辺上には須恵器群南端の須恵器が乗った状態であった。また、北小口や東の側辺中央付近でも、厚さ0.5～1.0cmの黄白色粘土を帯状に検出した。これらの黄白色粘土は、木棺の範囲で部分的にみられることから、木棺を埋納する際に木棺を安定させる目的で明褐色細礫土層(第9図第10層)の上に置かれたものではないかと考えられる。

被葬者の頭位については、南北の中心線上の杯蓋が枕の可能性のあることや大刀の切先が南を向いていること、また埋葬施設S X 01と同じく南半に須恵器が多く置かれていることから、北頭位で埋葬されていたと考えられる。北頭位とすると、ガラス製小玉がまとまって出土した位置は被葬者の右手首となり、被葬者がガラス製小玉を手玉として装着していたと考えられる。また、木棺北半から出土した鉄鏃は胸の上に置かれていたと考えられる。

南半の須恵器群が足先に置かれていたとすると、被葬者の身長は160cm程度と推定される。

朱は分析・観察の結果、ベンガラと水銀朱であることが判明した。ベンガラは木棺の蓋の痕跡と考えられる部分や木棺の側板と考えられる部分で検出されており、木棺の内面にベンガラが塗布されていたと考えられる。水銀朱は、木棺の北西隅付近から大刀やガラス製小玉が出土した部分で検出された。検出された範囲は被葬者の右上半身の西側にあると推定され、埋葬時に被葬



第10図 V-2号墳下層埋葬施設S X10副葬品出土状況図

者の右肩から右腕付近を中心に水銀朱が散布されたと考えられる。

(3) 東側周溝 S D02

調査区東端で、V-2号墳の東側周溝を検出した。検出長は4.5m、幅は3.1~4.6m、深さは0.25~0.58mである。検出した周溝は、調査区北壁沿いで幅が最も狭く、また深さも最も浅くなっている。一方、調査区南壁沿いで幅が最も広く、深さも最も深くなっている。北側に隣接するV-5区の北側周溝 S D50は、東側周溝 S D02と接続する部分で幅が最も狭く深さも最も浅くなっている。これらのことから、周溝の北東部分は後世の削平を受けていると考えられる。V-2号墳の周溝は、V-5区及びX-3区の調査結果から、幅が5.0m程度、深さが0.6m程度と推定される。埋土は、上層から明褐色砂質土(第6図第4層)、橙色砂質土(第6図第5層)、明黄褐色砂質土(第6図第6層)、褐色砂質土(第6図第7・8層)及び明褐色砂質土(第6図第12・13層)である。埋土からは、須恵器杯身口縁片(第13図51)と皿口縁片(第13図52)の他に須恵器細片や土師器細片が若干出土した。出土した須恵器杯身口縁片(51)は、奈良時代の杯A或いは杯Bと考えられる。V-5区の北側周溝 S D50からは8世紀の遺物が出土しており、V-2号墳は奈良時代に墳丘が削平され、周溝が埋められたと考えられる。

なお、X-3区の西側に隣接するV-1区では、西側周溝は検出されていない。V-1区は、地山検出面がX-3区より30cm程低く、東から西へ大きく傾斜している。これらのことから西側周溝は、後世の削平或いは自然流失により失われたと考えられる。

2) その他の遺構

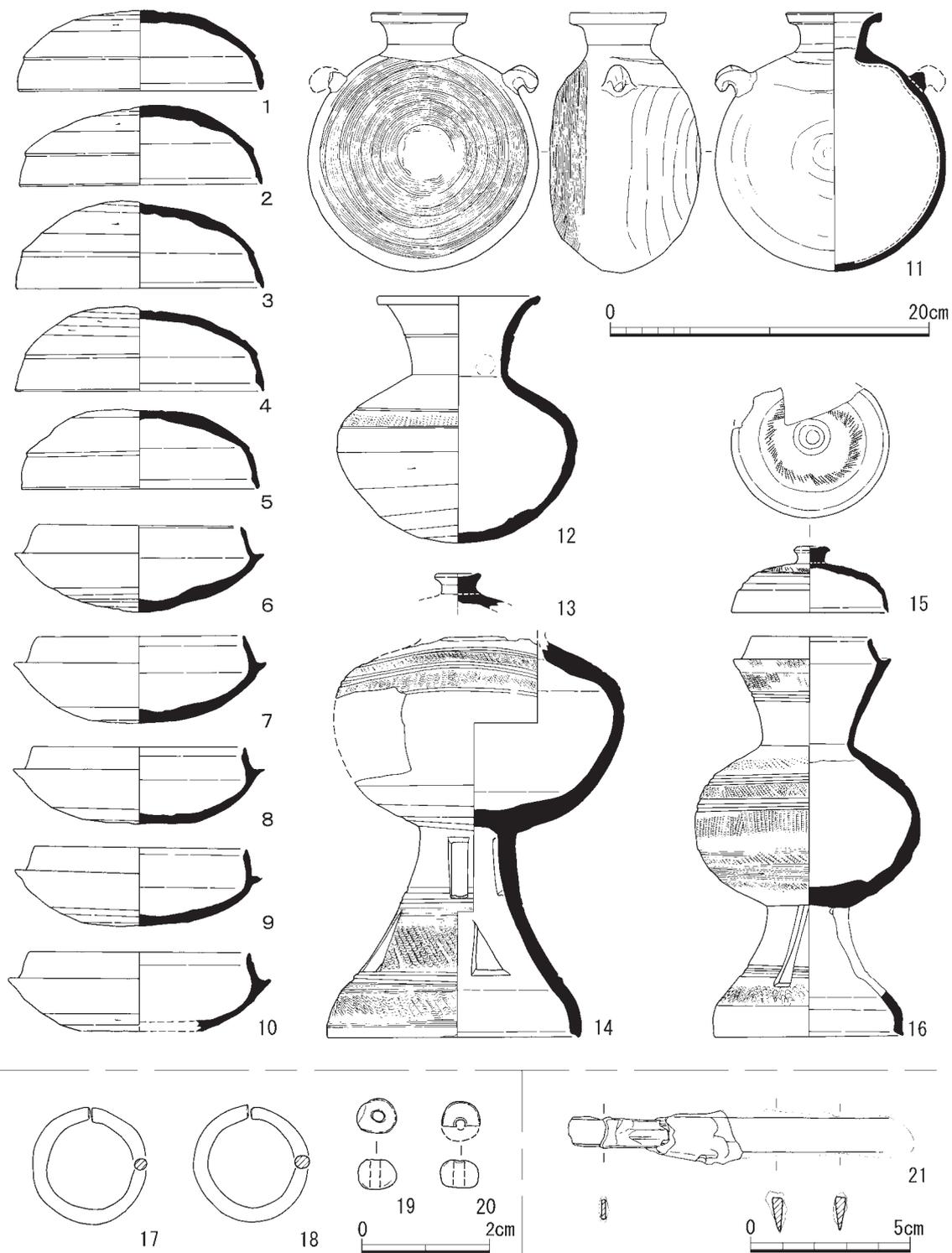
溝 S D03は周溝 S D02の西側で検出した北西から南東に延びる溝で、検出長は7.0m、幅は0.36~0.42m、深さは6cmあり、一部削平により途切れている。溝 S D07は調査区西端で検出した北東から南西に延びる溝で、検出長は3.5m、幅は0.3cm、深さは6~9cmある。柱穴状遺構は調査区西半で円形のものを3か所検出し、直径は30~60cm、深さは9~27cmある。これらの遺構からの出土遺物はなかった。

5. 出土遺物(第11~15図 付表5~7)

(1) 埋葬施設 S X01(第11図1~21)

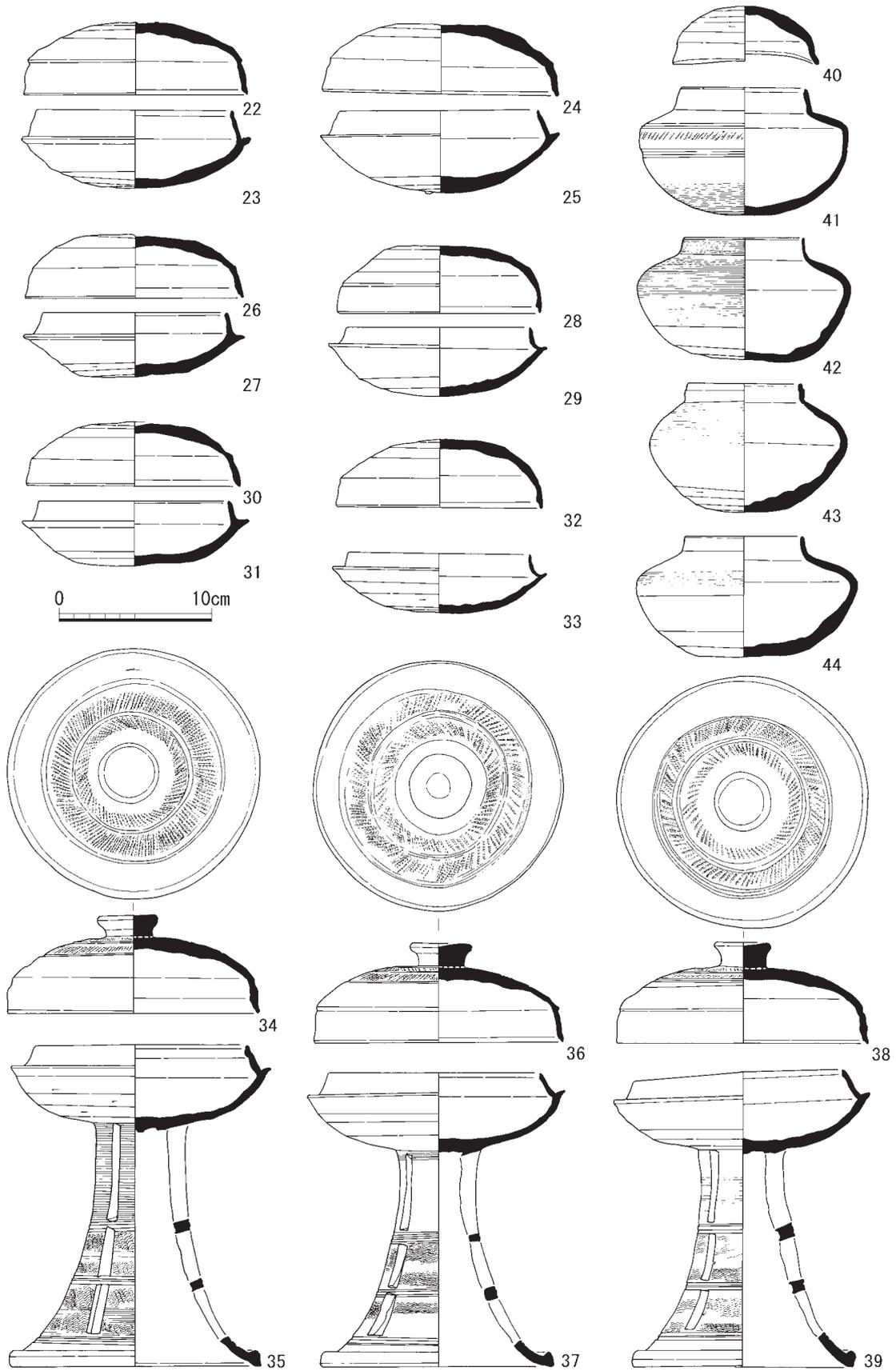
1~5は被葬者の枕となっていた須恵器杯蓋、6~16は南半の須恵器群である。14は有蓋脚付長頸壺と思われるもので、口縁部~頸部と体部の一部が欠損する。脚部には上段に長方形と下段に三角形の透かしが各3か所ある。13はつまみのみの破片で、14の蓋かと思われる。16は有蓋脚付長頸壺で、脚部には長方形の透かし孔が3か所ある。17・18は銀製耳環で、17は西側、18は東側から出土したものである。21は刀子で、鞘と思われる木質が一部残存し、また茎には鹿角が一部残存する。19・20は木棺埋土のふるいがけ作業で出土したガラス製小玉で、直径は5.9mmと6.0mm、孔径は2.0mmと1.0mm、長さは4.5mmと4.0mmある。ともにアルカリケイ酸塩ガラスである。

(2) 埋葬施設 S X10(第12~15図、22~107)

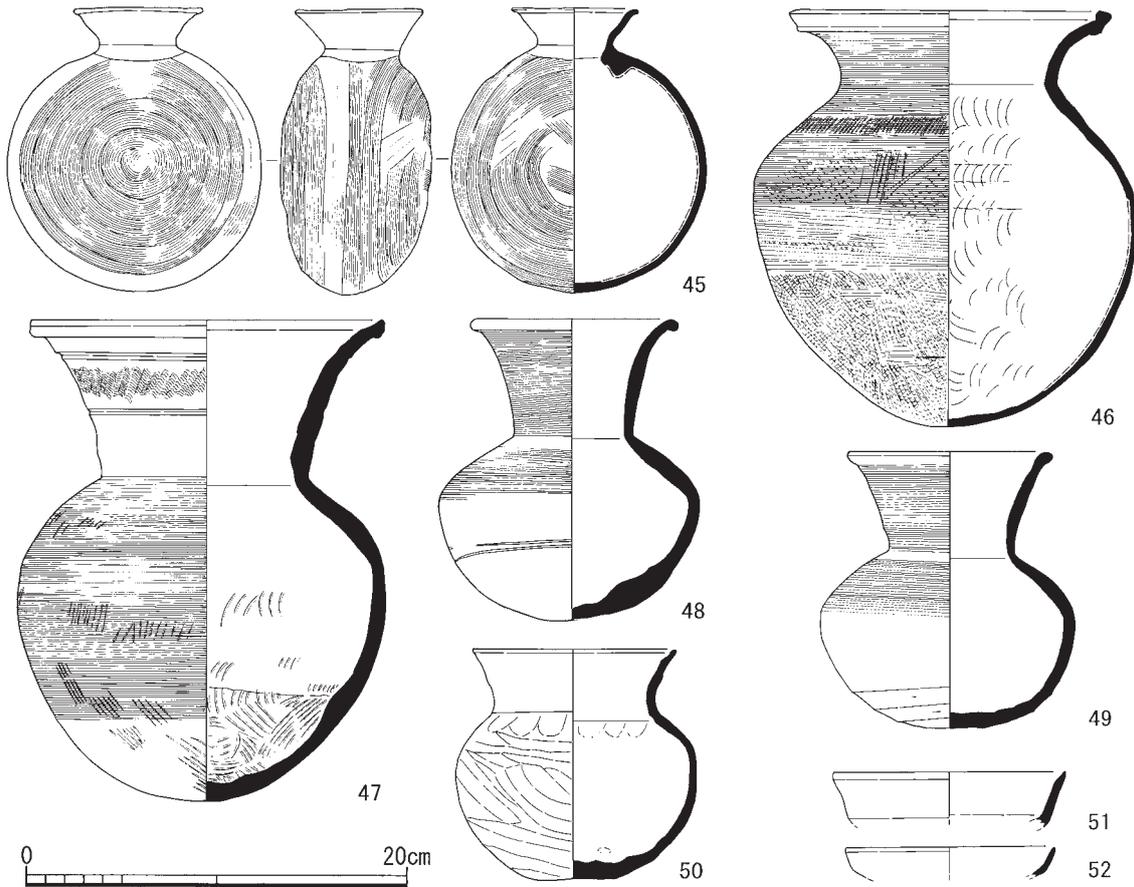


第11図 V-2号墳出土遺物1（埋葬施設SX01）

22～49は須恵器である。22～25は木棺北小口から出土した杯身・杯蓋で、22と23、24と25がセットとなり、外面には平行する2本の直線によるヘラ記号が施される。26～49は南半の須恵器群である。26～33は杯身・杯蓋で、26と27、28と29、30と31がセットとなる。35、37、39は有蓋長脚高杯で、脚部に3段の長方形透かし孔が3か所に施される。なお、脚部に3段の透かし孔をもつ長脚高杯は、出土例が極めて少なく、稀有な事例である。34、36、38は有蓋長脚高杯の蓋で、



第12図 V-2号墳出土遺物2(埋葬施設S X10)

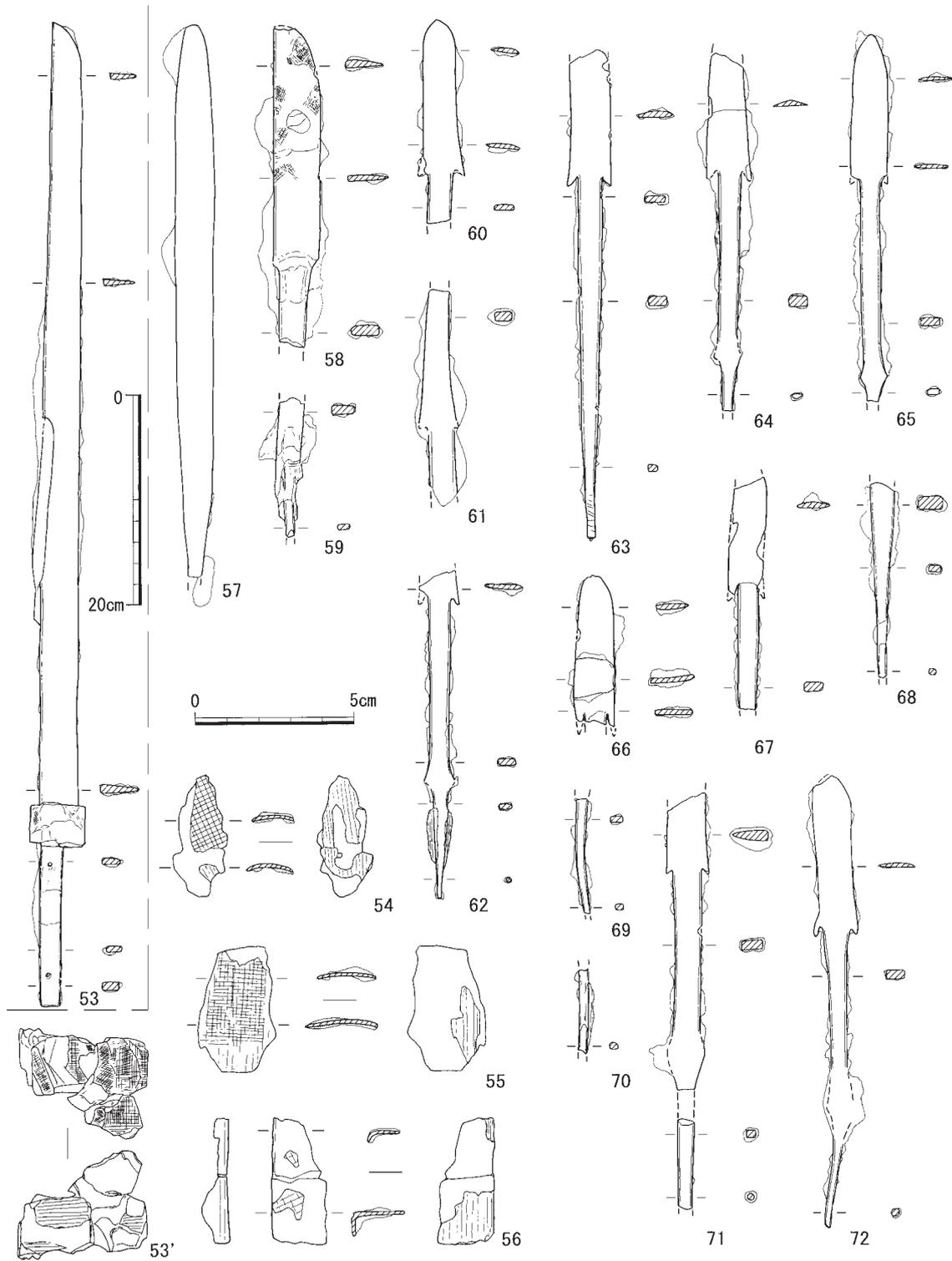


第13図 V-2号墳出土遺物3(埋葬施設S X10、周溝S D02)

つまみがつく。出土状況から34と35がセットになるが、36と37及び38と39はセットとなる可能性はあるが明確ではない。40は短頸壺の蓋と思われるが、41～44の短頸壺とのセット関係は不明である。45は提瓶で、把手はつかない。46は小型甕、47は中型甕で頸部外面に波状文が施される。48と49はほぼ同じサイズの直口壺で、50は土師器直口壺である。

53～72は、鉄製品である。53は大刀で、長さは95.2cmある。鞘口には、鞘口金具と釦が残存し、茎には目釘穴が2か所ある。53'はもう一方の片面の鞘口金具と釦片で、鞘口金具の表面には布目痕が明瞭に残る。54～56は鞘尻金具の破片で、外面に布目痕、内面に木質が残存する。57と58は刀子で、57は大刀に錆着している。58は柄に鹿角と木質が残存し、刀身には布目痕がある。59～72は鉄鏃で、1点をのぞいて一部を欠損するか破片である。すべて長頸鏃と考えられる。63は鏃身部の先端を欠損するが、完形に近く残存長は15.65cmあり、茎部先端には口巻の樹皮が残存する。72はほぼ完形で、長さは14.4cmある。60、62～67、71、72には、腸袂が確認できる。59、62、70の茎部には、木質が残存する。64には鏃身部～頸部片と思われるものが、66には鏃身部片と思われるものが、錆着している。

第15図は埋葬施設S X10から出土したガラス製小玉で、73～91は大刀の下及びその周辺で、92～101は木棺埋土のふるいがけ作業で出土した。102～107は大刀に付着していたものである。直径は3.0～7.0mm、孔径は1.0～3.5mm、長さは2.0～6.0mmである。成分分析の結果、73～101・



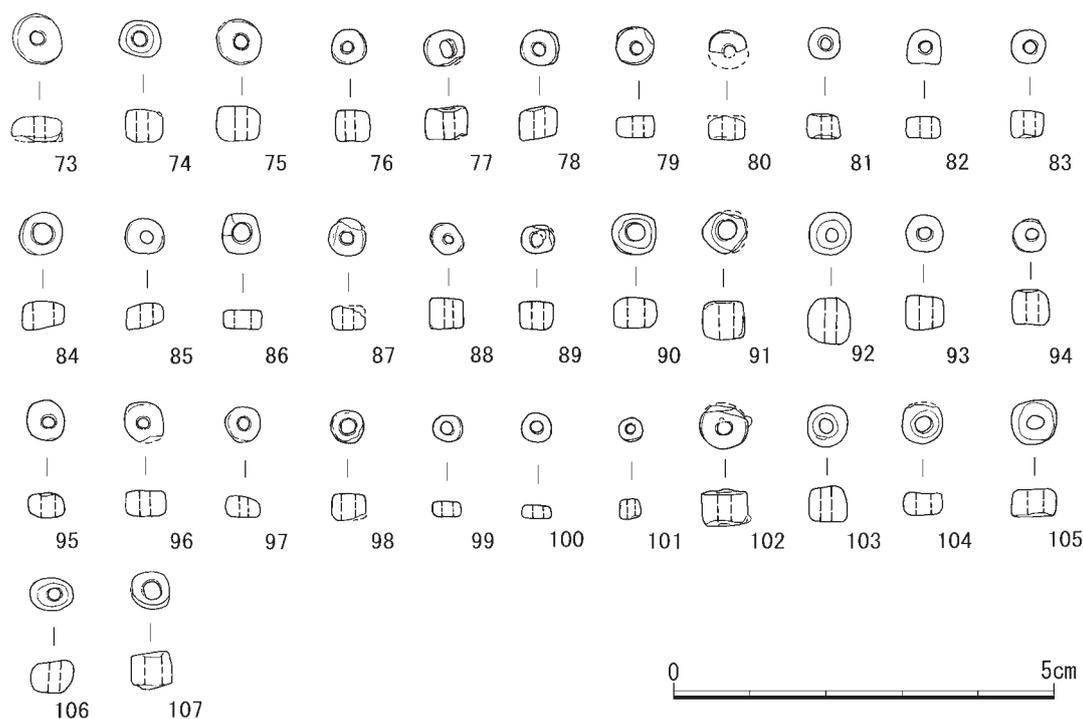
第14図 V-2号墳出土遺物4(埋葬施設S X10)

103~107はアルカリケイ酸塩ガラスで、102のみが鉛バリウムガラスである。

(3) 東側周溝 S D02

51・52は周溝 S D02から出土した須恵器である。

6. 調査の成果



第15図 V-2号墳出土遺物5(埋葬施設SX10)

V-2号墳は、梅の子塚1・2号墳やII・IV支群が築造された芝山丘陵の上位平坦面から南西へ派生する丘陵先端に築造されており、平野部を見渡せる場所に立地する。V-5区とX-3区で検出した周溝(SD50・SD02)から、墳丘の直径が約19m、周溝を含めた直径が約27mの円墳と推定され、芝山古墳群で検出された最大級の古墳である。墳丘の中央には、一部が上下に重なる2基の木棺直葬の埋葬施設SX01・SX10が構築されていた。埋葬施設SX10は地山層を約1.2m掘り込んだ墓壇内に木棺を納めており、埋葬施設SX10の構築時には盛土による墳丘はなかったと考えられる。一方、埋葬施設SX01は地山層を20cm程掘り込んだ基底部分のみが遺存していたことから、本来は木棺を覆う盛土が行われていたと考えられる。このことからV-2号墳は、木棺を覆う程度の墳丘盛土を行った低墳丘墳と推定される。2つの埋葬施設からは豊富な副葬品が出土しており、埋葬施設SX10には芝山古墳群で初めて出土したガラス製小玉や芝山古墳群で最も多い28点の須恵器が副葬されていた。築造時期は、埋葬施設SX01・SX10から出土した須恵器が概ね陶邑編年TK10型式であることから、古墳時代後期中頃と考えられる。また、埋葬施設SX01と埋葬施設SX10から出土した須恵器には明確な型式差は認められないことから、埋葬施設SX10の構築後、さほど時を経ずに埋葬施設SX01が構築されたと考えられる。

芝山古墳群内でV-2号墳のほかに複数の埋葬施設をもつ古墳としては、古墳時代前期末～中期初めに築造されたIV-2号墳(一辺約16mの方墳、木棺直葬3基)と古墳時代後期中頃に築造された長池古墳(径約25mの円墳、木棺直葬2基)がある。複数の埋葬施設が構築される古墳は古墳時代を通じて多くみられるが、V-2号墳のように上下に重複して構築された埋葬施設は極めて稀有な事例である。

埋葬施設SX10の墓壇埋土上面では、木棺の腐朽による陥没痕跡は確認できなかった。墓壇埋

土の土層断面では、木棺北小口で木棺蓋の腐朽による木棺内への蓋陥没痕(第9図第5層)やそれに伴う木棺内への流入土(第9図第6層)、木棺東側で木棺側板底部の腐朽による流入土(第9図第11層)が観察された。これらのことから、埋葬施設S X01の構築前には木棺腐朽による陥没が生じていたと考えられる。一方、木棺内への流入土(第9図第6層)より上層(第9図第1～4層)には木棺腐朽による墓壙埋土の陥没痕跡は全くみられなかった。このことは、埋葬施設S X01を構築する際に陥没坑を単純に埋めるのではなく、埋葬施設S X10の墓壙上半の埋土を一旦除去し、改めて墓壙を埋めたと考えられる。土層断面には木棺の側板痕跡が明瞭に認められることから、埋土の除去時には木棺の側板はほぼ残っていたと考えられる。木棺内の流入土(第9図第6層)を40～50cm除去し、改めて木棺内と墓壙を明褐色砂質土(第9図第1～4層)で埋め戻したと考えられる。特に墓壙の埋め戻し土(第9図第1・2層)はよくしまっていたことから、陥没が起きないよう丁寧に埋め戻されたと考えられる。このことから埋葬施設S X01は、埋葬施設S X10の墓壙の一部と重なるように意図的に構築したと考えられる。また、木棺同士には重なりがないことから、木棺そのものは重ならないように配慮したとも考えられる。

埋葬施設が構築された状況から、2人の被葬者は極めて親密な関係にあったと推察される。埋葬施設S X10には鉄製武器である大刀と鉄鍬が副葬されており、被葬者は男性の可能性が高い。一方埋葬施設S X01の副葬品には、武器類がなく銀製耳環と刀子のみである。耳環は男女とも装着するが、武器類がないことや推定される被葬者の身長が150cmとやや小柄であることから、埋葬施設S X01の被葬者は女性の可能性がある。ここで想像をたくましくすれば、夫が埋葬された後、さほど時を経ずに亡くなった妻を埋葬施設の一部を重複させて合葬したとも考えられる。

2つの埋葬施設は盗掘や乱掘を受けていなかったことから、埋葬時の木棺内の状態を知ることができる。埋葬施設S X01の被葬者は須恵器杯蓋を枕として北頭位で安置され、一對の銀製耳環を装着し、左の足首付近には刀子1点が置かれていた。足の南側には須恵器がまとめて埋納されていた。埋葬施設S X10の被葬者も須恵器杯蓋を枕として北頭位で安置され、右手首にガラス製小玉の手玉を装着し、右手首の上には布にくるまれた大刀、右肩付近には刀子1点、胸の上と左足の上に矢が置かれていた。足の南側には須恵器がまとめて埋納されていた。

芝山古墳群での陶邑編年TK10型式期の古墳は、直径20.3mのI-18号墳と直径25mの長池古墳があり、これらの他には小規模なI-6(径7.4m)・13号墳(径11.5m)とV-4号墳(径14m)がある。I-18号墳は、後期古墳が密集する芝山丘陵の中位平坦部に築造された低墳丘墳で、西側に前方部或いは造り出しをもつと考えられている。埋葬施設からは、大刀・鉄剣・鉄鍬・刀子・鉄製工具類・土玉・須恵器10点・土師器5点が出土している。長池古墳は、芝山古墳群の南西隅に所在し、芝山丘陵の中位平坦部から西に派生する丘陵先端部に築造された高塚墳である。墳丘は地山を整形して構築されており、見た目の高さは6.5mある。埋葬施設からは、金製耳環・琥珀棗玉・瑪瑙小玉・銀製空玉・不明鉄製品・須恵器15点が出土している。長池古墳は平野部に近い丘陵先端に築かれており、平野部からは規模の大きな古墳に見えていたと考えられる。鉄製武器類は副葬されないが、数種類の装飾品が副葬されている。

長池古墳は、立地や墳丘規模、副葬品からTK10型式期の芝山古墳群での盟主墳と位置付けることができ、被葬者は富野地域を治める中首長と考えられる。I-18号墳は、前方後円墳か造り出し付円墳かでその位置付けは変わるが、低墳丘墳であることや鉄製武器類をもつことから武人的な性格をもつ小首長と考えられる。また、V-2号墳も低墳丘墳であることや埋葬施設SX10に鉄製武器類が副葬されていたことから、同様に武人的な性格をもつ小首長と考えられる。I-18号墳とV-2号墳埋葬施設SX10の被葬者は、富野地域を治める長池古墳の中首長を武人的な立場から支えた小首長と考えることができる。I-18号墳は、V-2号墳より複数の鉄製武器・工具を副葬する。一方、V-2号墳は見晴らしのよい丘陵上部の先端に築造され、ガラス製小玉や最も多くの須恵器を副葬する。このようなことからV-2号墳の被葬者が、I-18号墳の被葬者より優位にあったと考えられる。

芝山古墳群で埋葬施設に須恵器が多く副葬される例は、V-2号墳の他にI-17号墳(径19mの円墳)の25点(陶邑編年TK47~MT15型式)がある。また長池古墳第3主体からは、28点(陶邑編年TK43型式)が出土している。長池古墳第3主体は長池古墳の前方部とされた場所で検出されたもので、現在は長池古墳の東側墳丘裾部に構築された土壙墓とされている。須恵器の他には銀製環(指輪?)・金銅製耳環・刀子・鉄鏃などが出土しており、豊富な副葬品を有している。また墓壙も長さ4.5m、幅1.6m、深さ0.8mあり、土壙墓としては規模が大きい。これらのことから、第3主体は長池古墳に隣接して築造された低墳丘墳の可能性がある。芝山古墳群周辺でも、多くの須恵器が副葬される古墳が存在している。V-2号墳から南東約500mに所在した柏平古墳からは、33点(陶邑編年TK10型式)が出土している。柏平古墳は山砂利採取中に発見された古墳で、大半が削平されるが、周溝をもつ20m程度の低墳丘墳と推定されている。埋葬施設は地山層を1.3m掘り込んだ墓壙に木棺を直葬したもので、須恵器は木棺の南小口からまとまって出土している。木棺の北半は削平されており、本来は40点近い須恵器が副葬されていた可能性がある。また、東京国立博物館には、城陽市富野柏平の同一地点から出土したとされる須恵器31点(陶邑編年TK10型式)が所蔵されている。出土した経緯は明らかではないが、埋葬施設からまとまって出土した可能性がある。柏平古墳周辺の丘陵は山砂利採取により現地形が失われているが、木棺直葬を埋葬施設とする古墳時代後期の古墳が複数存在していた可能性が高い。芝山古墳群からその南の柏平古墳周辺には、陶邑編年TK47~TK43型式期に多数の須恵器を副葬する低墳丘墳が点在していたと考えられる。また陶邑編年TK10型式~TK43型式期のV-2号墳・柏平古墳・長池古墳第3主体は、地山層を1m前後掘り込んで墓壙を構築する点でも共通する。

埋葬施設を上下に構築する例として、芝山古墳群から北へ約2.5kmの宇治市広野に所在する坊主山2号墳がある。坊主山2号墳は、東から西へ延びる丘陵の尾根上に築造された直径約25mの円墳で、墳丘の高さは約3mである。墳丘の下半は地山を整形し、上半は地山の上に約1.5mの盛土を行い構築されている。墳頂部では、東西に並んだ2つの木棺直葬の埋葬施設がみついている。東側の埋葬施設は地山を20cm掘り下げて木棺を安置し、約1.5mの盛土を行っていた。木棺には2体が埋葬されており、木棺内からは鉄鏃・銅環・ガラス小玉・土製丸玉・鉄環・鉄鎖・

須恵器2点、木棺外から須恵器24点が出土している。西側の埋葬施設は、地山を約1.1m掘り下げて墓壙を構築していた。木棺内からは大刀、鉄鏃、刀子、金環、金銅板、須恵器6点が、木棺外から須恵器3点が出土している。2つの埋葬施設は、基底部の比高差が1.1mあり、重なりはないが上下2層に構築されていた。また西側の埋葬施設では表土直下の墳丘盛土に木棺腐朽による陥没痕跡が検出されており、西側の埋葬施設の木棺が腐朽して陥没が生じる前に東側の埋葬施設が構築され墳丘盛土が行われたと考えられる。築造過程は、地山を整形することで墳丘を造営し、地山を掘り込んで西側の埋葬施設を構築し、さほど時を経ずに東側の埋葬施設を盛土により構築したと考えられる。築造時期は、東西の埋葬施設から出土した須恵器が陶邑編年MT85～TK43型式のもので、古墳時代後期後半と考えられる。坊主山2号墳は地山を整形した墳丘をもつ高塚墳であることや多様な副葬品をもつことから、被葬者は有力首長と考えられる。また坊主山2号墳の東側には、古墳時代後期前半に築造された坊主山1号墳(全長45mの前方後円墳)がある。木棺直葬の埋葬施設からは三輪玉付大刀・鉄鏃・鉄矛・鉄斧・銅釧・金製環(指輪?)・翡翠製勾玉・ガラス製管玉・ガラス小玉・馬具類・須恵器2点(陶邑編年MT15～TK10型式)が出土している。被葬者は、墳形や副葬品から宇治市広野を中心とした宇治市南部周辺を治めた有力首長と考えられる。坊主山2号墳の被葬者は、築造時期から坊主山1号墳の被葬者の後継者と考えられる。V-2号墳と坊主山2号墳は、標高50m前後の比較的高い丘陵上に築造されること、円墳であること、埋葬施設が木棺直葬で上層の埋葬施設が盛土により構築され下層の埋葬施設が地山層を掘り込んで構築されること、多数の須恵器が副葬されることが共通する。一方、坊主山2号墳は、豊富な副葬品をもつ高塚墳で被葬者が有力首長と考えられること、上下の埋葬施設には重なりがなく上層埋葬施設の構築時に下層埋葬施設に手を加えた痕跡がないこと、築造時期が古墳時代後期後半であることの違いがある。この他に埋葬施設を上下に構築する例としては、木津川対岸の八幡市域に所在する柿谷古墳がある。柿谷古墳は、丘陵縁辺部に位置する方墳(一辺約12m)で、墳丘盛土内に3分の1ほどが重なる2基の木棺直葬の埋葬施設が構築されている。陶邑編年TK10型式期に下層埋葬施設(第2主体部)が構築された後に、上層埋葬施設(第1主体部)が陶邑編年TK43型式期に構築される。上層埋葬施設は、下層埋葬施設の墓壙の北側長辺を40cm程掘削して構築されている。木棺自体の重なりはなく、木棺基底部の比高差は約60cmある。V-2号墳とは、埋葬施設を上下に構築する点では共通するが、墳形のほかに埋葬施設が墳丘盛土内に構築されることや上下の埋葬施設に時期差のあることが異なる。

古墳時代後期の久津川古墳群では、古墳時代後期末から終末期を除いて横穴式石室を採用せず、木棺直葬の埋葬施設を構築する。芝山古墳群などの調査により、盛土による墳丘内や地山を整形した墳丘内に木棺直葬の埋葬施設を構築する高塚墳と地山を若干掘り込んで木棺を据え木棺を覆う程度の盛土を行う低墳丘墳が存在することが判明した。また、少数ではあるが地山を1m前後掘削し墓壙を構築するものや上下に埋葬施設を構築するものがあることも判明した。久津川古墳群の後期古墳は、木棺直葬という点では共通するものの、墳丘の形態や埋葬施設の構築において多様なあり方をしていることが明らかとなった。このような多様なあり方は、墳丘規模や副葬品

の内容とともに、古墳時代後期に地域支配を行った首長の階層性を示すものと考えられる。

(小泉裕司)

報告書の執筆にあたって下記の文献を参照した。

城陽市史編さん委員会編1999『城陽市史』第3巻 城陽市役所

城陽市史編さん委員会編2002『城陽市史』第1巻 城陽市役所

京都府教育委員会1965「6. 長池古墳発掘調査概要」・「8. 坊主山古墳発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』(1965)

奈良大学文学部文化財学科2020「坊主山古墳群出土品報告書」『奈良大学考古学研究調査報告書』第25冊

東京国立博物館編1988『東京国立博物館図録目録 古墳遺物編(近畿I)』東京美術

(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター1987「芝山遺跡」『京都府遺跡調査概報』第25冊

(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター2004「4. 芝山遺跡」『京都府遺跡調査概報』第110冊

(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター2011「2. 柿谷古墳・美濃山遺跡」『京都府遺跡調査報告集』第146冊

(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター2023「新名神高速道路整備事業関係遺跡 芝山遺跡・芝山古墳群」『京都府遺跡調査報告集』第189冊

(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター2024「3. 芝山遺跡・芝山古墳群第22次(X-1・2区)発掘調査報告」『京都府遺跡調査報告集』第194冊

(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター2024「水主神社東遺跡第9・10・12・14・16次」『京都府遺跡調査報告集』第195冊

小池 寛1991「南山城地域の後期古墳の一樣相－城陽市・長池古墳を中心に－」『京都府埋蔵文化財情報』第40号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

小池 寛2014「京都府南山城地域における古墳出現期の一樣相」『京都府埋蔵文化財情報』第124号 (公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

田辺昭三1981『須恵器大成』角川書店

中村 浩1980『考古学ライブラリー5 須恵器』ニュー・サイエンス社

中村 浩1981『和泉陶邑窯の研究－須恵器生産の基礎的考察－』柏書房

古代の土器研究会1992『古代の土器1 都城の土器集成』

小泉裕司2005「久津川古墳群の範囲と構成の再検討」『龍谷大學考古学論集』I 龍谷大學考古学論集刊行会

小泉裕司2020「久津川古墳群の再検討－最近の発掘調査及び研究成果から－」『龍谷大學考古学論集』III 龍谷大學考古学論集刊行会

小泉裕司2021「久津川古墳群の動向」『椿井大塚古墳と久津川古墳群』季刊考古学別冊34 雄山閣

小泉裕司2021「南山城地域における後期有力首長墓の動向－久津川古墳群を中心に－」『京都府埋蔵文化財論集』第8集 (公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

付編 1. 芝山古墳群 V - 2号墳埋葬施設から出土した赤色顔料の分析

竹原 弘展(株式会社パレオ・ラボ)

ナトリウム (Na)、マグネシウム (Mg)、アルミニウム (Al)、ケイ素 (Si)、リン (P)、硫黄 (S)、カリウム (K)、カルシウム (Ca)、チタン (Ti)、マンガン (Mn)、鉄 (Fe) などが検出された。分析 No.4、7、8、10では水銀 (Hg) も検出された。分析 No.1、3では赤色パイプ状の粒子が観察された。

赤色顔料の代表的なものとしては、朱(水銀朱)とベンガラが挙げられる。水銀朱は硫化水銀 (HgS) で、鉱物としては辰砂と呼ばれ、産出地はある程度限定される。ベンガラは狭義には三酸化二鉄 (Fe₂O₃、鉱物名は赤鉄鉱) を指すが、広義には鉄 (Ⅲ) の発色に伴う赤色顔料全般を指し、広範な地域で採取可能である。また、ベンガラは直径約 1 μm のパイプ状の粒子形状からなるものも多く報告されている。このパイプ状の粒子形状は鉄バクテリア起源であると判明しており、鉄バクテリア起源の含水水酸化鉄を焼いて得た赤鉄鉱がこのような形状を示す。鉄バクテリア起源のパイプ状粒子は、湿地などで採集できる。

今回分析した赤色物のうち、分析 No.4、7、8、10からは水銀 (Hg) と硫黄 (S) が多く検出され、水銀朱と確認された。分析 No.1～3、5、6、9、11からは、いずれもケイ素など土中成分に由来すると考えられる元素は検出されたものの、水銀は検出されなかった。一方で鉄が検出されているため、赤い発色は鉄によるものと推定できる。すなわち、顔料としてはベンガラにあたる。さらに、分析 No.1、3ではやや多量のパイプ状粒子が観察され、いわゆるパイプ状ベンガラであった。付表2に、結果の一覧を示す。SX01の試料は、いずれもベンガラでパイプ状ベンガラも確認されたが、水銀朱は検出されなかった。SX10の試料は、水銀朱とベンガラが確認されたが、パイプ状ベンガラは確認されなかった。4点が水銀朱と確認された。残り7点は、いずれも鉄 (Ⅲ) による発色と推定され、顔料としてはベンガラにあたり、うち2点からはいわゆるパイプ状ベンガラが検出された。遺構別には、SX01の3点はいずれもベンガラで、うち2点がパイプ状ベンガラであった。SX10の8点は、4点が水銀朱、4点がベンガラ(非パイプ状)であった。

付表2 分析対象および分析・観察結果

分析 No.	採取場所	備考	分析・観察結果		
			主な検出元素	その他 検出元素	結果
1	SX01 南西棺隅		Si,Fe,Al	Mg,P,S,K,Ca,Ti	パイプ状ベンガラ
2	SX01 棺内中央南		Si,Fe,Al	Mg,P,K,Ca,Ti	ベンガラ
3	SX01 棺西側板南西辺		Fe,Si,Al	P,S,K,Ca,Ti,Mn	パイプ状ベンガラ
4	SX10 北西棺隅	ピンク系	Hg,S,Si,Al	P,K,Ca,Ti,Mn,Fe	水銀朱
5	SX10 北西棺隅	紅系	Si,Al,Fe,Ca	Na,Mg,P,S,K,Ti,Mn	ベンガラ、カルシウム多い
6	SX10 南土器群南東		Si,Fe,Al	Mg,P,K,Ca,Ti,Mn	ベンガラ
7	SX10 玉群付近		Hg,S,Si	Al,P,K,Ca,Ti,Fe	水銀朱、リンやや多い
8	SX10 ㊸下		Si,Al,Fe,Hg	Mg,P,S,K,Ca,Ti,Mn	水銀朱、鉄多い
9	SX10 ㊹下		Fe,Si,Al	Mg,P,S,K,Ca,Ti,Mn	ベンガラ、リンやや多い
10	SX10 鉄刀㊺下		Hg,S,Si	Al,P,K,Ca,Ti,Fe	水銀朱
11	SX10 墓壇下地山	赤色物は微量	Si,Fe,Al	Mg,P,K,Ca,Ti	ベンガラ

付編2 芝山古墳群V-2号墳埋葬施設出土のガラス製小玉の蛍光X線分析

須山 貴史(株式会社イビソク)

カリガラスと推定したガラス玉13点は、いずれもコバルト着色と考えられる。ただし風化や汚れによって微量の酸化コバルトCoOを検出できなかった試料については、酸化コバルトと付随する酸化マンガンMnOを多く含む点、また銅イオンおよびそれに付随する酸化スズSnO₂、酸化鉛PbOをほぼ含まない点からの推測である。重元素の比率はいずれも酸化ルビジウムRb₂Oの割合が高く、カリガラスの傾向と一致する。No.36は銅イオンによる着色で青緑色を呈する。酸化スズSnO₂、酸化鉛PbOは検出しなかった。その他のアルカリケイ酸塩ガラス23点はいずれも青～紺色で、主にコバルトイオンによる着色と考えられる。銅イオンを0.1%以上検出した試料が複数含まれていたが、呈色との関連を今回は判別できなかった。主要成分のうち酸化アルミニウムAl₂O₃や酸化カルシウムCaOの値は表面状態による変動が非常に大きいため、高アルミナ・低アルミナのタイプ区別は行っていない。鉛バリウムガラスはNo.32の1点だった。青色透明で管切り法と考えられる。酸化コバルトCoOは検出されず、酸化鉄Fe₂O₃と微量の酸化銅CuOが着色材と考えられる。半定量値ではチタンTiの数値が高く出ているが、これはバリウムBaのLα線とLβ線の影響である。Ba Kα線とBa Lγ線も検出しているため、定性的な含有は明らかである。今回の分析試料は遺構年代がTK10型式(6世紀中葉)に比定されており、出土状況と年代が明らかかな古墳時代の鉛バリウムガラスの新たな出土例として重要である。古墳時代前期から後期中葉までに出土する鉛ガラスの類例は少ないが、3世紀後半の奈良県桜井茶臼山古墳の緑色透明管玉、5世紀前半の奈良県ペンション塚古墳の淡青色小玉、中期中葉の京都府宇津久志1号墳の青色小玉および濃緑色小玉などがあげられる。今回の分析試料は酸化カルシウムCaOを多く含む点で先述の類例と共通点があり、古墳時代後期後半以降の緑色の鉛バリウムガラスとは異なると考えられる。

付表3 半定量分析結果

No	色調	分類	MgO	Al2O3	SiO2	K2O	CaO	TiO2	MnO	Fe2O3	CoO	NiO	CuO	ZnO	Rb2O	SrO	Y2O3	ZrO2	SnO2	Sb2O3	HgO	PbO
1	青～紺色	ソーダ石灰ガラス	7.59	4.29	80.36	1.45	4.10	0.42	0.11	1.26	0.06	0.00	0.09	0.01	0.00	0.06	0.00	0.02	0.01	0.05	0.00	0.13
2	青～紺色	ソーダ石灰ガラス	9.12	4.74	74.83	0.81	7.82	0.38	0.13	1.59	0.06	0.01	0.14	0.01	0.00	0.07	0.00	0.02	0.00	0.06	<LOD	0.18
3	青～紺色	ソーダ石灰ガラス	6.17	4.37	76.80	2.79	5.75	0.37	0.15	3.00	0.00	0.01	0.08	0.01	0.00	0.09	0.00	0.02	0.00	<LOD	0.24	0.14
4	青～紺色	カリガラス	0.00	2.67	89.67	4.51	0.50	0.16	0.94	1.47	0.00	0.00	0.01	0.00	0.01	0.01	0.00	0.00	0.01	0.01	0.02	0.00
5	青～紺色	ソーダ石灰ガラス	11.41	3.67	75.74	2.34	4.19	0.15	0.08	1.97	0.04	0.00	0.12	0.01	0.00	0.08	0.00	0.01	0.00	<LOD	0.09	0.10
6	青～紺色	ソーダ石灰ガラス	2.86	7.42	80.34	0.66	3.80	0.49	2.20	1.94	0.04	0.02	0.08	0.01	0.00	0.06	0.00	0.04	0.00	0.01	0.03	0.01
7	青～紺色	ソーダ石灰ガラス	3.08	6.49	84.10	0.18	3.43	0.18	0.89	1.48	0.02	0.01	0.01	0.00	0.00	0.07	0.00	0.01	0.00	0.01	0.03	0.00
8	青～紺色	ソーダ石灰ガラス	0.00	4.07	88.82	0.43	3.94	0.34	1.06	1.10	0.08	0.02	0.02	0.01	0.00	0.08	0.00	0.02	0.00	<LOD	0.01	0.00
9	青～紺色	ソーダ石灰ガラス	5.77	2.82	84.72	0.00	3.28	0.33	1.53	1.33	0.05	0.01	0.02	0.00	0.00	0.07	0.00	0.02	0.00	<LOD	0.04	0.00
10	青～紺色	カリガラス	2.91	3.63	87.18	0.29	1.00	0.30	1.97	2.46	0.06	0.02	0.03	0.00	0.03	0.01	0.00	0.00	0.01	0.01	0.08	0.00
11	青～紺色	カリガラス	2.31	2.63	80.17	8.95	1.45	0.46	2.04	1.82	0.06	0.01	0.02	0.00	0.02	0.02	0.00	0.01	0.00	<LOD	0.01	0.00
12	青～紺色	カリガラス	0.00	3.91	86.81	3.73	0.79	0.50	1.91	2.23	0.02	0.01	0.03	0.00	0.02	0.02	<LOD	0.01	0.00	0.02	0.01	0.00
13	青～紺色	カリガラス	0.00	3.73	87.71	2.15	0.93	0.38	1.93	2.79	0.06	0.00	0.03	0.00	0.03	0.02	0.00	0.01	0.00	<LOD	0.23	0.00
14	青～紺色	カリガラス	5.77	2.57	77.94	8.11	0.88	0.35	2.09	2.13	0.04	0.02	0.02	0.00	0.01	0.02	0.00	0.01	0.02	<LOD	0.01	0.00
15	青～紺色	ソーダ石灰ガラス	0.00	3.47	89.12	0.04	3.21	0.43	1.78	1.65	0.06	0.02	0.05	0.00	0.00	0.05	0.00	0.02	0.01	<LOD	0.08	0.01
16	青～紺色	ソーダ石灰ガラス	0.00	4.23	87.19	0.00	4.87	0.48	1.32	1.64	0.04	0.00	0.02	0.01	0.00	0.06	0.00	0.03	0.00	0.00	0.09	0.00
17	青～紺色	ソーダ石灰ガラス	3.36	5.61	82.20	0.59	3.85	0.48	2.08	1.59	0.06	0.01	0.03	0.01	0.00	0.06	0.00	0.01	0.00	<LOD	0.04	0.00
18	青～紺色	ソーダ石灰ガラス	0.00	3.76	88.35	0.00	2.92	0.57	2.32	1.78	0.08	0.03	0.05	0.01	0.00	0.06	0.00	0.02	0.01	0.01	0.04	0.01
19	青～紺色	ソーダ石灰ガラス	0.00	6.62	80.15	0.06	7.77	0.96	2.22	1.82	0.08	0.02	0.06	0.02	0.00	0.06	0.00	0.02	0.00	<LOD	0.12	0.00
20	青～紺色	カリガラス	2.42	14.04	70.46	8.17	0.78	0.33	1.61	1.91	0.06	0.01	0.04	0.00	0.03	0.01	<LOD	0.01	0.01	0.01	0.10	0.00
21	青～紺色	ソーダ石灰ガラス	3.87	13.37	73.66	0.05	5.04	0.29	0.04	1.84	0.05	0.01	0.28	0.02	0.00	0.07	0.00	0.02	0.01	<LOD	0.86	0.52
22	青～紺色	ソーダ石灰ガラス	4.86	11.25	70.03	2.12	7.81	0.82	0.14	2.37	0.03	0.01	0.13	0.01	0.00	0.10	0.00	0.03	0.01	<LOD	0.12	0.16
23	青～紺色	ソーダ石灰ガラス	0.00	7.21	84.33	0.41	4.39	0.49	1.60	0.89	0.10	0.03	0.05	0.01	0.00	0.11	0.00	0.04	0.01	<LOD	0.27	0.05
24	青～紺色	カリガラス	3.05	9.91	75.17	1.06	2.72	0.43	1.21	2.22	0.00	0.01	0.01	0.00	0.02	0.00	<LOD	0.01	0.00	<LOD	4.17	0.00
25	青～紺色	ソーダ石灰ガラス	3.95	7.78	79.66	0.64	5.47	0.33	0.28	1.47	0.05	0.01	0.08	0.01	0.00	0.05	0.00	0.04	0.00	0.00	0.06	0.09
26	青～紺色	カリガラス	1.12	2.07	90.69	1.82	1.01	0.36	1.58	1.19	0.05	0.01	0.03	0.00	0.02	0.01	0.00	0.00	0.00	<LOD	0.02	0.00
27	青～紺色	カリガラス	0.00	4.48	85.67	5.63	0.58	0.39	1.48	1.64	0.06	0.01	0.03	0.00	0.01	0.01	0.00	0.00	0.00	<LOD	0.01	0.00
28	青～紺色	ソーダ石灰ガラス	4.14	5.21	83.09	0.05	4.46	0.50	1.25	1.14	0.02	0.00	0.06	0.01	0.00	0.03	0.00	0.01	0.00	<LOD	0.04	0.00
29	青～紺色	ソーダ石灰ガラス	0.00	8.06	79.55	0.63	7.43	0.21	0.81	2.43	0.06	0.01	0.19	0.02	0.00	0.12	0.01	0.07	0.03	0.04	0.03	0.33
30	青～紺色	ソーダ石灰ガラス	0.00	8.86	79.71	0.98	6.18	0.42	0.75	2.28	0.07	0.01	0.21	0.02	0.00	0.10	0.00	0.06	0.02	<LOD	0.03	0.30
31	青～紺色	ソーダ石灰ガラス	0.00	7.43	81.66	0.96	5.80	0.31	0.75	2.32	0.06	0.01	0.19	0.01	0.00	0.10	0.00	0.05	0.02	0.02	0.02	0.29
32	青～紺色	鉛バリウムガラス	3.15	0.85	60.49	0.00	2.43	6.38	0.41	2.26	0.00	0.00	0.03	0.00	0.00	0.07	<LOD	0.00	0.03	0.17	<LOD	23.72
33	青～紺色	ソーダ石灰ガラス	2.83	3.33	84.99	0.12	4.28	0.50	1.65	2.22	0.03	0.01	0.03	0.01	0.00	0.10	0.00	0.02	0.00	<LOD	0.01	0.00
34	青～紺色	カリガラス	0.00	2.32	80.24	9.89	0.91	0.44	2.02	0.08	0.00	0.01	0.02	0.01	0.02	0.02	0.00	0.01	0.01	<LOD	<LOD	0.00
35	青～紺色	カリガラス	1.40	3.44	84.63	7.48	0.00	0.12	0.95	1.45	0.03	0.00	0.03	0.02	0.03	0.00	<LOD	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01
36	青緑色	ソーダ石灰ガラス	1.89	10.12	77.58	1.68	4.20	0.45	0.09	3.04	0.00	0.01	0.78	0.01	0.01	0.06	0.00	0.09	0.00	<LOD	0.00	0.00
37	青～紺色	カリガラス	0.00	4.08	70.35	2.40	0.60	0.26	1.43	20.78	0.00	0.00	0.01	0.01	0.03	0.02	0.00	0.01	0.00	0.01	0.01	0.00

付表4 芝山古墳群古墳一覽

支群	古墳名	墳形	規模(m)	墳丘形態	周溝の有無	埋葬施設	棺の種類	墓壇規模(木棺規模)(m)	埋葬施設主軸方向	副葬品		周溝 ([埋:]は埋土内)	埴輪	備考	調査年度	地区名	調査機関
										棺内	棺外						
I	1	方墳	10×10.4	高塚墳	有	—	—	—	—	—	—	埋：須恵器(杯蓋・甕2)・鉄斧	—		1985・1986	86-A地区	当センター
	2	方墳	8.5×8	低墳丘墳	有	木棺直葬	木棺	2.8×0.7	N30°W	—	—	—	—		1985・1986	86-A地区	当センター
	3	方墳	11×10	低墳丘墳	有	木棺直葬	組合式木棺	3.9×1.5(3.0×1.0)	N30°W	杯身・杯蓋・広口壺・有蓋短脚高杯4・有蓋短脚高杯蓋3	(小口)甕	溝内突出部斜面：須恵器(杯蓋) 壇上施設土坑：須恵器(有蓋高杯蓋2・杯身) 埋：須恵器(臑口縁・壺口縁)	—		1985・1986	86-A地区	当センター
	4	円墳	径17.4	高塚墳	有	—	—	—	—	—	—	埋：須恵器(杯蓋・甕・横瓶)・鉄鏃・鉄鎌	—		1985・1986	86-A地区	当センター
	5	円墳	径20.0	高塚墳	有	—	—	—	—	—	—	—	—		1985・1986	86-A地区	当センター
	6	円墳	径7.4	低墳丘墳	有	木棺直葬	組合式木棺	2.3×1.5(1.4×0.4)	N0°	杯身・杯蓋・台付長頸壺	—	—	須恵器杯身・杯蓋を枕に南頭位で埋葬		1985・1986	86-A地区	当センター
	7	円墳	径8.1～9.3	低墳丘墳	有	木棺直葬	組合式木棺	2.9×1.4(2.2×0.7)	N77°E	—	(棺蓋上)広口壺 刀子	—	—		1985・1986	86-A地区	当センター
	8	楕円形墳	径3.2～5.0	低墳丘墳	有	木棺直葬	組合式木棺	1.5×0.8(1.0×0.5)	N15°E	—	(小口)短頸壺2 (棺蓋上)杯蓋	—	—		1985・1986	86-A地区	当センター
	9	楕円形墳	径3.0～5.0程度	低墳丘墳	有	木棺直葬	組合式木棺	4.4×1.6(2.7×1.4)	N28°W	—	(小口)短頸壺・土師器小型甕	—	—		1985・1986	86-A地区	当センター
	10	円墳?	—	—	一部検出	—	—	—	—	—	—	—	—		1985・1986	86-A地区	当センター
	11	円墳	径16.0	高塚墳	有	—	—	—	—	—	—	埋：須恵器(杯身・杯蓋・短脚有蓋高杯3・短脚有蓋高杯蓋2・短脚無蓋高杯・広口壺・臑)・滑石製紡錘車	—		2001～2003	02-A地区	当センター
	12	円墳	径11.0	低墳丘墳	有	木棺直葬	組合式木棺	3.4×1.8(2.6×0.5)	N9°E	杯身3・杯蓋3・提瓶 大刀・鉄鏃12	—	—	須恵器提瓶を枕に北頭位で埋葬		2016	D地区	当センター
	13	円墳	径11.5	低墳丘墳周溝	—	木棺直葬	箱形木棺か	3.8×1.7(2.7×0.5)	N7°W	杯身2・杯蓋・短頸壺・短頸壺蓋・広口壺2	—	—	—		2016	D地区	当センター
	14	円墳	径11.0	—	一部検出	—	—	—	—	—	—	—	—		2017	D地区	当センター
	15	円墳	径26.7	高塚墳	有	—	—	—	—	—	—	埋：須恵器(杯身3・杯蓋2・臑)	—		2017	D・G地区	当センター

芝山遺跡・芝山古墳群第22次(X-3区)発掘調査報告

支群	古墳名	墳形	規模(m)	墳丘形態	周溝の有無	埋葬施設	棺の種類	墓壇規模(木棺規模)(m)	埋葬施設主軸方向	副葬品		周溝([埋:]は埋土内)	埴輪	備考	調査年度	地区名	調査機関
										棺内	棺外						
I	16	円墳	復原径20.0	高塚墳		—	—	—	—	—	—	—	墳丘下層から布留式土器(布留0~1期)出土	2017	H地区	当センター	
	17	円墳	推定径19.0	低墳丘墳	有	木棺直葬	組合式木棺	5.3×2.4(3.5×1.3)	N5°E	杯身10・杯蓋10・甕・広口壺3 鉄鏃6・刀子・鉄鑿・鈍・曲刀鎌・鉄斧	(棺側)広口壺	—	—	周溝は掘割状 棺に赤色顔料を塗布	2019	O地区	当センター
	18	円墳	径20.3	低墳丘墳造り出しor前方部あり	有	木棺直葬	組合式木棺	4.4×2.0(3.5×1.3)	N15°E	杯身・杯蓋 大刀 土玉123点以上	(棺蓋上)杯身2・杯蓋2・無蓋高杯・広口壺・甕・横瓶 (棺蓋上)土師器直口壺・台付壺・ミニチュア台付壺3 鉄鏃19本以上・鉄剣・刀子2・鈍・鉄斧	—	—	棺底に赤色顔料を塗布 須恵器杯身・杯蓋を枕に北頭位で埋葬	2019	O地区	当センター
	19	円墳	—	—	一部検出	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2019	O地区	当センター
	20	円墳	径17.7	高塚墳	有	—	—	—	—	—	—	—	—	埋:須恵器(杯身8・杯蓋6・短頸壺・広口壺3・甕)・土師器(鉢3)	2019	P地区	当センター
	21	方墳	一辺7.0	低墳丘墳	有	木棺直葬	組合式木棺	4.1×1.3(3.2×0.6)	N47°E	壺口縁	—	—	—	棺に赤色顔料を塗布	2019	P地区	当センター
	22	方墳	一辺7.0	—	一部検出	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2019	P地区	当センター
II	1	方墳	10.4×11.4	高塚墳	有	—	—	—	—	—	—	—	埋:須恵器(杯蓋・杯身・甕3) 銀環	1977	77-W tr	城陽市教委	
	2	方墳	11×10	高塚墳	有	—	—	—	—	—	—	—	埋:須恵器(杯身・短脚高杯・甕)	1994・1995	94-1 tr	城陽市教委	
	3	方墳	—	—	一部検出	—	—	—	—	—	—	—	埋:須恵器(杯蓋・短脚高杯)	1994・1995	94-1 tr	城陽市教委	
	4	方墳	—	—	一部検出	—	—	—	—	—	—	—	須恵器(甕)	1994・1995	94-1 tr	城陽市教委	
III	1	方墳	一辺17.0	高塚墳	有	—	—	—	—	—	—	—	埋:鉄鏃3・鉄鎌・刀子・滑石製紡錘車 円筒埴輪、形象埴輪(馬・靱・甲冑)	2001~2003	02-F地区	当センター	
	2	不明	—	低墳丘墳	—	木棺直葬	組合式木棺	3.1×1.4(2.3×0.4)	N31°W	蛇行剣2・刀子	鉄鏃4	—	—	木棺の棺側周囲に粘土を置く	2020	R-4地区	当センター

支群	古墳名	墳形	規模(m)	墳丘形態	周溝の有無	埋葬施設	棺の種類	墓壇規模(木棺規模)(m)	埋葬施設主軸方向	副葬品		周溝 ([埋:]は埋土内)	埴輪	備考	調査年度	地区名	調査機関												
										棺内	棺外																		
III	3	方墳か	一辺約6か	低墳丘墳		木棺直葬	組合式木棺	2.9 × 1.1 (2.3 × 0.8)	N 29° W	短剣・鹿角装刀子	—	埋：鉄鏃3	—	東側に埋葬施設に平行する溝(鉄鏃出土)あり	2020	R-4地区	当センター												
IV	1	方墳	8.6 × 10.3	低墳丘墳	有	木棺直葬	割竹形木棺	4.5 × 1.6	N 70° E	高杯脚部片(布留式土器)	—	埋：土師器甕小片・壺小片	—		2016	B地区	当センター												
	2	方墳	15.8 × 15	低墳丘墳	有	木棺直葬	割竹形木棺	6.0 × 1.5 (4.8 × 0.6)	N 70° E	—	—	—	埋：土師器甕小片・壺小片	—		2016	B地区	当センター											
																			木棺直葬	割竹形木棺	— (6.7 × 0.6)	銅鏡(対置式神獸鏡)・瑠璃製勾玉・緑色凝灰岩製管玉13	—	—	—	—	—	—	—
																			木棺直葬	—	2.6 × 1.0	—	—	—	—	—	—	—	—
	3	方墳	復元一辺16.8	墳丘は地山削り出し	有	木棺直葬	割竹形木棺	6.8 × 1.9 (4.7 × 0.7)	N 2° W	堅櫛	鉄斧・鎌・刀子	—	壺形埴輪	棺床に赤色顔料を塗布北頭位で2体同時埋葬	2016	E地区	当センター												
4	方墳か	—	低墳丘墳		粘土槨	割竹形木棺	4.8 × 1.6 (4.7 × 0.4)	N 72° E	—	方格規矩八禽鏡	—	—	—	2019	S地区	当センター													
5	方墳	一辺3.7以上	低墳丘墳		木棺直葬	割竹形木棺	1.8 × 0.5 (1.5 × 0.5)	N 62° E	—	—	—	—	—	2019	S地区	当センター													
V	1	不明	—		一部検出	—	—	—	—	—	—	—	円筒埴輪片		2001～2003	02-G地区	当センター												
	2	円墳	復元径約27	低墳丘墳	有	木棺直葬	組合式木棺	3.5 × 2 (3 × 0.9)	N 5° E	杯蓋5・杯身5・提瓶・有蓋脚付長頸壺2・壺蓋2・広口壺刀子耳環2・ガラス小玉2	—	—	—	木棺に赤色顔料を塗布須恵器杯蓋を枕に北頭位で埋葬	2020・2023	V-5地区X-3区	当センター												
																		木棺直葬	箱形木棺	4.8 × 2.7 (3.1 × 0.9)	N 0°	杯蓋6・杯身6・有蓋長脚高杯3・有蓋長脚高杯蓋3・提瓶・短頸壺4・短頸壺蓋・小型甕・中型甕・直口壺2土師器直口壺大刀・刀子2・鉄鏃13以上ガラス小玉35	—	—	木棺に赤色顔料を塗布須恵器杯蓋を枕に北頭位で埋葬	—	—		
	3	円墳	径12.5	低墳丘墳	有	木棺直葬	組合式木棺	2.3 × 0.6 (1.8 × 0.4)	N 55° E	—	—	—	—	—	2020	V-5地区	当センター												
	4	円墳か	径14程度	低墳丘墳	有	木棺直葬	組合式木棺	4.2 m以上 × 2.1 (3.7 × 0.8)	N 46° W	杯身3・杯蓋3・広口壺鉄鏃8・刀子3・短刀・曲刀鎌杯身3・杯蓋2・提瓶・広口壺・平底壺	—	—	—	須恵器杯身・杯蓋を枕に北西頭位で埋葬	2020	V-5地区	当センター												
VI	1	円墳	径9.5	低墳丘墳	有	木棺直葬	組合式木棺	2.4 × 1.1 (1.4 × 0.6)	N 5° E	杯身・杯蓋4	短頸壺(棺側)鉄鏃2	—	—	須恵器杯身・杯蓋を枕に南頭位で埋葬	2018	L地区	当センター												

付表5 出土土器観察表

(): 復元値 [] : 現存値 - : 測定不可

番号	種類	器形	出土遺構	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	その他径 (cm)	残存率	色調	調整	胎土	備考
1	須恵器	杯蓋	SX01	15.3	5.1	—	—	完形	外・内：灰 (N5)	外：ヘラケズリ、ナデ 内：ナデ	密 (φ 1mm 大の砂粒を少量含む)	
2	須恵器	杯蓋	SX01	15.2	5.0	—	—	完形	外：灰 (N5) 内：灰 (N6)	外：ヘラケズリ、ナデ 内：ナデ	密 (φ 2~3mm 大の石を所々に含む)	
3	須恵器	杯蓋	SX01	15.6	5.55	—	—	完形	外・内：灰 (N5)	外：ヘラケズリ、ナデ 内：ナデ	やや粗 (φ 0.5~2mm 大の砂粒を多く含む)	
4	須恵器	杯蓋	SX01	15.6	5.4	—	—	完形	外：灰 (N5) 内：灰 (N6)	外：ヘラケズリ、ナデ 内：ナデ	密 (φ 1~2mm 大の石を所々に含む)	
5	須恵器	杯蓋	SX01	14.8	5.1	—	—	完形	外・内：灰 (N6)	外：ヘラケズリ、ナデ 内：ナデ	密 (φ 2mm 大の石を所々に含む)	
6	須恵器	杯身	SX01	12.8	5.5	—	受部径 15.7	完形	外：灰 (N5) 内：灰 (N6)	外：ナデ、ヘラケズリ 内：ナデ	密 (φ 1~2mm 大の石を所々に含む)	
7	須恵器	杯身	SX01	12.8	5.5	—	受部径 16.0	完形	外：灰 (N5) 内：灰 (N6)	外：ナデ、ヘラケズリ後ナデ 内：ナデ	密 (φ 1~2mm 大の石を所々に含む)	
8	須恵器	杯身	SX01	13.4	4.9	—	受部径 17.8	完形	外・内：灰 (N6)	外：ナデ、ヘラケズリ 内：ナデ	密 (φ 1mm 大の砂粒を少量含む)	
9	須恵器	杯身	SX01	13.3	5.05	—	—	完形	外：明オリープ灰 (5GY7/1) 内：灰 (N6)	外：ヘラケズリ、ナデ 内：ナデ	やや粗 (φ 0.5~1.5mm 大の砂粒を多く含む)	
10	須恵器	杯身	SX01	(13.8)	(5.0)	—	受部径 (16.5)	4/12	外・内：灰 (N6)	外：ヘラケズリ、ナデ 内：ナデ	やや粗 (φ 0.5~1mm 大の砂粒を多く含む)	
11	須恵器	提瓶	SX01	6.0	16.4	—	胴径 14.5	完形	外・内：灰 (N6)	体部片側外面：ヘラケズリ後カキ目 体部片側外面：ナデ	密 (φ 0.5mm 大の砂粒を少量含む)	把手付き
12	須恵器	広口壺	SX01	10.0	10.7	—	胴径 15.0	完形	外・内：灰 (N5)	外：ナデ、ヘラケズリ 内：ナデ	密 (φ 1mm 大の砂粒を少量含む)	肩部に刺突文
13	須恵器	蓋 (つまみ)	SX01	—	[2.3]	—	つまみ径 2.9	1/12	外・内：灰 (N5)	外：ナデ 内：ナデ	密	有蓋脚付長頸壺 (14) の蓋
14	須恵器	有蓋脚付長頸壺	SX01	—	[25.4]	15.7	頸部径 6.7	7/12	外・内：灰 (N5)	外：ヘラケズリ後ナデ、カキ目 内：ナデ	密 (φ 1mm 大の砂粒を少量含む)	脚部に長方形と三角形透かしが各3、体部外面に刺突文・波状文、脚部外面に波状文、口縁部~頸部と体部の一部を欠損
15	須恵器	蓋	SX01	9.85	4.2	—	つまみ径 2.3	10/12	外：灰 (5Y5/1) 内：灰 (N5)	外：ヘラケズリ後ナデ 内：ナデ	やや粗 (φ 0.5~3mm 大の砂粒を多く含む)	有蓋脚付長頸壺 (16) の蓋、外面に刺突文
16	須恵器	有蓋脚付長頸壺	SX01	7.45	25.5	11.85	胴径 14.0	完形	外：暗灰 (N3) 内：灰 (N6)	外：ナデ、カキ目 内：ナデ	やや粗 (φ 0.5~5mm 大の砂粒を多く含む)	脚部に長方形透かし穴が3か所、外面に刺突文・波状文

番号	種類	器形	出土遺構	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	その他径 (cm)	残存率	色調	調整	胎土	備考
22	須恵器	杯蓋	SX10	14.7	4.8	—	—	完形	外・内：灰 (N6)	外：ヘラケズリ、ナデ 内：ナデ	密 (φ 0.5 ~ 2mm 大の石を少量含む)	頂部外面にヘラ記号あり
23	須恵器	杯身	SX10	12.9	5.2	—	受部径 15.2	完形	外：灰 (N6) 内：灰 (N5)	外：ナデ、ヘラケズリ 内：ナデ	密 (φ 0.5mm 大の砂粒を少量含む)	底部外面にヘラ記号あり
24	須恵器	杯蓋	SX10	15.45	4.9	—	—	完形	外：灰～灰白 (N4 ~ 7) 内：灰 (5Y6/1)	外：ヘラケズリ、ナデ 内：ナデ	密 (φ 0.5 ~ 1mm 大の砂粒を少量含む)	頂部外面にヘラ記号あり
25	須恵器	杯身	SX10	12.7	5.5	—	受部径 15.8	完形	外：黄灰 (2.5Y5/1) 内：灰 (N5)	外：ナデ、ヘラケズリ 内：ナデ	密 (φ 1mm 大の砂粒を少量含む)	底部外面にヘラ記号あり
26	須恵器	杯蓋	SX10	14.4	4.3	—	—	完形	外：灰白・灰 (N7・6) 内：灰 (N5・6)	外：ヘラケズリ、ナデ 内：ナデ	密 (φ 6mm 大の石を1点含む)	
27	須恵器	杯身	SX10	12.15	4.3	—	受部径 14.7	完形	外：灰 (7.5Y5/1) 内：灰 (N6)	外：ナデ、ヘラケズリ後ナデ 内：ナデ	やや粗 (φ 1mm 大の砂粒を多く含む)	
28	須恵器	杯蓋	SX10	13.2	4.5	—	—	完形	外：暗灰 (N3・4) 内：灰 (N6)	外：ヘラケズリ、ナデ 内：ナデ	密 (φ 0.5mm 大の砂粒を少量含む)	
29	須恵器	杯身	SX10	12.0	4.6	—	受部径 14.4	完形	外：紫灰 (5RP5/1) 内：青灰 (5BG5/1)	外：ナデ、ヘラケズリ 内：ナデ	密 (φ 0.5 ~ 1mm 大の砂粒を少量含む)	
30	須恵器	杯蓋	SX10	14.3	4.3	—	—	9.5/12	外：灰白・灰 (N7・6) 内：灰 (N5・6)	外：ヘラケズリ、ナデ 内：ナデ	密 (φ 0.5mm 大の砂粒を少量含む)	
31	須恵器	杯身	SX10	12.4	4.4	—	受部径 15.0	完形	外：灰 (N6) 内：灰 (N5)	外：ナデ、ヘラケズリ後ナデ 内：ナデ	密 (φ 0.5mm 大の砂粒を少量含む)	
32	須恵器	杯蓋	SX10	13.7	4.6	—	—	完形	外：暗灰 (N6) 内：灰 (N3)	外：ヘラケズリ、ナデ 内：ナデ	密 (φ 2mm 大の石を少量含む)	
33	須恵器	杯身	SX10	12.0	4.0	—	受部径 14.2	完形	外：暗灰 (N3) 内：灰白 (N4)	外：ナデ、ヘラケズリ後ナデ 内：ナデ	密 (φ 2 ~ 5mm 大の石を少量含む)	
34	須恵器	有蓋長脚高杯蓋	SX10	16.6	6.65	—	—	完形	外：暗灰～灰 (N3 ~ 5) 内：灰 (N5)	外：ヘラケズリ、ナデ 内：ナデ	やや密 (φ 2 ~ 4mm 大の石を所々に含む)	つまみの周囲に二重の刺突文
35	須恵器	有蓋長脚高杯	SX10	13.9	21.4	16.4	受部径 17.05	完形	外・内：灰 (N6) 杯部外面：灰 (N4)	杯部外面：ナデ、丁寧なヘラケズリ 脚部外面：カキ目	やや粗 (φ 1 ~ 2mm 大の石を多く含む)	脚部に波状文と3段の長方形透かし穴あり
36	須恵器	有蓋長脚高杯蓋	SX10	16.4	6.6	—	—	完形	外：灰 (N4) 内：灰 (N5)	外：ヘラケズリ、ナデ 内：ナデ	密 (φ 2mm 大の石を所々に含む)	つまみの周囲に二重の刺突文
37	須恵器	有蓋長脚高杯	SX10	13.8	19.6	15.2	受部径 17.1	完形	外：暗青灰 (5PB3/1) 内：灰白 (N5)	杯部：ナデ、ヘラケズリ後ナデ、脚部：カキ目後ナデ	やや密 (φ 1mm 大の砂粒を多く含む)	脚部に波状文と3段の長方形透かし穴あり
38	須恵器	有蓋長脚高杯蓋	SX10	16.6	6.7	—	—	完形	外：灰 (N4) 内：灰 (N5)	外：ヘラケズリ後ナデ 内：ナデ	やや粗 (φ 1mm 大の砂粒を多く含む)	つまみの周囲に二重の刺突文
39	須恵器	有蓋長脚高杯	SX10	13.75	19.9	14.3	受部径 16.8	完形	外・内：灰白 (N5)	杯部外面：ナデ、ヘラケズリ 脚部外面：カキ目後ナデ	密 (φ 0.5 ~ 1mm 大の砂粒を所々に含む)	脚部に波状文と3段の長方形透かし穴あり

芝山遺跡・芝山古墳群第22次(X-3区)発掘調査報告

番号	種類	器形	出土遺構	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	その他径 (cm)	残存率	色調	調整	胎土	備考
40	須恵器	短頸壺蓋	SX10	10.3	3.9	—	—	完形	外：灰 (N5) 内：灰白 (5Y7/1)	外：ヘラケズリ、ナデ 内：ナデ	やや粗 (φ 1mm 大の砂粒を多く含む)	
41	須恵器	短頸壺	SX10	8.1	8.5	—	胴径 13.8	完形	外：灰 (N4) 内：暗灰 (N3・4)	外：ナデ、ヘラケズリ後カキ目 内：ナデ	密 (φ 0.2～2mm 大の石を所々に含む)	胴部中央に刺突文
42	須恵器	短頸壺	SX10	7.9	8.2	—	胴径 14.1	完形	外：灰 (10Y6/1) 内：灰 (N6)	外：カキ目、ヘラケズリ、ナデ 内：ナデ	密 (φ 1mm 大の砂粒を少量含む)	
43	須恵器	短頸壺	SX10	7.4	8.6	—	胴径 13.1	完形	外・内：灰 (N5)	外：カキ目、ヘラケズリ後ナデ 内：ナデ	やや粗 (φ 1～3.5mm 大の石を多く含む)	
44	須恵器	短頸壺	SX10	7.8	8.0	—	胴径 14.1	完形	外・内：灰白 (N4)	外：カキ目、ヘラケズリ後ナデ 内：ナデ	やや密 (φ 1mm 大の砂粒を多く含む)	
45	須恵器	提瓶	SX10	6.7	15.1	—	胴径 13.5	完形	外：暗灰～灰 (N3～6) 内：灰 (N6)	体部片側外面：ヘラケズリ後カキ目 体部片側外面：カキ目	密 (φ 2mm 大の石を所々に含む)	
46	須恵器	小型甕	SX10	16.2	22.3	—	胴径 20.0	完形	外・内：灰白 (N7)	頸部外面：カキ目、胴部外面：タタキ後カキ目、底部外面：タタキ 胴部内面：同心円文タタキ	密 (φ 0.5～4mm 大の石を所々に含む)	
47	須恵器	中型甕	SX10	18.4	29.65	—	胴径 19.3	完形	外・内：灰 (N6)	外面：ナデ、タタキ後カキ目 内面：ナデ、同心円文タタキ	やや粗 (φ 1～2mm 大の石を多く含む)	頸部に波状文
48	須恵器	直口壺	SX10	10.4	16.0	—	胴径 13.8	完形	外・内：灰 (N6)	外：カキ目、ヘラケズリ後ナデ 内：ナデ	密 (φ 1mm 大の砂粒を少量含む)	
49	須恵器	直口壺	SX10	10.5	14.65	—	胴径 13.4	完形	外・内：灰 (N5)	外：カキ目、ヘラケズリ後ナデ 内：ナデ	やや粗 (φ 1～2mm 大の石を多く含む)	
50	土師器	直口壺	SX10	10.7	12.25	—	胴径 12.8	完形	外・内：橙 (5YR6/8)	外：ナデ、丁寧なヘラケズリ 内：ナデ	密 (φ 1mm 大の砂粒を少量含む)	
51	須恵器	杯	SD02	(12.2)	(3.0)	—	—	1/12	外・内：灰白 (N2)	外：ナデ 内：ナデ	密 (φ 2mm 大の砂粒を少量含む)	口縁部片
52	須恵器	皿	SD02	(10.1)	(1.6)	—	—	1/12	外・内：灰白 (N2)	外：ナデ 内：ナデ	密	口縁部片

付表6 出土金属製品観察表

() : 復元値 [] : 現存値 - : 測定不可

番号	名称	出土遺構	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	備考
17	耳環	SX01	直径 : 1.8	—	0.2	銀製、東側出土
18	耳環	SX01	直径 : 1.85	—	0.2	銀製、西側出土
21	刀子	SX01	[10.8]	0.9 ~ 1.3	0.1 ~ 0.3	鹿角・木質残存
53	大刀	SX10	95.2	刃 : 3.0 ~ 3.5 茎 : 1.8	刃 : 0.3 ~ 0.8 茎 : 0.8	鞘口金具片あり、柄と鞘の木質付着 刀身中央に刀子錆着
53'	鞘口金具 ・鍔片	SX10	[4.1]	[3.2]	—	表 : 布目痕 裏 : 木質残存
54	鞘尻金具片	SX10	[3.9]	[1.6]	0.12	表 : 布目痕、裏 : 木質残存
55	鞘尻金具片	SX10	[4.0]	[2.4]	0.15	表 : 布目痕、裏 : 木質残存
56	鞘尻金具片	SX10	[3.9]	[1.7]	0.1	表 : 布目痕、裏 : 木質残存
57	刀子	SX10	[17.3]	0.7 ~ 1.2	0.3	大刀に錆着
58	刀子	SX10	[10.2]	0.8 ~ 1.5	0.2 ~ 0.3	鹿角・木質残存
59	鉄鎌	SX10	[4.4]	[0.3 ~ 0.8]	0.2 ~ 0.4	頸部～茎部、木質残存
60	鉄鎌	SX10	[6.5]	0.7 ~ 1.2	0.1 ~ 0.2	鎌身部
61	鉄鎌	SX10	[6.9]	[0.8]	0.3	頸部～茎部
62	鉄鎌	SX10	[10.4]	0.2 ~ 1.2	0.2	鎌身部の半分欠損、木質残存
63	鉄鎌	SX10	[15.65]	0.3 ~ 1.4	0.1 ~ 0.3	鎌身部先端欠損
64	鉄鎌	SX10	[11.4]	0.3 ~ 1.3	0.2 ~ 0.4	鎌身部先端・茎部末端欠損
65	鉄鎌	SX10	[11.8]	[0.5 ~ 1.2]	0.2 ~ 0.3	茎部欠損
66	鉄鎌	SX10	[4.8]	[1.2]	0.2 ~ 0.3	鎌身部、別の鉄鎌片が錆着
67	鉄鎌	SX10	[7.4]	[0.6 ~ 1.1]	0.2 ~ 0.3	鎌身部先端・茎部欠損
68	鉄鎌	SX10	[6.2]	[0.2 ~ 0.8]	0.2 ~ 0.4	頸部～茎部
69	鉄鎌	SX10	[3.7]	[0.6]	0.2	茎部
70	鉄鎌	SX10	[2.9]	[0.3]	0.2	茎部、木質残存
71	鉄鎌	SX10	[12.4]	0.4 ~ 1.3	0.2 ~ 0.4	鎌身部先端・茎部の一部欠損
72	鉄鎌	SX10	14.4	0.2 ~ 1.2	0.1 ~ 0.2	ほぼ完形

付表7 ガラス小玉観察表

番号	直径 (cm)	孔径 (cm)	長さ (cm)	色調	備考	番号	直径 (cm)	孔径 (cm)	長さ (cm)	色調	備考
19	5.9	2.0	4.5	透明感のある 瑠璃色		90	6.0	2.5	4.0	群青色	朱付着
20	6.0	1.0	4.0	透明感のある 瑠璃色	約1/3欠損	91	5.5 ～ 6.0	3.0	6.0	濃い群青色	朱付着
73	7.0	2.0	4.0	黒味がかつた 瑠璃色	朱付着	92	5.5	1.5	6.0	濃い群青色	
74	5.5	2.0	4.5	瑠璃色	少し朱付着	93	5.0	2.0	4.0 ~ 4.5	群青色	少量の朱付着
75	6.0	1.5	4.5	透明感のある 瑠璃色		94	4.5	1.0	4.5	濃い群青色	製作時に一部 欠損。孔内に 多く朱付着
76	5.0	1.0	4.0	瑠璃色		95	5.0	2.0	3.0	群青色	
77	5.0	2.0	4.2	群青色		96	5.0	1.5	4.0	群青色	製作時に一部 欠損
78	5.0	1.5	4.0	群青色		97	4.5	1.5	2.5 ~ 3.0	透明感のある 群青色	
79	5.0	1.5	3.0	群青色		98	4.5	2.0	3.0 ~ 3.5	群青色	
80	(5.0)	2.0	3.0	群青色	朱付着。約 1/2欠損	99	4.0	1.5	2.0	瑠璃色	
81	4.0	1.5	3.5	群青色		100	4.0	1.5	2.0	瑠璃色	
82	4.5	1.0	3.0	群青色		101	3.0	1.0	2.5	瑠璃色	
83	4.5	2.0	3.5	群青色		102	6.0	2.0	4.5	群青色	鉛バリウムガ ラス
84	5.5	3.0	3.5 ~ 4.0	群青色		103	5.0	1.5	4.5	群青色	
85	5.0	1.5	2.5 ~ 3.0	群青色		104	5.0	2.0	3.0	群青色	
86	5.0	3.5	5.5	瑠璃色	朱付着	105	5.5	2.0	3.5	群青色	
87	4.5	1.5	2.5 ~ 3.0	群青色		106	4.0 ～ 6.0	1.5	4.0	透明感のある 瑠璃色	
88	4.5	1.0	4.0	群青色		107	5.0	2.0	4.0	群青色	
89	4.5	2.0	3.5 ~ 4.0	群青色							

圖 版

図版第1 長岡京跡右京第1282次・井ノ内遺跡



(1) 調査地遠景(東から)



(2) 調査地近景(南東から)



(3) 1・2トレンチ全景(西から)



(1) 3-1 トレンチ全景(西から)



(2) 3-2 トレンチ東半全景
(東から)



(3) 4 トレンチ全景(東から)



(1) 1 トレンチ S B01 全景
(北西から)



(2) 1 トレンチ S P79
遺物出土状況(北から)



(3) 1 トレンチ S P01
遺物出土状況(南から)



(1) 2トレンチ S B23全景
(上が北)



(2) 2トレンチ S P75断面
(東から)



(3) 2トレンチ S P23断面
(南から)



(1) 3-2 トレンチ遺構検出状況
(東から)



(2) 3-2 トレンチ S D 100 断面
(南西から)



(3) 3-2 トレンチ S K 123
遺物出土状況(北から)



(1) 3-2トレンチSE101
上層遺物出土状況(西から)



(2) 3-2トレンチSE101
中層遺物出土状況(西から)



(3) 3-2トレンチSE101断面
(東から)

(1) 3-2トレンチSE101中・
下層遺物出土状況(南から)



(2) 3-2トレンチSH102
遺物出土状況(北から)



(3) 3-2トレンチSH102
竈断面(北東から)





(1) 3-2トレンチSK231
遺物出土状況(北から)



(2) 3-2トレンチSK112
遺物出土状況(西から)



(3) 3-2トレンチSK112
焼石出土状況(西から)



(1) 3-1トレンチSB131(SP142)断面(南から)



(2) 3-1トレンチSB131(SP145)断面(南から)



(3) 3-1トレンチSB131(SP162)断面(東から)



(4) 3-1トレンチSB131(SP156)断面(南から)



(5) 3-1トレンチSB131(SP131)断面(南から)



(6) 3-1トレンチSB131(SP144)断面(南から)



(7) 3-1トレンチSB132(SP132)断面(南から)



(8) 3-1トレンチSB132(SP166)断面(南から)



(1) 3-2 トレンチ SA111 (SP111) 断面(南から)



(2) 3-2 トレンチ SA111 (SP114) 断面(南から)



(3) 3-2 トレンチ SA111 (SP182) 断面(西から)



(4) 3-2 トレンチ SB103 (SP120) 断面(南から)



(5) 3-2 トレンチ SB103 (SP103) 断面(北から)



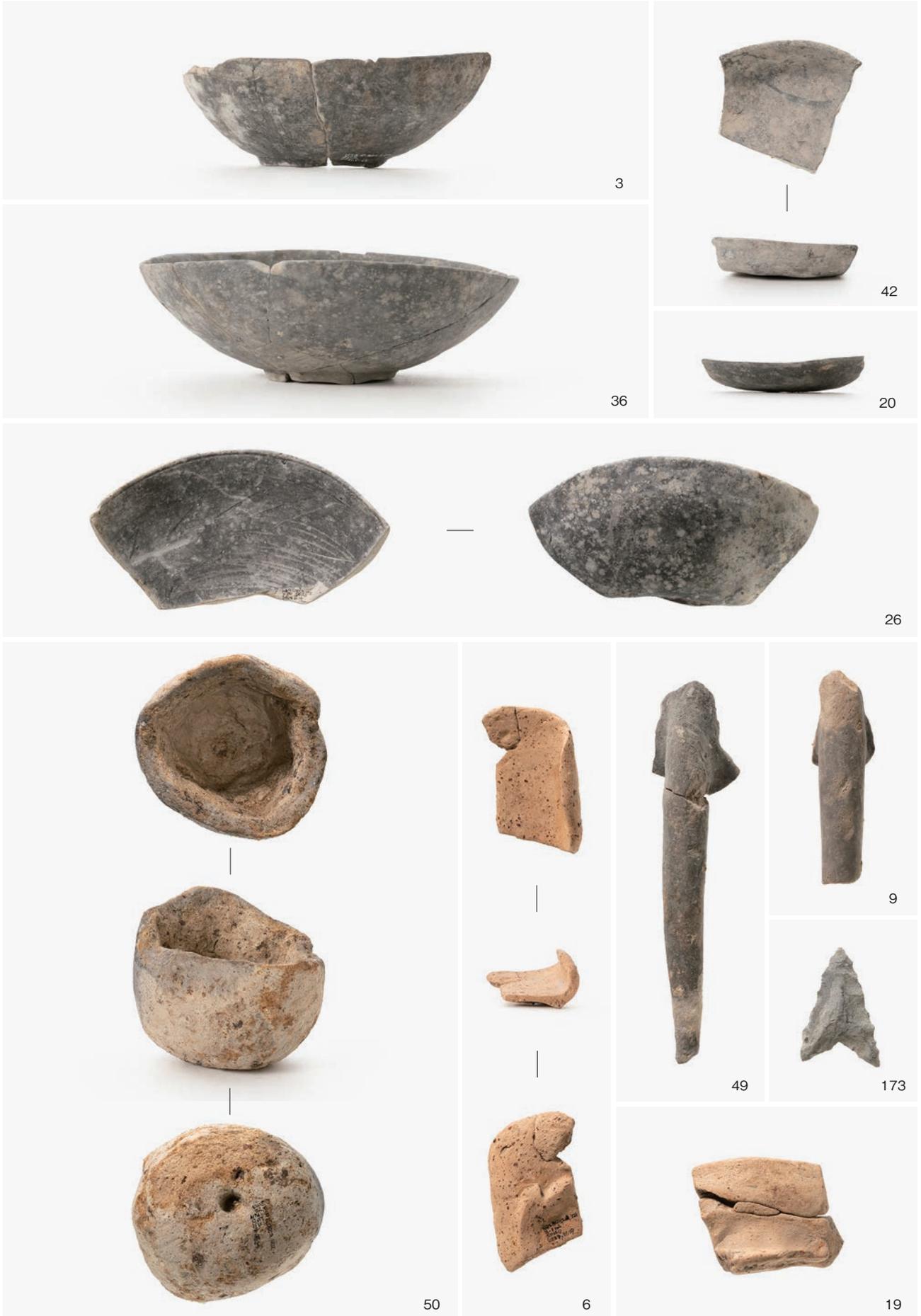
(6) 3-2 トレンチ SB103 (SP105) 断面(南から)



(7) 3-2 トレンチ SB103 (SP251) 遺物出土状況(南から)



(8) 3-2 トレンチ SB103 (SP249) 断面(南から)





(1) 出土遺物 2 S P144出土瓦器碗(内面)



(2) 出土遺物 3 S P144出土瓦器碗(外面)



出土遺物 4 SE101出土遺物 1



出土遺物 5 S E101出土遺物 2



出土遺物 6 平安時代・長岡京期・飛鳥時代



(1)出土遺物7 緑釉陶器、白磁、青磁(内面)



(2)出土遺物8 緑釉陶器、白磁、青磁(外面)



(1) 出土遺物9 瓦質三足羽釜



(2) 出土遺物10 弥生土器



出土遺物11 木製品

図版第1 芝山遺跡第22次

X-3区



(1) 調査トレンチ全景(上が北)



(2) 調査トレンチ遠景(西から)



(3) 調査トレンチ遠景(東から)

図版第2 芝山遺跡第22次

X-3区



(1) 調査トレン全景(北東から)



(2) 調査トレン全景(西から)



(3) V-2号墳周溝 S D02(北から)



(1) V-2号墳上層埋葬施設 S X01
(上が西)



(2) V-2号墳上層埋葬施設 S X01
(南から)



(3) V-2号墳上層埋葬施設 S X01
(北から)



(1) V-2号墳上層埋葬施設SX01
棺内北側副葬品出土状況
(南から)



(2) V-2号墳上層埋葬施設SX01
棺内南側副葬品出土状況
(北東から)



(3) V-2号墳上層埋葬施設SX01
完掘状況および下層埋葬施設SX10
検出状況(北から)



(1) V-2号墳下層埋葬施設S X10
(北東から)



(2) V-2号墳下層埋葬施設S X10
(西から)



(3) V-2号墳下層埋葬施設S X10
(北から)



(1) V-2号墳下層埋葬施設 S X10
棺内北側副葬品出土状況
(南から)



(2) V-2号墳下層埋葬施設 S X10
棺内大刀出土状況(南東から)



(3) V-2号墳下層埋葬施設 S X10
棺内ガラス製小玉出土状況
(東から)



(1) V-2号墳下層埋葬施設S X10
棺内南側副葬品出土状況
(東から)



(2) V-2号墳下層埋葬施設S X10
棺内南側副葬品出土状況
(西から)



(3) V-2号墳下層埋葬施設S X10
完掘状況(北から)



(1)出土遺物1 (S X01須恵器集合)



(2)出土遺物2 (S X10須恵器・土師器集合)



出土遺物 3 (S X01須恵器)

図版第10 芝山遺跡第22次

X-3区



出土遺物 4 (S X10須恵器)



出土遺物 5 (S X10須恵器・土師器・大刀・靱尻金具、S X01刀子・耳環)

図版第12 芝山遺跡第22次

X-3区



(1) 出土遺物 6 (S X10 刀子・鉄鏃)



(2) 出土遺物 7 (S X01・S X10 ガラス製小玉)

報告書抄録

ふりがな	きょうとふいせきちようさほうこくしゅう
書名	京都府遺跡調査報告集
副書名	
巻次	第196冊
シリーズ名	京都府遺跡調査報告集
シリーズ番号	第196冊
編著者名	松井 忍、小泉裕司
編集機関	公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
所在地	〒617-0002 京都府向日市寺戸町南垣内40番の3 Tel.075(933)3877
発行年月日	西暦2025年3月21日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "		m ²	
ながおかきょうあとうきょう 長岡京跡右京第 1282次・井ノ内遺跡	ながおかきょうしあお 長岡京市粟生 畑ヶ田	26206	15 107	34° 56' 20"	135° 41' 03"	20231106 ~ 20240209	550 m ²	道路改良
しばやまいせき 芝山遺跡・芝山 古墳群第22次	じょうようしとの 城陽市富野 上ノ芝	26207	56 90	34° 50' 47"	135° 47' 36"	20230817 ~ 20231030	122 m ²	道路新設

備考：北緯・東経の値は世界測地系に基づく。

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
ながおかきょうあとうきょう 長岡京跡 井ノ内遺跡	集落	弥生、古墳、 飛鳥、長岡 京期、平安、 中世	竪穴建物、溝、掘立柱建 物、井戸	弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、 瓦質土器、緑釉陶器、白磁、青磁、 毬杖ほか木製品	
しばやまいせき 芝山遺跡 芝山古墳群	古墳	古墳	埋葬施設2、周溝	土師器、須恵器、大刀、鉄鏃、鞆口金具、 刀子、耳環、ガラス製小玉	

所収遺跡名	要約
ながおかきょうあとうきょう 長岡京跡右京第1282次・ 井ノ内遺跡	古墳時代後期の溝、飛鳥時代の竪穴建物、長岡京期から平安時代の掘立柱建物・柵列・井戸、中世の掘立柱建物を検出。長岡京期の西四坊坊間東小路の推定地にあたるが、両測溝ともに検出できなかった。平安時代後期の井戸から出土した土師器、土器は一括性が高い。
しばやまいせき 芝山遺跡・芝山古墳群 第22次	周溝をもつ直径19mの古墳時代後期中頃の円墳で、埋葬施設(主体部)2基が木棺直葬されていた。2つの主体部は4分の1ほど重ねて設けられていた。上層の主体部S X01からは、須恵器、銀製耳環、ガラス小玉、刀子が、下層の埋葬施設からは須恵器、大刀、刀子、鞆口金具、鞆尻金具、鉄鏃、ガラス小玉がそれぞれ出土している。

京都府遺跡調査報告集 第196冊

令和7年3月21日

発行 公益財団法人
京都府埋蔵文化財調査研究センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3
Tel (075)933-3877(代) Fax (075)922-1189
<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

印刷 三星商事印刷株式会社

〒602-8358 京都市上京区七本松通下長者町下る三番町273
Tel (075)467-5151 Fax (075)467-5152